
幼馴染には負けられない！！

黒鋼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染には負けられない！！

【Nコード】

N5446P

【作者名】

黒鋼

【あらすじ】

いつかの時代、どこかの場所。

イツシュ地方にあるソウリュウシティのジムリーダー、シャガに息子が産まれた。

彼が目指すのは、ジムリーダーである父親、何よりイツシュリーグチャンピオン。

幼馴染との約束を胸に今日も行く！！

設定 & amp・手持ち（前書き）

ここには主人公たちの手持ちや設定などを載せておきます。

また、増える度に更新していく予定です。

設定 & amp・手持ち

20匹目時点

シュバルツ 10歳

父がソウリユウシティジムリーダー、シャガである少年。
幼い頃のシロナとの約束を胸に、チャンピオンを目指して旅をして
いる。

才能だけなら、現イッシュリーグチャンピオンであるアデクにも引
けを取らない・・・らしい

【普段のパーティー】

モノズ（色違い） Lv・65 【ひかえめ】 『はりきり』
ルカリオ Lv・51 【むじゃき】 『せいしんりょく』
フタチマル Lv・32 【おっとり】 『げきりゅう』

【夢】

イッシュリーグチャンピオン

もう一つは探している最中

?
?
?
?
?

シロナ 10歳

シンオウ地方で図鑑完成のための旅をしている少女。
幼いころのシユバルツとの約束は覚えてはいるものの、かなり劣化してきている。

現在、シンオウリーグチャンピオンと、学者の優先度の割合は4：6ぐらい。

【普段のパーティー】

ガバイト Lv.47 【ようき】 『すながくれ』

ポットイシ Lv.33 【ひかえめ】 『げきりゅう』

ロゼリア Lv.30 【おくびょう】 『しぜんかいふく』

【夢】

学者

シンオウリーグチャンピオン

?
?
?
?
?

アーティ 10歳

シュバルツの旅に同行している少年。

目的としては、自信の芸術家としての感性を磨くためである。
虫ポケモンを見ると、テンションが・・・

【普通のパーティー】

ハハコモリ Lv.36 【いじっぱり】 『よづりよこそ』

ジャノビー Lv.22 【おくびょう】 『しなりよく』

ホイーガ Lv.23 【ようき】 『どくのとげ』

メラルバの卵

【夢】

芸術家

ヒウンシティのジムリーダー

?
?
?
?

メリッサ 11歳

シロナの旅に同行している少女。シロナの旅に同行している理由は

単に面白そうだったから。
やや天然だが、シロナの暴走になんだかんだで付き合ってくれ
る良
い子。

【普段のパーティー】

ムウマ Lv.40 【おくびょう】 『ふゆう』
フワフワ Lv.27 【しんちょう】 『かるわね』
ゴースト Lv.33 【せっかち】 『ふゆう』

【夢】

コーディネーター

コンテストのマスターランクで優勝するのが今の目標

プロローグ（前書き）

もう一つの方が、完結しているわけでもないのに、思いついたから書き出してしまいました。

そのため、こっちの方は亀更新になると思います。

また、作者はゲームはやっていますが、アニメはホウエンの初期辺りからほとんど見ていないので、キャラの性格や口調が変になるかもしれません。

それでも読んでいただければ、よろしくお願いします。

プロローグ

「オギヤー、オギヤー!!」

とある世界のとある時代のとある地方のとある街の病院で、一人の子供が産声を上げた。

「父さん、父さん!!」

生まれたみたいよ!!」

「ああ、そうだな」

「もつと喜んでよ!!」

私の弟か妹で、私たちの新しい家族なんだから!!」

「これでも、十分喜んでいる」

「そんな風に見えないから、こう言ってるの!!」

「……………」

分娩室前の廊下に置いてある椅子には一人の男が座っており、そんな彼の近くを興奮した様子で一人の少女が忙しなく動き回っている。会話から察するに、今生まれた子供の父親と姉なのだろう。

男は服の上からでも鍛えているのが分かるほど筋骨隆々とした体形で、椅子に座っているため分かりにくいのが、背も高い。

顔には立派すぎるほどの髭を黒々と蓄えており、いかにも厳しい雷親父といった雰囲気醸し出している。

そんな彼でも、やはり子供が生まれたのは嬉しいのだろう。
髭で分かりにくいのが、口元をわずかに綻ばせている。

そんな父親とは対照的に、娘の方は体全身を使い喜びを表している。
父親とは違い肌の色は黒く、活発的な行動と重なって、非常に健康的な少女に見える。

やや癖のある黒い髪を腰まで伸ばし、それを背中の中ほどで黄色い
リボンで結んで纏めている。

「……………」

愛娘の行動を視界に捉えながらも男は考える。

……どんなポケモンと育っていくのだろう

気が早いというなかれ、彼が期待して育てた娘は彼の期待とは真逆
の方向に育ってしまったのだ。

彼の妻は理想通りだと喜んでいたが、彼としてはもっとバトルに興
味を持って欲しかった。

なので『今度こそは』と、密かに決意を固めていたりする。

「あれ、アデクのおじさん…?」

今まで廊下を動きまわっていた 注意したが全くやめる気配がな
い 娘がふと戸惑いの声をあげた。

その声につられ、男も視線を娘が声をあげた方へと向ける。
そこには、

「おお、久しぶりだな、アーシエ。

しばらく見ないうちに大きくなりおって」

そう言って、娘の頭を撫でるイツシユリーグのチャンピオンの姿があった。

「えへへ…」

あ、そうだ、ちょうどさっき私の弟か妹が生まれたんだよー！」

「ほう、そうか。」

良かったじゃないか。

だが、これからはアーシエもお姉さんだからな、いつまでもパパやママに頼ってばかりじゃ駄目じゃぞ」

「うんー！」

私頑張るー！」

男としてはこのままチャンピオンを娘に任せて一刻も早く生まれたばかりの子供に会いたかったが、流石にそういう訳にもいかない。分娩室の扉は未だに看護師の出入りが激しく、依然として親子の対面が不可能な事を意味していた。僅かに溜息を洩らしながら椅子から立ち上がり、娘と談笑している赤毛の男に話しかける。

「……何の用だ、アデク…？」

その声気付いたのか、娘　　アーシエ　　から視線を上げ、アデクは男に視線を向けた。

「お主は相変わらず堅っ苦しいのぉー、シヤガ。

子供が生まれたんじゃろ？

もっと嬉しそうにせんかい」

「余計なお世話だ。」

お前こそ、もっとチャンピオンとしての貫禄でも出したらどうだ
…?」

男 シャガ はやや剣呑な口調でアデクと話し出す。

アデクもそんなシャガの空気を察したのか、すぐさま話題を切り替える。

「…まあ、こんなめでたい場所で喧嘩するつもりもないから、さっさと用件を済ませるとするかの」

「…初めからそうしてくれ」

そんなチャンピオンの言葉に頭を押さえるシャガ。
どうやらこの二人、あまり相性が良くないようだ。

「うーん、どっちだったかな…?」

そう言いながら自身の上着の中を探り出すアデク。
アーシエが興味深そうに、シャガが興味なさそうに見守る中、しばらく探し続けていた。

「おお、有った有った」

そうして、ようやく目的のものが見つかったのだろう。
嬉しそうな顔になりながら、上着の中に入れていた自身の手を引っ張り出した。

引っ張り出した手の先には、

「モンスターボール…?」

そうアーシェが呟くように、一つの赤と白で色分けされたボールが握られていた。

「ほれ」

そう言っつて、ボールをシャガに投げ渡すアデク。(決して、シャガを捕まえようとしている訳ではない)

「……………」

パシ

シャガは、投げ渡されたボールを無言で受け取り怪訝そうな顔を浮かべる。

そんな彼の顔を見て、アデクは説明を始めた。

「そいつには、とあるポケモンの卵が入っとる」

「とある…?」

「ああ、安心せい。

お前の息子が娘なんじゃから、ちゃんとドラゴンポケモンじゃよ」

「どついう意味だ…?」

「なに、誕生祝いじゃよ。

バトルをするしないにしろ、ポケモントレーナーとして育てるつもりなんじゃろ?」

それなら、最初の一匹は卵から一緒に育ってきたポケモンがいい
と思っただけな」

「そうか……わざわざ済まないな」

卵から育てたポケモンが良いというのはシャガ自身賛成だ。
ポケモンとの信頼関係が格別なものになるだろうから。

「なあに、気にするな。」

これからカンナギにも行かんといけんかったからな。

その途中に寄っただけのことじゃ」

「カンナギ……？」

何かあるのか？」

態々別の地方にまで他の地方のチャンピオンが出かけるなど、何か
よっぽど大きな事件でもあったのかと心配になったシャガだが、

「ああ、あそこの婆さんに孫が生まれたとかで祝いを持って来いと
言われてな……」

その言葉にすぐさま心配を取り消した。

それに、

「そうか……あそこにも子供が生まれたのか」

自分の子供が生まれた日に知人の家にも子供が生まれていることを
知ったのだ。

どうしても、その子供と自分の子供に何らかの関係性があるのでは
ないかと思ってしまう。

「まあ、お前も一回ぐらいに会いに行くと良い。
勿論、子供が落ち着いてきたらになるじゃろうがな」

「ああ、そうしよう……そういえば、その子の名前はなんて言っただ……？」

ふと、疑問に思ったのかシャガがアデクにそう問いかける。

「うん？カンナギのか……？」

「ああ」

「確か……シロナ、だったはずじゃが……なんじゃ、子供の名前の参考にでもするつもりか……？」

「いや……特に何かある訳ではないが……」

「……まあ、いいわ……
じゃあまたな」

そう言つて、病院から出て行くチャンピオン。
そんな彼の後姿を眺めながら、再び席に座る彼の手には先程アデクから渡されたモンスターボールが握られていた。
そして、彼の悩みは、

……どんなポケモンと育っていくのだろう。
……アデクから渡されたポケモンで大丈夫だろうか……？
……チャンピオンだから大丈夫なはずだが……
念のため、他の卵に変えるべきか……？

いや、しかし……

より深刻なものへと変化していた。

?
?
?
?

それから早5年。

「姉さん……起きてよ、アーシエ姉さん!」

「うゝん…後1時間…」

「長いよー!!」

そんなに待てないってば!!」

一人の少女が、自分の弟と思われる男の子に起こされていた。

「もうシロナちゃんたち着いちゃうってば!!」

「シロナちゃん!？」

「うわ!!」

一人の人物の名前が出た途端、今迄まどろんでいたのが嘘のように飛び起きる少女。

そんな姉の豹変に弟は驚きの声をあげ、その場に立ち竦む。

そして、飛び起きた方はと言えば、

「ああ!!」

もうこんな時間!!」

時計を確認すると同時に叫び、転がる様に階下へと駆け下りて行った。

「……はあ」

取り残された少年はこんな扱いには慣れていいのか、溜息を吐き、自身も部屋を出て階段を下って行った。

少年は短く刈り上げたプラチナブロンドの髪を乗せた自身の頭を弄りながらリビングに入る。

そこでは既に姉が席について、朝食を急いで口に入れている所だった。

そんな姉の様子をほほえましく見護る母親と、やや険しい表情で新聞を呼んでいる父親。

「あら、おはよう、シュバルツ。

昨日はちゃんと眠れた…?」

そんな彼に気づいたのか、母親が声をかけてくる。

「おはよう、母さん。

うっん、シロナちゃんに会うのが楽しみで中々寝れなかった」

まあ、それでも22時には熟睡していたのだが…

「おはよう、シュバルツ」

「おはようございます、父さん」

寡黙な父親も彼に気づき声をかける。

それにきちんと返事を返すあたり、姉とは違ってかなり躰が行き渡っているのが良く分かる。

「卵の様子はどうだ…？」

「なんか、時々動いてはいるんだけど…」

「まあ、気長に待ちなさい。

焦っても良いことはないぞ」

「はあい」

少年 シュバルツ は一度父のポケモンバトルを見てからというもの、自分もすぐにポケモンと触れ合いたかったのだが、父から卵から孵ったポケモンが自身の最初のパートナーだと言い渡されており、渋々それに従っている。

そして、姉はとくに自分のポケモンを持っており、その事が尚一層彼のポケモンに対する憧れを増幅させているのだ。

時期的には、もう孵っても良いころなのだが……

そんな朝の団欒の中、

ピンポン

家にチャイムの音が鳴り渡る。

「あら？」

もついらっしやったのかしら…？

アーシエ、シュバルツ、早く食べちゃいなさい」

「はい」

そう返事をして、迎えに出た父親と母親を横目に、更にスピードを上げて食事を頬張るアーシエと、姉程ではないがそれなりに速いスピードで食事を片付けて行くシュバルツ。

喉に詰まりそうになりながらも、必死に掻き込んでいく。

そして、彼らがなんとか食事を食べきった時、リビングに複数の足音が近づいてきて……

ここから始まるのは、一人の少年が少女と共に創り上げていく冒険、もしくは恋愛、はたまた喜劇。

さあ、彼らの未来に待ち受けている世界とは…

プロローグ（後書き）

こちらは、基本3人称で書いていこうと思っています。

1 匹目 モノズ 孵化（前書き）

プロローグの前書きでも書きましたが、この作品は亀更新、すなわち凄く遅い速度での更新となると思います。

早くて週一、遅ければ一月は更新しないものと考えていてください。

作者の都合で申し訳ありませんが、よろしく願います。

1 匹目 モノズ 孵化

シロナたちが到着して挨拶もすませると、子供は子供に、大人は大人に自然と分かれ、互いの話に花が咲いていた。

母親同士は母としての悩みや子育てについて情報を提供し合い、父親同士は父親として息子、あるいは娘の今後の教育方針や将来について夢を膨らませたりしていた。

そして、シュバルツとアーシエ、それにシロナを含めた3人は2階に上がり、ポケモンの話で盛り上がっていた。

「おいで、キバゴー!!」

『キバ』

「うわ〜」

ポケモンの話題が盛り上がったのだから、実際にポケモンを持っているアーシエがポケモンを呼びだしてもおかしくはない。おかしくはないのだが・・・

「あ〜ん、相変わらず可愛いんだからこの子は!」

『キ、キバ・・・』

呼び出したトレーナー本人が真つ先に奇声をあげ、自分のポケモンを抱き上げてしまうのは如何なものだろうか・・・

抱きあげられているキバゴの方はというと、慣れているのか、戸惑いながらも諦めたような視線をアーシエに注いでいる。

かといって、その視線に嫌悪感がある訳ではなく、ただ単に自分の

主人を見守っているような暖かなものであった。

「あ、あはは。」

「ごめんね、姉さんってポケモンを出すと、いつつもこんな風になるんだ」

家族の少し変わった部分を見られた事が恥ずかしいのだろう。

シュバルツは照れたように頬を淡く朱に染め、姉の奇行に視線を向けたままシロナに話しかける。

「……………」

「シロナちゃん……？」

自分の言葉に反応がないことに疑問を持ったのか、シュバルツがシロナの方へと視線を向ける。

向けられたシロナはというと羨ましそうにアーシエとキバゴの様子を見つめていた。

そして、シュバルツに見られていることなど気付きもせずポツリと一言漏らした。

「……………良いなあ……………」

その一言には様々な想いが込められていた。

アーシエの様に自分もポケモンと触れ合いたいという願望。

今まで見てきた様々なトレーナーの様にポケモンと成長していきたいという憧憬。

そして何より大きな想いは、早く自分もポケモンが欲しいという欲求。

自然とシロナは自分の腰に手を伸ばす。
そこには、自分が外出するときには常に持ち歩いているボールがあった。

手に取り、それを眺める。

すると、そんな彼女を見ていたシュバルツが声をかける。

「ねえ、シロナちゃん。

それって……?」

見られているとは思わなかったのだろう。

声をかけられたシロナは慌てて返事を返す。

「あ、あの、これは、その……!?!」

悪いことをしているのが見つかった子供のような反応だが、シュバルツは特に気にした様子もない。

「へー、シロナちゃんも持ってたんだ。

見せて、見せて」

「うー……」

シロナが既にポケモンを持っているものだと思ったシュバルツは、姉がキバゴを出したのだから、と当然のようにシロナにポケモンをボールから出すように催促する。

そんなシュバルツの期待とは対照的に、シロナは落ち込んでいく。
そして、

「……ま……の……」

「え？」

「私はまだ持つてないの・・・!!」

そう、今まで溜まっていた不満を晴らすかのように大声でそう言い、手にしていたモンスターボールを開き、中に納められていたモノを自分の手の中に出す。

そして、彼女の手中に出されたのは、

「卵・・・？」

そう、卵。

まだ小さい彼女が持つにはやや大きめなサイズの卵。

その辺りの鳥の卵を持っている訳がないのだし、大きさや模様からして恐らくポケモンの卵なのだろう。

「お祖母ちゃんからもらったんだけど・・・」

生まれる気配がない、とシロナは話す。

時々動いているのはシュバルツから見ても分かる。

それならもう少して生まれるのではないだろうか、とシュバルツは疑問に思うが、シロナの様子を見るとそんな簡単なことではないことが分かる。

「気付いた時には私の近くにあつて、それからずっと一緒にいるのに」

それこそ、普段遊ぶ時は勿論、食事の時や寝る時、更にはお風呂に入っている時からトイレの中にまで。

ボールから出す時もある、ボールの中に閉まっている時もある。それでも、四六時中一緒にいるのは確かだ。それらの今までの事をシロナから聞きながら、シュバルツは何か引っかかるものを感じていた。

《・・・どこかでそんな生活している人がいたような・・・？》

「ふくん、それってシュバルツと一緒にだね」

『キバ』

「うわ!!」

ね、姉さん。

戻ってきてたの!？」

「うん、ついさっきね」

いつの間にやらキバゴを可愛がるのを中断し、二人の会話に混ぜてきたアーシエ。

それでもキバゴは自分の腕で抱きかかえたままだし、シュバルツの『戻ってきた』という発言を訂正する訳でもない所を見るとまだ少し不安が残る。

「あの・・・シュバルツくんと一緒に・・・？」

そんなアーシエに言葉をかけるシロナ。

先程のアーシエの発言に興味があったのか、それとも純粹に意味が分からなかったのか、どうかは分からないがそんな言葉がシロナの口から洩れていた。

「うん・・・？」

ああ、シロナちゃんは知らないんだったわね。

うちの弟もついこの前までシロナちゃんとほとんど同じこととしてたのよ」

「え・・・？」

シロナの視線がアーシェからシュバルツへと移る。

そこには、自身の疑問が解決しすっきりしたと同時に、自身の過去を暴露されることによる羞恥によって顔を紅くしているシュバルツの姿があった。

「いや、シュバルツも半年前ぐらい前まではそんなことしてたんだよ。

どこに行くにも、アデクのおじさんからもらった卵を持ってたんだから。

・・・まあ、父さんとOHANASIしてからはそこまで熱心ではなくなっただけだね・・・」

そんな姉の発言に、

「姉さん！..！」

耐えられなくなったのか、シュバルツが食って掛かる。

いや、掛かるうとして、

「・・・そっか・・・」

“お揃い”だね、私たち！..！」

先程までの暗い表情をどこかへ消し去ったシロナの発言に止められ

た。

「シュバルツくんも、見せてよ!!」

さらに続けて要求されたシロナからの“お願い”に、

「う、うん」

頷いてしまい、完全に姉に食って掛かるタイミングを失ってしまった。

「ほら、さっさと持ってくる!!」

さらに姉からもそう言われ、自分が持つてこないとどうにもならない空気になってしまった。
そんな空気を察したのか、

「・・・分かったから、ちょっと待ってて」

そう言い残して自分と両親の部屋に向かうシュバルツ。

同年代の子供達より幾らか大人びているとはいえ、シュバルツも5歳程の子供。

当然、自分の部屋など与えられている訳がない。

一方の姉は9歳という少し早い年齢ではあるが、自分の部屋が与えられていた。

ただし、将来的には二人の子供の部屋にするつもりなのだろう。

アーシエが一人で使うにはやや広い。

そんな彼女の領域に、今はシュバルツにシロナ、それにアーシエが揃っていたのだ。

そうして、シュバルツが部屋に置いてあったモンスターボールを手

に取り、シロナとアーシエの待つ部屋へと戻って来た。

「おかえりー」

「早く早く!!」

そうして戻って来たシュバルツに浴びせられたのは、彼が部屋から抜けていた数瞬の間に何かあったのか、やる気の失われた姉からの気だるげな返事と、対称的なシロナからの元気溍刺な催促だった。

「う、うん」

やたらと元気の良いシロナに戸惑いながらも、ボールを開き中に納まっている卵を手の中へと取り出すシュバルツ。

「わー!!」

ほんとにおんなじだ!!」

シュバルツの腕の中に納まっている卵は、シロナの腕の中にある卵とは模様の色や位置が違っていたりと細部が違うが、同じくポケモンの卵というのは一目瞭然だった。

「ね・・・?」

言った通りだったでしょ」

自分の手柄という訳でもないだろうに、先程までの気だるさはどこへやら、上機嫌に話すアーシエ。

「うん!!」

そんなアーシエの言葉に頷き返すシロナを見ながらシュバルツは何とも言えない表情になる。

『・・・どうせなら、生まれてきたポケモンをシロナちゃんに見せてあげたかった』と。

また、シロナもシュバルツが卵を見せてくれたことにより思った。また、シロナもシュバルツが卵を見せてくれたことにより思った。

『・・・3人でポケモンと一緒にどこかに行けたらなー』と。

この面子の中では最年長者のアーシエは、

『・・・あらあら、二人とも初々しいんだから・・・』

どこか近所に住んでいる小母さんの様な感想を抱いていた。

『バゝゴ・・・？』

アーシエはともかく、二人が思っていたことが卵に伝わったのか、キバゴがボールから出されていることが関係しているのか分からないが、

「わわ・・・!!」「」

突然二人が抱き抱えていた卵が激しく震えだした。

突然のことに戸惑い、どうしていいのかわからない二人を、

「おお!!」

大丈夫大丈夫、床に置いてしばらく待っててごらん」

アーシエが驚きながらも（珍しく）年長者として二人にアドバイスを送る。

そんなアーシエの言葉に従い、自分の手から卵を離し、そっと床に置く二人。

だが、床に置いてても震えは治まらない。

二人は床に置くことによつて、震えが治まってくれることを期待していたのだが、全くそんな様子は見受けられない。むしろ、より激しくなっているようにも見える。

「姉さん・・・!?!」

「アーシエさん・・・!?!」

不安になったのか、床に置くよう指示を出したアーシエに対して二人の継るような視線が向けられる。

「だいじょぶだから・・・」

とりあえず、落ち着きなさいって」

ガシツ、と戸惑う二人の方を押さえつけ、自分に向いていた視線を震えている卵へと向けさせる。

いつの間にかキバゴをボールの中へと収め、二人の肩に両手を置き話し出す。

「いい？」

これから二人は夢にまで見た自分のポケモンに会えるの」

「え!?!」

更に卵の震えが大きくなる。

「それがどんなポケモンなのかは私も知らないし、二人とも知らないと思う」

コクコク

卵の震えが今までにない程大きなものへと変わる。

「期待と不安……って言っても分からないだろうけど……すごく泣きだしたくなってると思う。」

だから、最初に先輩トレーナーとして二人にアドバイスしといてあげる」

シュバルツとシロナの視線は、アーシエの言葉を聞いてからずっと卵に向けられている。

卵の震えが小さくなり、遂にはなくなってしまう。

「産まれてくるポケモンがどんな子であろうと、しっかりと受け止めてあげなさい」

二人の乱れていた幼い心が、アーシエによって均衡を取り戻していく。

卵は完全に止まってしまったが、今度は中から音が聞こえ出す。

「産まれてくる子はコイキングかもしれないし、フシデかもしれない。
い。」

「だけど、どんなポケモンだって最初は皆同じなの」

凧を取り戻した二人の心にアーシェの言葉が沁み渡っていく。

音は次第にはつきりと聞こえてくるようになり、そのうち卵に罅が入る。

「姿や形は違っても、何にも知らない所は私たち人間と一緒に」

沁み渡った言葉は二人の心に強い根を張り巡らせる。

卵の罅が入った部分が中から突き崩される。

「だから、あなた達がその子の親代わり・・・うつん、親として立派に育ててあげなさい。」

自分の子供を立派に育てるためには、何よりも親からの愛情が必要だから」

張り巡らされた根は土台となり、やがて一つの芽を出す。

突き崩された所から、そのポケモンの一部と思わしき部分が見える。

「そのためには、まず受け入れてあげること。」

彼、彼女たちの全てを認めてあげなさい。

叱る、叱らないはその後。

・・・以上、父さんと母さんからの受け売りでした」

芽はいずれ大きな樹となってくれることだろう。

そのポケモンの一部は必死に足掻いて、卵から這い出ようとする。

「じゃあ、後は頑張って！！」

そう言つてアーシエは部屋から出て行つた。

一応、気を利かせたつもりなのだ。

そして、彼女が出て行つた部屋の中では遂に生まれようとしていた。

シュバルツの持っていた卵からは“緑”の腕、もしくは足と思われ
る部分が卵の殻を割っている。

シロナの持っていた卵からは青い鱗のようなものが卵の殻を斬り裂
こうとしている。

「ゴクリ・・・」

二人が固唾を呑んでその様子を見守っていると、遂に、卵の殻が完
全に崩壊し、今迄凡そ5年間卵の中で眠っていたポケモンが姿を現
した。

『モノ〜！！』

シュバルツの卵から出てきたのは、基本的な体色が“緑”で、黒い
体毛が頭部から首を通り肩の辺りまでを覆っている『そばうポケモ

ン『モノズ。』

『フゝカ!!!』

シロナの卵から出てきたのは、全体的な体色が青で統一され、顎と
いうか下腹部の部分がオレンジで、耳?や尻尾?と思わしき部分に
水色の輪が模様になっている。『りくザメポケモン』フカマル。

「……………」

自然と近寄っていくシュバルツとシロナ。
2匹も自分の相手が分かっているのか、

『ノズ?』

モノズはシュバルツへ、

『フカ?』

フカマルはシロナへと近づいていく。
顔を寄せ、二人の匂いをかぐ2匹。
そんな2匹を見て二人が最初に取った行動は、

『モノゝ!!!』

『カマゝ!!!』

アーシェと同じようにカ一杯、自分のポケモンを抱きしめる事だっ
た。

2 匹目 リオル 旅立ち（前書き）

明けましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

幼少期の話を書こうとして断念。

いやまあ、ネタはいくらでもあったんですが、あんまりいじらない方がいいかなー、なんて思ったり・・・

2 匹目 リオル 旅立ち

シュバルツがモノズを、シロナがフカマルを卵から孵したあの日から5年。

二人は10歳になっていた。

眠っている少年の頭の中に過去の映像が夢として再生される。

『……シロナちゃんは将来の夢ってある……?』

5歳の姿のシュバルツとシロナが、互いに自身の初めてのパートナーとなったポケモンを腕で抱きかかえている。

『うーん……学者さん!!』

シュバルツくんは……?』

『……僕は……父さんに勝ってイツシユリーグに挑戦してチャンピオンになる!!!』

10歳になりポケモンとそれぞれの地方で旅に出ることになった二人。

シロナの方が一月ほど早くナナカマドという人物から図鑑をもらい、旅に出たと連絡をもらったシュバルツは、自身も旅に出たいという焦燥感にも似たものを感じていた。

『・・・じゃあ、私もチャンピオンになる・・・!!』

『え・・・?』

シロナちゃんは学者さんになるんじゃないの・・・?』

『うん、学者さんとチャンピオンどっちにもなる!!』

それは、シュバルツの脳裏に刻まれた幼き頃の輝かしい思い出

そして今日、シュバルツもアララギという人物から図鑑をもらい旅に出ることになっている。

前日は楽しみで中々眠りにつけなかったほどだ。

とはいえ、アララギ博士も忙しい人物なのでシュバルツ自身が彼がいる街まで出向き、そこから旅立つことになっている。

『・・・そっか・・・』

じゃあ、僕もチャンピオンだけじゃなくて何か自分のやりたいことを探してみるよ』

『うん、見つかったら教えてね。』

私も頑張るから、シュバルツくんも頑張つて』

『うん。』

じゃあさ、僕がチャンピオンになったら何かして欲しいな。

僕もシロナちゃんがチャンピオンになったら、何かしてあげるか
『』

それは、二人が交わした最初の約束。

互いの姿を忘れても、その言葉だけは覚えている。

因みに、アララギ博士が今いるのシツポウシティだ。

なんでも、ヤグルマの森で虫や草タイプのポケモンの生態調査をしているらしい。

ソウリュウシティからかなり離れているのは言うまでもない。

流石に歩いて向かう訳にもいかないので、親のポケモンを借りて向かうことになっている。

『 “何か” ってなに・・・？ 』

『 それはその時まで決めておくことにしようよ 』

『 うん、分かった。 』

『 じゃあ、指きりしよう 』

『 うん・・・ 』

そう言って小指を絡ませ合う二人。

『 『 せいの 』 』

『 ゆゝびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんの〜ます。』
』

それが、今少年がチャンピオンを目指す大きな理由。

自身が父親を超えたいという願いは勿論のこと、幼い頃に同時にトレーナーになった少女との約束が何よりも彼の支えとなっている。

そして、出発の時間は朝8時。

現在時刻は7時。

ジリリリリリリ

凡そ5分ほど前から目覚ましがなっていることから、そろそろ起きるべき時間であるのが分かる。

「う〜ん」

ガッ

目覚ましのボタンを乱暴に叩いて止め、枕に突っ伏していた顔を起こす。

5年前は短く刈り上げてあったプラチナブロンドの髪は長くなっている。

本来であれば日の光を反射して綺麗に輝いているであろうそれは、凄まじいまでの乱れっぷりでサンダーズの体毛の様に爆発していた。

「ふあ〜」

体を起こしながら、腕を伸ばして思いつきり伸びをする。

カタカタ、カタカタカタ・・・

そんな寝起きのシュバルツの近くに置いてあったボールが揺れると同時に、

ポンッ

という音共に開き、中からポケモンが出てくる。

『モノズ』

「ああ、おはよ。

モノズ」

『モノズ』

出てきたモノズの頭を撫でながら、布団から体を外に出す。

寝惚け眼を擦りながら、前日に用意してあった服に着替えるため、寝巻を布団の上に脱ぎすてる。

脱ぎ捨てられた寝巻はモノズが啜え、自身の背中に乗せ階下へと持っていく。

その姿はかなり熟練されたものであり、ずり落ちそうになっている服を体のバランスを微妙に変えることによって位置を調整し、見事に運んでいる。

・・・本来、モノズはここまで丁寧な事ができるポケモンではなかったと思うのだが・・・？

まあ、そんなどうでも良い様などうでも良くないことはともかく。シュバルツはテキパキと、戸惑うことなく着替えを済ませていく。

今日から最低でも何ヶ月かは実家に帰って来られないのだから、前日入念に準備した服を着る。

自身の髪とは対照的な黒を基調とした服だ。

下に黒の長袖のシャツを着て、その上からやや濃い灰色のジャケットを羽織る。

手には指先が出ている手袋を嵌め、足には紺色の生地即墨を何滴か垂らした様な模様のジーンズを履く。

腰には、ボールを取り付ける機能を取り付けたベルトを巻く。

既にベルトにはボールが“一つ”取り付けられており、その隣の空いたスペースに先程モノズが飛び出してきたボールを取り付ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

着替えが終わったシュバルツは鏡の前で服装に不備がないか確かめ、爆発している髪を整えようとする。

「・・・・・・・・むう・・・・・・・・」

寝癖が酷いのは今日に限った話ではないのだが、それを直す手つきは慣れていると言い難い。

それもそのはず、毎日毎日違う風に寝癖がついているのだから慣れようもないだろう。

これがパターン化していればまだやりようがあるのだが、寝ている自分にそんな事を言っても無駄なのはシュバルツも分かっているの
で、諦めている。

いっそのこと小さい頃のように短くしてみるかとも思ったのだが、姉と母からの強烈な反対に遭い、残念ながら却下されることになった。

「・・・・・・・・よし・・・・・・・・」

髪の手入れも終わり、爆発していた髪が通常の髪型へと整えられる。この時点で既に15分。朝食を摂ったり、家族と話をするためにはやや少なめな残り時間だ。準備してあったバッグを肩に掛け、部屋の扉を開ける。

最後に、入口で振り返り部屋を見渡す。特に忘れ物がないことを確認すると、

「いってきます」

それだけ呟いて、シュバルツは階段を下りて行った。

? ? ? ? ?

「忘れ物はない・・・?」

ハンカチとかティッシュとか・・・ああ、お財布とか・・・」

「だいじょぶだって、母さん」

家族との朝の団欒も終わり、暫しの別れとなるであろうこの瞬間。家の玄関には家族全員が集まっていた。

シュバルツから見て、右に父と母、左に姉と普段から家族として暮らしているポケモンたち。

具体的には、父親のオノクスやクリムガンであったり、母親のタブンネやウオーグルであったり、姉のオノンドやチラチーノなどだ。

勿論、他にもいるのだが今は代表して？これらの面子になっている。そして、これからシュバルツがシッポウシティに向かう際に世話になるのが、母親のウォーゲルであったりする。

ソウリュウシティからシッポウシティまでの長距離移動は 普段から移動に使われているとはいえ 流石のウォーゲルでも多少時間がかかるだろう。

・・・まあ、今迄の主な使用理由は、母や姉の買い出しに付き合うことだったりするのだが・・・

「いやー、それにしてもシュバルツがねー・・・」

シロナちゃんも旅立ったって聞くし・・・月日が経つのは早いもんだわ・・・」

「何でそんな年寄りみたいな口調になってるんだか・・・」

「なんだとー！！」

だけれが、小母さんじゃー！！」

「いや、そこで逆ギレされてもな・・・」

そんな3人と6匹と向かい合っているのは、シュバルツと彼のポケモン。

真ん中にシュバルツを置いた形で並んでいる。

家族たちから見て、シュバルツの右にモノズ、左にリオルと並んでいる。

ちなみにこのリオル、先程のもう一つあったボールの中身である。

シュバルツが父親であるシャガと共に、ソウリュウシティの近くにある修行の岩屋に修行をしに行った際に捕まえた（助けた？）ポケ

モンなのだ。

修行の岩屋と言え、それこそシャガやアデクなど、それなりに強いポケモントレーナーが修行に行く所であり、そこに生息している野生のポケモンたちも周囲の道路のポケモンたちよりも強い。

本来であれば、シュバルツのような新米トレーナーが行く場所ではないのだが、そこは父親であるシャガが原因だ。

この父親、普段からオノノクスやクリムガンなどの自分のポケモンとスパリングをしているほどの鍛錬バカである。

そして、そんな父親にポケモンバトルを教えもらっているシュバルツも、当然の様に（スパリングをするほどではないが）それなりの修行バカになっていた。

「・・・父さん・・・」

「必要最低限の事は教えた。

あとは、お前が自分で見つけ出すんだ。

ポケモンの鍛え方にしろ、共に過ごしていく道にしろ、お前がやりたいこともな」

「・・・ああ・・・!!」

シュバルツが8歳の時だった。

父親に修行の岩屋に誘われた時に、自ら進んで修行の岩屋に同行したのである。

そして、そこでこのリオルを見つけた。

本来であれば、シュバルツとモノズではどうにもならないほどの野生ポケモンたちが揃う岩屋だが、何故かそのリオルだけは違った。

卵から産まれたばかりなのか理由は分からないが、とにかく他と比

べて弱々しかったのだ。

それこそ、弱肉強食を地でいく野生のポケモンたちの中で生き残ることが出来ないようにシュバルツには思えた。

実際、最初に出会った時には護ってくれる親もいず、全身傷だらけであつたし、周囲の地面にはかなりの量の血が沁み込んでいた。

人間と同じではないにしても、リオルほどの小さな体躯ではほぼ確実に血が足りないのがシュバルツにも分かつたほどだ。

即座に治療しようと思ひ、駆け寄つたが、リオルはそんなシュバルツに攻撃を仕掛けてきた。

幸い、モノズが攻撃を弾いてくれたが、シュバルツは茫然としてしまった。

『何故救いの手を拒むのか』と。

リオルがこうなつた背景には、周囲のポケモンや動物たちから寄つてたかつて攻撃を受けたという経緯がある。

それこそ、自身より遥かに強い個体がくることもあつたし、集団で襲ってくるものやその後のお零れに与ろうとするものたちもいた。だが、それらを全て撥ね退けた。

傷だらけになりながら。

血だらけになりながら。

状態異常になりながら。

全て。

そんなリオルを助けしてくれる存在は今まで一匹足りともいなかった。

波動はいくらでも出した。

それこそ、洞窟内全域に届くよう。
だけど、それでも、誰も助けてくれなかった。
仲間たちも、彼（雄です）を産んだ親でさえ、助けることはなかつた。

だからこそ、リオルは思ったのだ。
いや、悟ったと言った方が良いのか。

自分の周りに近づく生き物は全て敵なのだ。

「ウオーグルも今日はよろしくな」

『ウオーー！！』

「いや、そこまで気張らなくて良いから・・・」

『グル・・・？』

そんな背景をシュバルツが知る訳がない。

茫然とした状態からすぐに復帰し、今度は慎重にリオルに近づいていった。

当然、リオルも反撃しようとしたが、そこで戸惑ってしまった。

リオルがその時捉えた波紋（波動？）は今まで彼が見たことのない形だったから。

今まで見てきた鋭角に尖った形状ではなく、優しく暖かな円形の形だった。

そして、その隙に近づいたシュバルツが治療　キズ薬やなんでもなおしなど　を施す。

初めは本気で抵抗していたのを無理矢理治療していたのだが、その

うちリオルも大人しくなっていた。

理由は簡単、初めてシュバルツが自分の事を助けてくれる存在だと分かったから。

勿論、完璧には信用していないにしろ、少なくとも自身に危害を加えることのない存在がいることが分かったから。

だから、

『おいで。』

一緒に行くっ』

そう誘われた時、手を伸ばされた時、自然にその手をとったのだ。

一応、野生のままではマズイのでボールに入れることになったのだが、それも拒むことなく自分からボールに入ってしまったほどだ。

その後も治療を受け、岩屋の外の世界をシュバルツ達と共に過ごしていった。

今では、そんじょそこらのポケモンには負けないほど強くなっている。

なので、卵の時からシュバルツと過しているモノズほどではないが、かなりシュバルツに懐いている。

「じゃあ、行ってくる!!」

言いたいことは全て言ったのか、シュバルツは、モノズとリオルをボールに戻し、ウォーグルに跨る。

「元気でね。」

無事に帰ってらっしやいよ」

母が、

「お土産よろしくね」

姉が、

「次に会う時を期待してるぞ」

そして、師である父がそう言ってシュバルツを見送る。
それら全ての言葉に頷き、

「ウォーグル、【そらをとぶ】。

行先は、シッポウシテイ!!」

『ウォー!!』

少年は飛び立つ。

未来に向けて。

2 匹目 リオル 旅立ち（後書き）

シユバルツくん、多少ワイルドに・・・

いや、あのままの丁寧な口調でもよかったですけど、なんとなくあの父親の訓練に付き合ってた割には優しすぎた感じがしたので。

根っこは同じですのでご安心を。

3 匹目 ヨーテリー 受諾（前書き）

タイトルのポケモンでかなり難産に・・・

いや、ストーリーも思ったよりキツイです。

ゲーム時間の数年前という設定を甘く見えました。

3 匹目 ヨーテリー 受諾

『ウォー！！』』

「おつかれさま、ウォーゲル。
母さんと父さんによろしくな。

・・・一応姉さんにも」

『ゲル』

シッポウシティ近くの道路に着いたシュバルツは、一先ずウォーゲルを家族の許へと送り返し、周囲を見渡した。

「はー、すごいな・・・」

出てきな、モノズ」

ポンツ

『ノズ！！』

シュバルツが感心していたのは、シッポウシティを出るとすぐに目に付く圧倒的な木々の量。

ソウリュウシティの周辺にも自然がないわけではないが、これほど木々が集まって森を形成しているのはシュバルツも見たことがなかった。

「これが、噂に聞くヤグルマの森なのか・・・？」

アララギ博士がフィールドワークをしているっていうのも此処らしいんだが・・・」

『モノ』

「ああ、悪い悪い。
行くか」

モノズに促され、森から視線を外し、シッポウシティへと足を向けた。

?
?
?
?

シッポウシティ

およそ100年前まではただの倉庫街だったのを、才気溢れる若いアーティストたちが使い始めたことが切っ掛けで生まれた町である。そのため、イツシュ地方のなかでも熱意あふれる若者が多いことでも有名。

また、博物館の中にポケモンジムがあり、学者やポケモントレーナーたちの交流が多い町としても知られている。

「はー、そんな街だったのか。」

あ、だから、アララギ博士もここにいるのか・・・?」

『モノ』

シッポウシティに付いたシュバルツは、博士との待ち合わせ場所でもあるポケモンセンターで街の地図と要所の解説が一緒になった観

光ガイドを読んでいた。

博士が到着するまでの暇つぶしに近いものだったが、意外と役立つことが書いてあったので、なんとなく得した気分になるシュバルツだった。

そんな彼の隣には、いつものようにモノズが寝そべっている。

「学者か、シロナちゃんは頑張ってるのかな・・・？」

『モノズ』

「うん？」

ああ、フカマルもきつと元気だぜ。

だから、俺たちも頑張ろうな」

『モ！！』

何故か会話が成り立っているが、あまり気にしない方が良いのかもしれない・・・

そんな感じで暫くモノズと一緒に過ごしていると、

「おー、君がシュバルツくんか・・・！？」

シュバルツを呼ぶ声がした。

視線を声が聞こえてきた方に向けると、

「始めまして。

私がアララギだ。

よろしく頼むよ」

神と髭を薄めの茶色に染めたやたらとフランクなおっさんがいた。

「……あー……」

「あんたがアララギ博士でいいのか……?」

「ああ、そうだよ」

シュバルツの疑わしげな視線を物ともせず、アララギ博士は話を続ける。

「いやー、特徴だけは教えてもらっていたんだが、正直簡単には正解しないと思っていたんだが……」

「一発で正解してますけど……?」

意外と通るアララギ博士の声はそれなりに距離がある人間でも聞こえるだろう。

かといって、耳障りなやたら甲高い声ではないのでそんなに問題ではない。

そのため、シュバルツは自分の名前が何度も呼ばれた訳ではないことは分かっている。

「ああ、それは君がポケモンと一緒にいてくれたからだよ」

「こいつと……?」

「ノズ?」

そう言って、モノズと顔を見合わせるシュバルツ。

特別変わったことをしていた訳ではない。

むしろ、ポケモンと一緒に椅子に座っている人間ならこのポケモン

センター内には大量にいる。

「うん、その“色違い”のモノズと一緒にいるだろうとシャガさんから聞いていたからね。

一発で分かったよ」

「ああ、そういうことが・・・」

成程、と納得するシュバルツ。

当人？のモノズの方とは言えば今一よく分かっているのか、首を傾げている。

シュバルツの最初の手持ちポケモンであるモノズ。

ごく一般的なモノズの体色が青が基調であるのとは違い、基本の体色が緑である。

実例が少ない色違いのポケモンを持っているのであれば、成程これ以上ない目印になるだろう。

実際、シュバルツも父親のジムで挑戦者が繰り出す色々なポケモン
ドラゴンポケモン以外も　を見てきたが、自身のモノズのよ
うな色違いのポケモンは見たことがなかった。

赤いギャラドスがいるだとか、金色に輝くヨルノズクがいるだとか、
シュバルツも話には聞いたことがあったが、実際に見たことはない。

「いやー、一度でいいから色違いのポケモンは見てみたかったからね。
ね。

実は今日という日が楽しみでならなかったんだ」

そう言いながら、シュバルツの隣で胡乱な視線？を博士に向けているモノズへと視線を向けるアララギ博士。

『モノズ！！！』

その視線に何か感じ取るものがあつたのか、胡乱な視線？が険しいものへと変わり、

ガブー！

アララギ博士の腕に噛みつくモノズ。

「いだだだだ！！」

ちよっ、どうして！？」

「あー、言い忘れてましたけど・・・」

「なんだい！？」

モノズの噛みつきが余程痛いのだろう。

噛まれている腕を必死に振り回し、モノズの【かみつく】から逃れようともがいている。

そんなどこかコントの様に滑稽な、しかし当人には無視できない状況を眺めながらシュバルツが口を開いた。

「そいつ、初対面の相手には大抵【かみつく】ので・・・」

「先に言ってくれー！！」

大の大人が上げるとはとても思えない情けない叫びがポケモンセンターの中に響いた。

? ? ? ?

現在、二人と一匹は博士の腕の治療を済ませ、先程までシュバルツが座っていたスペースに机を挟んで向かい合っていた。

「は、痛かった・・・」

「まあ、大怪我にならなくて良かったです」

『モノ〜』

何にでも噛みつく習性のあるモノズの牙だ、そこらの動物やポケモンより余程固く、鋭い。

そんなモノズの【かみつく】を受けて平気な博士の腕も中々の頑丈さだ。

「待ち合わせ場所をポケモンセンターにしておいてよかったよ。すぐに治療ができたしね。

と、そんなことより・・・」

噛まれた腕を庇うようにしながら自身が背負ってきた鞆を漁りだすアララギ博士。

そんな博士を・・・いや、博士が漁っている鞆を興味深気に見つめるシュバルツ。

自分がここでアララギ博士を待っていた理由を全く忘れていなかったようで、鞆を見つめる眼差しは期待に満ち溢れているのが分かる。

「はい、これがポケモン図鑑」

シュバルツに渡されたそれは、携帯電話の様な形態だった。画面が二つ付いており、その下にモンスターボールと思わしき図形が描かれている。

とはいえ、その図形も赤やオレンジなどではなく、何故か黒と白だった。

試作段階という感じが強い。

「まだ、完璧な図鑑じゃなくてすまないね・・・

登録されていないポケモンもいっぱいいるんだ。

特にこのイッシュ独特のポケモンはね。

カントーやジョウト辺りだとかかなり進んでいるらしいんだけど・・・

」

そう博士が説明しているのを聞きながら、シュバルツは図鑑を手に取り電源を入れ 説明された モノズの方へと向けてみる。

『モノズ・・・？』

『モノズ・『そばうポケモン』 タイプ：あく・ドラゴン

何にでも噛みつく習性があり、食べられるものは何でも食べる。

そのため、生半可な気持ちで近づくのは非常に危険である。』

そんな文章が二つある画面の下の画面に映し出される。

因みに、上の画面にはモノズの姿と、平均的な身長や体重が記載されていた。

「ちゃんと動いてんですけど・・・？」

使ってみても、シュバルツには特に問題があるようには思えなかつ

た。
実際に使えているのだから、それも当然だと思っ
だが、

「ああ、モノズは君の手持ちにいるって聞いてから急遽登録したん
だ。

だから、ジヘッドやサザンドラに進化した場合のデータは出てこ
ないと思うよ」

「そうですか・・・」

じゃあ、何でそんな未完成品渡すのか。

これもまた、アララギなりの理由があったりする。

「それで、シュバルツくんには、その図鑑に載っていないポケモン
のデータを可能な限り集めてきて欲しい」

「・・・は・・・？」

一瞬、シュバルツはこの自分の目の前にいる大人が何を言っている
のか分からなかった。

が、改めて正面からしっかりとアララギ博士の姿を見ると、自
身の返事を待っている期待の眼差しが自分に注がれていた。

つまり、自身の聞き間違いではなかったようだ。

「なんだって俺がそんなこと・・・他の誰かがやれば・・・」

「それが出来ないから君に頼んでいるんだよ」

博士曰く、自分も、助手も忙しく、イツシュ全域を回っている余裕

がない。

更に、このイツシュ地方で図鑑の作業をしている人間は自分たちだけらしく他に回すこともできない。

また、他の地方も似たような状況であり、増援は見込めないのと。

その癖に、この図鑑の完成は割と急務であり先延ばしにすることはできない。

要するに、

「今の段階で頼めるのが俺だけだ、と・・・」

「そうなんだ。」

「理解が早くて助かるよ」

「・・・はあ・・・」

何だっけ自分にその役目が回って来たのか・・・とは思わない。

ただ、余計な仕事を押し付けてきたアララギ博士の評価が彼の中で1、2段すつ飛ばして下がって行っている。

これが学者志望のシロナだったら、喜んで手伝うだろうし、実際に自ら進んで手伝い始めた。

「・・・分かりました、やります」

「本当かい!？」

「いやー、助かるよ」

「いえ、可能な限りだったので・・・」

これでイツシュ地方にいるポケモン全て等と言われていたら、流石

に辞退していただろう。
それに、

思ったよりも、役に立ちそうな機械だしな

ノズノズ

未完成であるとはいえ、翳しただけで何匹かのポケモンのデータが
すぐに分かるのは非常に助かる。

「理由が何であれ、やってくれるのは助かる。

じゃあ、とりあえずこれを渡しておくよ」

そう言つて、鞆から一つの機械を取り出すアララギ博士。

「なんです、それ・・・？」

「これはね、ライブキャスターと言つて、早い話がテレビ電話だ。

これがあればすぐに私と連絡できるだろうからね」

「へー」

「勿論、登録すれば私だけではなく他の人とも連絡できるようにな
る。

それこそ、家族だったり友人だったり、恋人だったりだね」

そう言いながらライブキャスターを渡してくるアララギ。

特に断る理由もないし、有った方が便利なのでそのまま受け取るシ
ュバルツ。

「さてと、こんなものかな・・・何か質問はあるかい・・・？」

「・・・じゃあ、一つだけ。」

捕まえすぎたポケモンは転送システムで他の人のパソコンに預けると思うんだが、それはそのままでもいいんですか・・・？

何か弄って博士のパソコンに転送してもらおうようにするとか・・・

「

「ああ、もうそんなことも知ってるのか。

大丈夫だよ。」

私の方から開発者に言っただけにかしてもらっておくから」

「そうっすか・・・じゃあ」

「ああ、もう行くのかい・・・？」

「はい。」

早く始めたいので」

そう言いながら、モノズをボールに戻し、席を立つシュバルツ。

既に鞆の中にライブキャスターを、胸ポケットには図鑑が収められている。

何をとは言わないし、アララギも聞かない。

決まっている、旅だ。

自身の夢に向かったの大切な道なのだ。

「そうかい・・・じゃあ、アドバイスと質問をそれぞれ一つずつ。

君の夢はトレーナーの誰もがもつものだろうし、それは純粋で素晴らしいものだと思う。

アドバイスは、それに挑戦するためには、まずイッシュにある8

つのジムを全て制覇しないとイケないということ。

サンヨウジム、シッポウジム、ヒウンジム、ライモンジム、ホドモエジム、フキヨセジム、セツカジム、そして、ソウリユウジム」

「・・・・・・・・・・」

「ジムリーダーの息子である君に言うことじゃないのかもしれないけれど、それぞれのジムのジムリーダーは皆一筋縄ではないか強い敵だ。」

挑戦するなら入念に準備を済ませてからにすると良い」

「はい」

アララギ博士の言う通り、シュバルツはそんなこと言われなくても分かっている。

生まれて、ポケモンという存在を知ってからずっと、その父の強さに憧れてきたのだから。

イツシュ最強のジムリーダーである父親を追ってきたのだ、ジムリーダーという存在を軽く見ることなど彼には出来るはずもない。

「じゃあ、質問に移ろう。」

君はその夢の先に何をみる・・・？」

「え・・・？」

シュバルツは呆けてしまった。

てつきり、『君にとってポケモンとは何か・・・？』『や、『どつしてその夢を目指すのか？』という質問がくると思っていたから。だから、その予想外な質問には対応しきれなかった。

「・・・まあ、今はまだ分からなくても良いよ。
ただ、君がこの旅を終えた時にもう一度聞く。
その時には答えられるようになっていて欲しいな」

そんなシュバルツの様子を見たアララギ博士は、それだけ言ってポケモンセンターから出て行った。

一方のシュバルツは席から立ち上がった状態で固まってしまった。
それは、

「・・・何で、あんたも父さんもシロナちゃんも、それを聞くんだよ・・・」

自身が悩み続けて未だに答えが出ない問いだったからだ。

?
?
?
?

そんな彼が悩みを一先ず脇に置き、ポケモンセンターを出て歩いていくと、

「そ、そこの君!」

「うん・・・?」

突然呼び止められた。

振り向いた先には、やや痩せ形の丸眼鏡を掛けた青年がいた。

その男の表情はどこか危機迫っている物があり、初めて会うシュバ

ルツでもかなり心配になるほどだ。

「ど、どうしたんだ・・・？」

「まず、話を聞こうと思ひ話しかけるが、

「頼む！！」

ポケモントレーナーなら助けてくれ！！」

「は・・・？」

今一要領を得ない答えが返ってくる。

見た所、後ろから誰かに追いかけられている様子はないのだが・・・いや、

「・・・ああ、てええええええー！！！！」

どこかで見たような女性が走って来た。

自身の姉と同じように黒い肌で、かなり特徴的な髪型をしている。年も姉と同じか、もう少し上だろう。

そんな彼女と並列して走っているのは、ミルホッグとヨーテリー。

「ヒイイ！！」

そんな少女たちの姿を見て、脅える青年。

そんな青年に少女とポケモンは、

「私も連れてけー！！！！」

『ミルー！！！！』

『ヨー!!』

そう叫びかけた。

「……何がなんやら……」

戸惑うシュバルツを余所に近づいてくる少女と、脅える青年。シュバルツが周囲を見渡しても、街の人間は特に騒ぎ立てることもなく普通に過ごしている。

いや、『あらあら、またですか』といった視線がかなりあったのだが。

つまりは、この光景は普段から行われているものなのだ。それを悟ったシュバルツは、

「……」

そのまま無言で立ち去ろうとして、

「行かないでください!!」

青年に掴まれ引き留められた。そして、

「ああ……!!」

『ミルミル』

「……何で、俺まで……」

『テ—リ—』

「ほら、行くよ—!!」

追いかけてきた少女に捕まった青年と一緒に博物館まで連行されたのだった。

4 匹目 ミルホツゲ VS シツポウジム (前書き)

自分でも考えている以上に展開が早いです。

問題があるわけじゃないんですけど、これでいいのかなー、と少々不安。

4 匹目 ミルホツゲ VS シツポウジム

博物館、というかシツポウジムに連行されたシュバルツ。

「だから、私も連れて行って言ってるだろう!!」

「む、無茶言わないでくださいよ・・・!!」

アロエさんが化石を好きでヤーコンさんと仲が良いのは知ってますけど、今回は学術調査で行くんです。

まだ、正式にうちの博物館に所属してないアロエさんが参加できる訳ないじゃないですか」

「そこをどうにかしろって言ってんでしょう、キダチ」

シュバルツの前では二人の人間が口論を繰り広げていた。

片方は自身に助けを求めてきた痩せ形の若い男 キダチ

先程から話を聞いて分かったのは、彼はこの博物館に勤め始めた学者だということ。

自分をこの騒動に巻き込んだ男性だが、口論を見ていると一方的に憎めなくなってしまう。

もう一方はシュバルツとキダチをこの博物館まで連れてきた肌の黒い女 アロエ

言い合っていて分かったのは、彼女はこのシツポウジムの新しいジムリーダーだということ。

シュバルツにとってはなんとも反応に困る女性だった。

「それが無茶だって言ってるんです!!」

大体、化石の発掘なら僕に言うんじゃないかと館長に直談判すればいいじゃないですか」

「そんなもんとつくにして、駄目だって言われたに決まってるだろう……!!」

「……んな……!!」

シュバルツもシッポウジムには挑戦するつもりだったから、ここに連れてこられたのは大きな問題ではない。

彼の個人的な意見からすれば、シッポウジムよりも先にサンヨウジムに挑戦するつもりだったのだが、ここまで来たらそれもあまり関係ない様な気がしていた。

ジムの中　まだ博物館の入り口　に来たのだから、ただで帰るよりはジムリーダーに挑戦した方が良い気がしたのだ。
あわよくば、勝ってバツジを入手したいとも考えていた。
まあ、

「だ、か、ら、あんたに直談判してんのよ!!
実際に発掘現場に出向くあんたにね!!」

「……そんな身勝手な……」

「い、良いじゃないのさ!!
……それに、調査に行くあんたのことが心配だし……」

「何か言いました……?」

「へ……!!?」

「い、いや、何も!!」

「そうですね・・・」

どちらにしろ、この口論が終わらないとジム戦も無理そうだ。

「・・・はあ・・・」

少し、館内でも見て回ってくるか」

その事が分かったのか、シュバルツはさっきから堂々巡りの口論を展開している二人を措いて、連行されてきた博物館を見て回ることにした。

中に展示されているのは、古代のポケモンの化石であったり、何かの儀式に使われていた仮面であったりと、普段では見ることが出来ない貴重なものばかりだ。

そんな中でシュバルツが気になったのは二つの展示品。

一つは、

「・・・何だこれ・・・？」

一見、単なる丸い石にしか見えない展示品。

横に書いてある説明には、

《砂漠で発掘された丸い石。

発掘場所が古代の城であるため何らかの力があるのではないかと考えられている。

《現在調査中》

と書いてある。

それを読んだシュバルツは、

普通、それだけで展示する様なものか・・・？

この博物館に微妙な疑問を抱いてしまった。

研究者からしてみれば珍しいものなのかもしれないが、シユバルツのような一般人からすれば、この石がそこらに転がっている石とどう違うのか全く分からないのだから。

とまあ、彼が抱いた感想はそれだけだ。

特に感じるものがあった訳ではない。

ただ、

ノース・・・

リオ

彼のポケモンたちは少々感じる所があったみたいだ。
もう一つは、

「はーい、すげえー」

博物館の中央に置かれた巨大なポケモンの骨格標本だ。

およそ3mから4m程の大きさである。

一応説明は、

《世界中を飛び回っていたドラゴンポケモンの骨格標本。
恐らくカイリユウである。

発見されたカイリユウの骨格標本としては世界最大》

と書いてあった。

「カイリユウってこんなにでっかくなるもんなのか・・・」

シュバルツ自身、何度かカイリユーを生で見たことはあったが、これほど大きくはなかった。

最大でも2.5m程だったろう。

ここに展示されている骨格標本は、死んでも尚、そのドラゴンポケモンとしての圧倒的な存在感をシュバルツに見せつけていた。

「・・・お前もこれぐらい強くなれると良いな」

モノ！！

自身も若輩ながらドラゴンポケモンを使っている身としては、このカイリユーはある種の理想だった。

それは、モノズも同じようでシュバルツの言葉に答えるように、ホールの中で意気込んでいるようだ。

そんな風に博物館を見て回っていたシュバルツが口論をしていた二人の所に戻ると、

「じゃあ、あの少年とポケモンバトルで負けたら諦める、ということでもいいですね」

「ああ、あたしもジムリーダーだ。

勝ってお前に認めさせてやる！！」

何故かシュバルツが話題の中心に上っていた。
しかも、

・・・なんだって、会ったばかりの、というか然して会話もしていない俺がこんなに信用されてるんだ・・・？

やたらとシュバルツが強いという前提で話が進んでいる。
何故そんな判断が根拠もなくされているのかシュバルツには甚だ疑問だったが、

まあ、ジム戦ができるならいいか

とも思っていた。

まさか、旅を始めて最初のポケモンバトルがジム戦になるとはシュバルツも思っていなかったが、『これもこれでありか』と考えていた。

彼のポケモンたちも、

ノズー！！

リオー！！

それぞれがそれぞれでやる気を全身に漲らせていた。
というわけで、

「よろしく頼みましたよー！！」

「・・・了解しました」

「私も新米だけど、ジムリーダーだ。
負けてやる訳にはいかないね！！
・・・何より、私の未来のために・・・」

シュバルツVSアロエ

ベーシックバッジを賭けて、いや、キダチの学者魂だとか、アロエ

の女心だとかを賭けて始まります。

?
?
?
?

「ルールは2vs2

二匹とも戦闘不能になったらその時点で負け。
何か質問はあるかい？」

「いや、大丈夫」

「そうかい・・・じゃあ、挑戦者シュバルツのジム戦を始める!!」

バトルが始まって最初に二人が繰り出したのは、

「いけ、リオル!!」

『リオ!!』

「頼んだよ、ヨーテリー!!」

『ヨー!!』

シュバルツがリオル、アロエがヨーテリー。
タイプ相性で考えるなら、格闘タイプであるリオルが有利だろう。

「・・・リオルか・・・」

「イツシュじゃあんまり見ないけど・・・それでも・・・!!」

アロエが普段からメインで使うのはノーマルタイプ。

更に、何故か近くにあるヤグルマの森の近辺ではドツコラーヤ、ナゲキ、ダゲキ、といった格闘タイプのポケモンが多い。

まるで、アロエのジム戦で使ってくださいと言わんばかりに。

そのため、それらのポケモンを捕まえてアロエにジム戦を挑んでくるトレーナーは後を絶たない。

そのため、アロエも自然とそれらの格闘タイプを相手取るのが得意になっていった。

だから、

「速攻で行くよ!!」

ヨーテリー【つばめがえし】」

『テリー!!』

格闘タイプの弱点である飛行タイプの技も当然覚えている。

ヨーテリーの両前足の爪がリオルに迫る。

必中技の【つばめがえし】普通は避けられない。
だが、

「リオル【みきり】」

『リオ!!』

それも防いでしまえば問題ない。

「む」

リオルの両腕がヨーテリーの両前足を受け止める。

「自分から近くに寄ってきてくれるとは好都合・・・
最初は様子見のつもりだったけど、そっちが速攻で来るならこっ
ちも様子見はやめてやる!!」

リオル【はっけい】!!」

「まずっ!!」

ヨーテリー【まもる】」

「遅い!!」

『オル!!』

本来、相手より先に護りの体勢に入ることにより相手の攻撃を無効化する【まもる】だが、それも発動前に技が当たってしまえば意味のないものになる。

しかも、今回はリオルとヨーテリーの二匹が触れ合っており、リオルがヨーテリーの前足を抑えている状態だ。

当然、必死に抜け出して防御の姿勢に入ろうとしているヨーテリーよりも速く、リオルの拳がヨーテリーの体に当たった。

『ヨー!!』

衝撃がヨーテリーの全身に広がる。

「大丈夫かい!？」

ヨーテリー!!」

『ヨーテ!!』

なんとか耐えきったヨーテリーにアロエが声をかける。
それにやや痛みにも耐えながら返事をするヨーテリー。
それを見てまだいけると判断したアロエは、

「よし、まだまだいけるね!!」

頑張ってくれよヨーテリー!!」

『りー!!』

そんな風にヨーテリーに声をかける。

ヨーテリーもそれに励まされ、再び立ち上がる。

そんな一人と一匹の様子を見ながらシュバルツは、

「リオル、今のうちに積めるだけ【ビルドアップ】だ」

『リオル』

リオルにそう指示を出す。

それに忠実に答え【ビルドアップ】を始めるリオル。

そして、再びアロエがヨーテリーに指示を出す頃には3回程こなしていた。

そんなリオルとシュバルツの様子を見たアロエは、

・・・思ってたより場慣れしてるね・・・

リオルもかなり鍛えられてるみたいだし、下手に手を出さずいった方が良いか、速攻で決めるべきか・・・

そう考え、一先ず、

「ヨーテリー【かげぶんしん】」

どちらともとれる指示を出した。

そのアロエからの指示に答え、バトル場にヨーテリーが何体も現れる。

実際には本体は一体だが、傍から見るとどれが本体か分からない。

「チツ、相変わらず面倒な技だ」

『ルー』

目の前の光景に悪態をつくシュバルツと、集中力を上げるリオル。

さっきの【はっけい】でかなりダメージを負ったはず。

恐らく、あと数発か、でかいのを一発当てれば戦闘不能になるはず……

となると、それをどうやって当てるかだが……まあ、なんとかなるか

体力はまず間違はなくリオルの方があり、ヨーテリーはあと少しだと判断したシュバルツは、

「リオル【み……】」

「させないよ……」

ヨーテリー、【きしかいせい】……」

『ヨー……』

「くそっ……」

「こつちに行動させないつもりか!!」

『リオ!!』

向かってくるヨーテリーの集団に向かつて、リオルが構える。

先程、シュバルツは指示を出せなかったが何を言いたいかリオルには分かっていた。

だから、その指示に合わせて一つの技を使う。
そんなリオルに、

「リオル【カウンター】!!」

シュバルツは指示を出す。

【カウンター】だって!?

やけになったか!?

その指示を聞いてアロエは訳が分からなかった。

【カウンター】は相手の物理攻撃にタイミングを合わせて自身も攻撃する技だ。

向かってくる相手の勢いと自身の攻撃の勢いを合わせて攻撃するため、相手の技の威力が高ければ高い程【カウンター】の威力も高くなる。

普通に相手が見える時だって、成功させるのは難しい技だ。

それを【かげぶんしん】で本体が分からなくなっている状況で使う意味がアロエには分からなかった。

確かに、成功すればヨーテリーは倒せるだろうが、分が悪すぎる。
それでも、

『ヨー!!』

『リオ!!』

ここまで来たら、二人とも自身のポケモンを信じるしかなかった。
ヨーテリーの群れと、一匹のリオルが交差し、

『『……………』』

ドサツ!!

何かが地に落ちる音がした。
それと同時に、

?ヨーテリー戦闘不能。

ジムリーダーはポケモンを交代してください?

そんな審判の音がバトル場に響き渡った。

? ? ? ? ?

「だいじよぶか……?
リオル」

『……………リオ……………』

それなりに体力が減ったりリオルにシュバルツが声をかける。

向かい側では、アロエがヨーテリーに声をかけながらボールに戻っていた。

ふう、指示が届いてて良かった・・・

あの時、リオルに指示した技は【みやぶる】

それによって、本体を特定し【カウンター】を成功させたのだ。

まあ、それでも幾らかダメージを負ってしまったようだが、【ビルドアップ】により本来受けるはずだったダメージよりもかなり軽減されている。

「次は多分ミルホッグが来るだろう・・・

いけるか？

リオル」

『オー！！』

リオルに心配そうな声をかけるシュバルツに、自分はまだまだいけると返事を返すリオル。

「よし、頑張ってくれ」

そんなリオルに励まされ、再び視線をバトル場の向かい側に向ける。そこでは、

「・・・あんたのこと、少し見縊ってたみたいだ。けど、こっからだよ。」

頼んだよ、ミルホッグ！！」

『ミル!!』

アロエがボールを投げ、ミルホッグをバトル場に呼び出していた。登場すると同時に模様が光り輝くミルホッグ。その輝きに一瞬シュバルツが目を奪われた隙に、

「さっきのヨーテリーの分だ。

ミルホッグ【かたきうち】!!」

『ミルホッ!!』

アロエは攻めてきた。

「げ!!」

リオル【こらえる】!!」

『オル!!』

咄嗟の攻撃になんとか反応し、リオルに指示を出すシュバルツ。それを忠実にこなすリオル。シュバルツが指示を出してから、【みきり】の方が良かったと後悔したが後の祭り。

『リ、リオ・・・』

なんとか耐えたりオルだが、既にフラフラだ。予想以上に【かたきうち】の威力が高かったらしい。

「くそ!!」

リオル【きしかいせい】!!」

先程、自身に向かってヨーテリーが放ってきた攻撃をミルホッグに放つリオル。

こらえた状態での【きしかいせい】は当たれば強力だが、

「避ける、ミルホッグ!」

『ミル!』

避けられては意味がない。

距離をとり、安全圏までミルホッグが退避したのを確認したアロエは、

「ミルホッグ【じこあんじ】!」

そう指示を出す。

そのまま【じこあんじ】の体勢に入り、リオルの【ビルドアップ】の効果を自身にも施そうとする。

「させるか!」

リオル【でんこうせっか】

『リオ!』

そんな相手にこれ以上有利になられては困る、とばかりに猛攻をかけるシュバルツ。

「【でんこうせっか】から【ローキック】!」

両方の技が命中し、

『ホッグ!!』

足を抑えながら後退するミルホッグ。
それでも、

「くそつ、無理だったか」

あまり効いている様子がないことから、【じこあんじ】が成功して
しまったのだと悟るシュバルツ。

「このまま一気に行くよ!!」

ミルホッグ【たたきつける】

『ミルホツ!!』

そんなシュバルツとは対照的に、勝負所だと分かっているのか、責
め立ててくるアロエ。

「避けるリオル!!」

そんな猛攻を、逃げ回ることなどでなんとか持たせているシュバルツ。
だがそれも、長続きしそうにはない。

【かたきうち】を【こらえる】で耐えたりリオルがかなり体力を削ら
れたのはシュバルツにも分かる。

恐らくリオルでミルホッグの相手をするのは無理だろう。
それ故に、

「リオル、逃げ回りながら【いやなおと】!!」

次に繋げるために、相手の能力を少しでも下げようとする。
アロエもそんなシュバルツの狙いが分かっているから、

「ミルホッグ、数発くらっても良いから【たいあたり】だ!！」

『ミル!!!』

【いやなおと】に顔を歪めながらも、リオルに近づいていき【たいあたり】をぶちかました。

『リ、リオ・・・』

それが命中し、地面に倒れるリオル。

? リオル戦闘不能。

挑戦者はポケモンを交代してください?

そんなリオルの様子を見た審判が、そう告げた。

?
?
?
?

「お疲れ様、リオル」

そう言いながら、リオルをボールに戻すシュバルツ。
そして、もう一つのボールに手を伸ばす。

「いけるな、モノズ」

『モノズ!!』

シュバルツが予想していたよりも、アロエは強かった。流石はジムリーダーだ。それでも、

父さんほどじゃない!!

ベテランジムリーダーである父親に比べればまだまだだから、

「いけ、モノズ!!」

『モノ!!』

シュバルツはこんな所では負けられない。

「モノズ【ちょうはつ】」

『ノズ、ノズ!!』

シュバルツがモノズを場に出してすぐに行ったのは【ちょうはつ】。暫く相手が攻撃しかしてこなくなる技だ。相手の攻撃力が上がっている状況であまり使うべき技ではないのかもしれないが、

「チツ!!」

それなら、のってやるうじゃないの!!

ミルホッグ【いかりのまえば】」

『ミルホツ!!』

アロエはやや悔しそうな顔になりながら、ミルホッグに指示を出す。モノズの【ちようはつ】にのってしまったミルホッグだが、攻撃の指示だったためそれに従う。

シュバルツがモノズに交代して一番不安だったのは、【あやしいひかり】や【さいみんじゅつ】による状態異常漬けだ。

交代してそれらの状態異常を処理できない方が攻撃を受け続けるよりもキツイと考えたのだ。

モノズに噛みつきこうと向かってくるミルホッグ。

「そのまま向かってこいよ・・・モノズ【でんじは】!!」

『モノ!!』

「しまった!!」

そして、攻撃ばかりをしてくるとい事が分ければ、あとは対処方法も簡単だ。

【じこあんじ】で物理攻撃の威力が上がっている以上、直接向かってくることを予想するのは簡単だ。

その【でんじは】が当たり動きが止まっているミルホッグに、

「モノズ【ドラゴンダイブ】!!」

『ノズ!!』

痺れている相手に凄まじい殺気を浴びせながら、ミルホッグにぶつ

かっっていくモノズ。

『ミル!!』

「ミルホツグ!!」

麻痺しているせいで受け身すら碌に取れないミルホツグ。
そんな床に倒れているミルホツグに、

「逃がすな!!」

続けて【かみくだく】!!」

『モノ!!』

思いつきりかみつくモノズ。
かみついているのはミルホツグの頭だ。

『ホツ!!』

「振り落とすな、ミルホツグ!!」

必死に頭を振り、モノズを振り落とそうとするが、痺れているせいで思うように体が動かないミルホツグ。
そんなミルホツグに、

「とどめだ、モノズ【りゅうのはどう】」

零距离で放たれる圧倒的な衝撃波。
そんな攻撃を頭に喰らって無事でいられる訳もなく。

ドサッ

地面に倒れ伏すミルホッグ。

「そ、そんな・・・」

？ミルホッグ戦闘不能。

よって、勝者は挑戦者シュバルツ!!？

そんな審判の音が響き渡る。

「よっしやー!!」

『モノー!!』

シュバルツとモノズが喜びの声を上げる。

それは、シュバルツのこの旅でのポケモンバトル初勝利とシッポウジム制覇が決まった瞬間だった。

4 匹目 ミルホッグ VS シツポウジム (後書き)

新米トレーナーにしては強いシュバルツ君ですが、父親とトレーニングをしていた成果だと考えてください。

5 匹目 ハーデリア 再出発（前書き）

祝PV2万件、ユニーク3千件突破。

誠にありがとうございます!!

こんなにたくさんの方々に読んでいただけるとは・・・!!
今後も頑張っていくのでよろしく願います。

あと、後書きにちょっとしたアンケートを載せておきます。

お暇なら答えていただけると幸いです。

結果、取り残されたのはシュバルツとアロエの二人（+モノズ）だけ。

自分も一先ず外に出ようと思ったシュバルツだったが、

ガチャガチャ

あ、開かねえ・・・！！

モノ！！

バトル場の扉には鍵がかかっており挑戦者が外に出られないようになっていた。

・・・ポケモンリーグでもあるまいに・・・

そんな風にシュバルツとモノズが扉の前で四苦八苦していた時だった。

「アロエさん！！」

「・・・あ・・・」

キダチが観客席側の扉を開き、ジムリーダーの名前を呼びながら入ってきた。

その彼の声に今まで蹲っているだけだったアロエが顔を上げ、キダチの方へと顔を向ける。

俺達の時はずっと反応しなかったのに！？

モノ！？

そんな彼女に驚愕している一人と一匹を揃えて、学者とジムリーダー

ーの会話は進んでいく。

「キダチ、わ、私・・・」

入ってきたキダチに縋りつくようにすり寄っていくアロエ。

そこには、バトル前にキダチと気丈に言い合っていた姿も、バトル中のジムリーダーとしての貫禄を見せていた姿もなく、年相応に弱い少女の姿があった。

「大丈夫ですよ。」

アロエさんは強いんですから、次に会う時には彼に勝てるようになってます!!」

が、そんな女心など気にも留めないキダチは、純粹にポケモンバトルのことを励ましていた。

おいおい・・・それでいいのか・・・?

『・・・?』

僅か10歳のシュバルツでもそれは流石にどうかと思うわけで。

モノズはよく分かっていないのだろう、主人の反応に首を捻っていた。

とはいえ、

「・・・キダチ・・・」

『・・・モ、モノ・・・』

アロエが背負っているどす黒いものは、流石ポケモン、分かっている

るようだ。

「はい、なんですか・・・アロエさん？」

あ、調査に付いて来るのは流石に駄目ですからね」

一方のそのどす黒いものを向けられているはずのキダチは、全然不安そうな顔をしていない。

非常に清々しい顔をしていた。

・・・あの人は調査なんかより、もっと人と関わるべきだと思う。

見ている方のシュバルツには、段々と二人の空気がおかしなことになってるのが分かる。

最初は確かに、アロエさんが落ち込んだはずなんだけどなあー。

今は清々しいキダチと、黒々としたアロエという見事なまでに白黒ついた空気だ。

太極図ぐらい分かりやすい。

それでも、アロエの我慢もそろそろ限界だろう。

ここで一転してキダチが彼女に優しい、もしくはちよつとでも女心を考えた発言でもしていれば大丈夫だろうが、

「あ、それじゃあ僕はもう出るので・・・」

無理だったようだ。

というか、初めから期待などしない方が良かったのかもしれない。

さて、白と黒が混ざって混沌とした空気になるまで アロエがぶ

ちぎれるまで　あと幾らも残っていないだろう。

スッ

あ、手が腰のボールに伸びた・・・

ノッ

もう、さっきまでのバトルの真剣な空気はどこえやら、シュバルツもモノズもかなり達観した気分になっていた。

「・・・なあ、キダチ・・・」

アロエがキダチに声をかけ、

「なんですか・・・？」

急いでるので早めにお問い合わせしますね」

キダチが振り向いた瞬間。

「この、大バカ野郎ーーーーッ!!!!!!」

アロエのボールから一匹の『ちゅうけんポケモン』が飛び出し、

『ハー!!!』

「あー、ハーデリアか・・・さっきのバトルではなんで出さなかったんだろっな・・・」

まあ、出されてたらヨーテリーより苦戦はしてただろうから良いけど・・・」

『ノズノズ』

「【ギガインパクト】オーーーー!!!」

『デリーー!!!』

凄まじい勢いでキダチに突撃していった。

「へ・・・!?!」

自分に向かってくるハーデリアが信じられないのか非常に間抜けな表情になるキダチ。
とりあえず避けた方が良いと思う。

【ギガインパクト】

威力150のノーマルタイプの物理技。

因みに、ハーデリアの攻撃の種族値は80程。

当たれば当然ただでは済まないだろう。

「ガ、ハーツ!?!」

ハーデリアの突撃をくらったキダチはふっ飛ばされ、すぐそばの壁にぶつかり床に崩れ落ちた。

「う、う、う、う、どうして・・・?」

「いや、今のはあんたが悪いと思うが・・・」

そんな言葉をキダチに放ったシュバルツだったが、なんとなくキダチが必死にアロエから逃げていた意味が分かった気がした。要は、毎度毎度こんな仕打ちを受けていたのだろう。流石に今回の様な大技ではなかったとしても。そりゃあ、逃げたくなるはずだ。シュバルツだって自身がそんな立場だったら逃げるだろう。

「ふう、ふう・・・ご苦労さん、ハーデリア。
戻っていいよ」

『リアー!!』

まだまだ怒りが治まっているわけではないのだろうけれど、一先ず先程までのいじけた様子からは抜け出したアロエ。そんな彼女に、

「あの一・・・」

声をかけるシュバルツ。

とりあえず目の前で起きている痴話喧嘩からさっさと逃げてしまいたかった。

彼としては、これ以上余計な目に遭うのは勘弁願いたい。ただでさえジム戦で自分もポケモンも疲れているのだ。特にリオルなどは戦闘不能にまで陥ってしまった。早くポケモンセンターで回復させてやりたい。

「なんだい・・・!?
って、あんたまだいたのか・・・何か用？」

「いや、バッジとか貰ってないし。」

そもそも、扉が閉まってて出れないんだが・・・」

そのシュバルツの言葉に得心したのか、頷き、

「ああ、そういうことかい。

少し時間がかかるから、先に外に出て待つといてくれるかい。

私にや少し用事があるんでね・・・」

そう言つてアロエは、崩れ落ちているキダチの方を見ながら壁に付いているボタンをポチッと押した。

そうすると、

ガチャッ！！

という音がして閉まっていた扉が開いた。

「了解・・・早めに済ませてくれると助かる」

そう言つてモノズをボールに戻し、扉から外に出ていくシュバルツ。
そんな彼の後ろからは、

「さて・・・覚悟は良いかい・・・」

「よ、良くないに決まっていますよ・・・！！」

「問答無用！！」

「ちよ、待つてー！！」

そんな会話が聞こえてきたとかこないとか。

悲鳴が聞こえてもいつも通りの博物館だったそうだ。
まあ、訳が分からない来館者が少々脅えていたけれど、館員に説明
されて笑っていた。

? ? ? ? ?

「・・・ふう・・・」

博物館からでたシュバルツは近くのベンチに座り、一息ついていた。
よもやこんなにあっさりジム戦に勝利できるとは思っていなかった。
だから、まだ今一現実が信じられないが。
それでも、

「勝てた・・・」

確かに自身がその手に持っているバッジ ベーシックバッジ
はこのシッポウジムを制覇した証だ。

「・・・で、そのイッシュのジムバッジを8つ全部集めるとポケモ
ンリーグ本戦に無条件で挑戦できるんだ・・・って、聞いてるかい
?」

「ええ、一応」

「いや、これも仕事だからしっかり聞いといてもらわないと困るん
だけど・・・」

そんな少年の前には先程まで彼と闘っていたアロエが立ってバッジの説明をしていた。

「大丈夫ですよ。」

それでも一般のトレーナーの方よりその辺りについては詳しいですし」

「そうかい。」

「なら、いいんだけど・・・」

アロエにしたってこんな面倒な説明は省けるのなら省きたい。

それに、このバッジの説明が必要なのは初めてバッジを手にしたトレーナーに対してのみである。

なので、サンヨウシティとヒウンシティというジムがある二つの街に挟まれたこの街でアロエがこの説明をするのも実は初めてだったりする。

「それで、あんたはこの後どうするんだい・・・？」

普通にいけばヒウンシティに向かうのが筋だとは思っけど・・・」

「いや、サンヨウシティに先に行ってから折り返してヒウンシティに行くつもりです」

「ふん・・・まあ、私に勝ったんだ。」

他のジムリーダーたちには負けるんじゃないよ!!」

それだけ言っただけアロエは博物館の中に戻っていった。

いや、戻ろうとして、

「ねえさーん!!」

そんな声に呼び止められていた。

「うん・・・？」

「ああ、またあんたかいアーティ」

アロエとシュバルツが視線を向けた先には一人の少年がいた。歳はほぼシュバルツと同じ程。

茶色い長髪にパーマをかけた細面の少年だ。

服はかなり独創的で、ベルトの部分は蝶の形状になっていた。

「なにかネタはないですか!？」

「またかい・・・？」

「もういい加減私には何も無いんだけど・・・」

駆け寄ってきた少年はどうやらこの街で努力している芸術家の卵らしい。

どうも、作品のことで行き詰っているようだった。

まあ、自分には関係ないか、とシュバルツが立ち去ろうとすると。

「そっだ!!」

「あんた・・・えーと・・・シュバルツ!!」

いきなりアロエに呼び止められた。

「・・・なんですか・・・？」

かなり不安に駆られながら振り返ると、

「あんだこれからイッシュを旅してまわるんだろ……？」

「まあ、そうですね……」

アララギ博士から頼まれた仕事や、ジム戦をこなしていくためにはどうしてもイッシュ地方全土を旅しなければならない。

だがそれがどうして今自分が呼び止められる理由になるのかがシユバルツには分からなかった。
が、

「……」

良い予感はしなかった。

「アーティ、あんたは色んなところを見てきた方が良い。

この街で芸術家同士で交流するのも大事だけど、もっと広い視野を持たなきゃだめだ」

「は、はあ……」

アーティもまたいきなりそんなことを言われて混乱しているようだった。

だが、アロエの言うことも分かるのか頷いて同意を示してはいた。
そんな自分よりも年下の少年二人に向かってこの街のジムリーダーは、

「と、いうわけで……あんたたち二人一緒に旅してきな!!」

そう言い放った。

そんな彼女の顔は、まさに名案だ、というような得意げな笑みを浮かべていた。

一方の言われた二人の少年はというと、

「……………は……………」

かなり茫然としてしまっていた。

? ? ? ?

【翌日】

シッポウシティからサンヨウシティに向かうゲートを抜けたシュバルツの隣には、

「よし、頑張っていこうじゃないか!!」

シュバルツはシュバルツの夢のために、僕は僕自身の作品のために!!」

「……………ああ……………」

やたらハイテンションなアーティの姿があった。

『ノズ……………』

『リオ……………』

『クルーー!!』

彼らのポケモンも主人と似たり寄ったりのテンションになっている。
・・・この二人で大丈夫なのだろうか・・・？

・
・
・
・
・
・

【おまけ】

「ガバイト【じしん】!!」

『ガバー!!』

トレーナーである少女の指示に従い、ガバイトが激しく地面を揺らす。

「クツ、まずい!!」

又オー!!」

相手のポケモンである又オーは【あなをほる】で地面に潜っていた。当然、受けたらマズイ。

普通でも威力が高いガバイトの【じしん】。

それを地中で受けてしまった。

その結果、

>又オー 戦闘不能。

挑戦者の勝利！！<

ジムリーダーの負けが確定した。

「やったー！！」

その宣言に喜ぶ挑戦者の少女。

ジムの中のライトの光を受け金糸の様に輝いている金髪を後ろで一括り　ポニーテール　にしている。

『ガバー！！』

彼女のポケモンたちも勝利したのが嬉しいのだろう。

喜びの声を上げている。

そんなポケモンたちと一緒に手渡されたバッジを見ながら少女は思う。

・・・シュバルツくんも頑張ってるかな・・・？

思っているのは一人の少年。

もう、顔も臍気だけれど、彼とした約束は今でも少女の中で生きていた。

自分と一緒にトレーナーになった少年。

自分の金髪以上に日の光を浴びて綺麗に輝いていた銀髪。

・・・次に会う時には、私たちがどれだけ成長したか見てもらおうんだ！！

自分の心も、ポケモンたちも、あとそれから自身の体も。（主に身長とか）

そんな決意を胸に少女は進む。
少年と再会できる日を願って。

5 回目 ハーデリア 再出発（後書き）

今回つけた【おまけ】ですが

- 1：今後も毎回つける
- 2：たまにつける
- 3：つけなくていい
- 4：外伝でまとめて

のいずれかにしようと思っています。

また、

「主人公の手持ちには是非このポケモンを！！」
という方がおられましたらお書きください。

最終パーティーに残るかどうかは分かりませんが、可能な限り努力して加えていこうと思います。

一つ目の期限は一応2011年の1月いっぱい。

二つ目に関しては特に期限など設けません。

是非、皆さんの御意見をお聞かせください。

6 匹目 クルマユ 呆れのち驚き(前書き)

遅くなつてすみません。

レポートとかテストが纏まって襲来すると、流石にキツイです。

この間付けた【おまけ】ですが、時々付けていくことにします。

大体2〜3話に一回ぐらいだと思つてください。

手持ちポケモンのアンケートは継続して行っていますので、どんどん意見を書きください。

6 匹目 クルマユ 呆れのち驚き

シッポウシティからサンヨウシティへと向かう道の途中、

「ねえ、シュバルツ・・・」

「なんだ・・・!?!」

「君・・・ポケモン捕まえたことないでしょ・・・」

「だったらどうした!!」

「いや・・・この先不安だ、と思ってね・・・」

「・・・・・・」

シュバルツは早速アララギ博士に頼まれた図鑑作成のため、ポケモンの捕獲作業に乗り出していた。

アーティも特別急いでいるわけではないし、同行すると決めた時にシュバルツの旅の目的も聞いているため、後ろからシュバルツに付いて行った。

とりあえず近場の草むらに入り、野生のポケモンを探し回り始め、すぐに一匹のポケモンを見つけた。

ここまでは良かった。

見つけたポケモンはシママで、特別変わったところがある訳でもないし、やたらめったら強い訳でもなさそうだったから苦戦する訳でもなさそうだった。

「先ず弱らせる為にシュバルツはモノズに指示を出したのだ。いや、指示してしまったと言うべきか・・・」
何故かシュバルツが指示した技は、

【かみくたく】

タイプ一致でかなり凶悪な威力になる物理技だ。
くらった方はと言えば、耐えられず地面に倒れ伏す。
で、倒れたポケモンは捕獲できないため、次のポケモンを探し、見つけては同じように技を指示し、ポケモンを倒していく。
当初の目的は達成できず、無駄に経験値が溜まっていく。
そんなことを10回ほど繰り返したところで冒頭の言葉をアーティから投げかけられたわけだ。

「だから、せめてもっと弱い技でやった方が・・・」

「そんなことしたら、こっちが倒されるかもしれないだろ!!」

『モノ!!』

「いや、見てる限りじゃまずあり得ないと思うんだけど・・・」

そもそもこんな状況になった原因は、シュバルツの今迄のポケモンバトルの経験の仕方にある。
普通、ポケモンバトルで経験を積みその辺りの手加減のやり方は分かると思うだろうが、シュバルツの場合はそんなことが分からない経験ばかりだったのだ。

というか、師が自分の父でイツシュ最強のジムリーダーであるシャガ、他にバトルの相手になってくれる人物もジムトレーナーであったり、父のバトル仲間であったりだ。

要は、相手の方が強いのが当たり前。

野生のポケモンにしても、8番道路や10番道路、それに9番道路のポケモンはそれなりに強い。

結局、手加減など出来る状況ではない。

そのため、手の抜き方が分からないのだ。

これが先のアロエ戦の様にトレーナーとのバトルなら問題はない。負けないために全力を尽くすのは当然なのだから。

だが、野生ポケモンの捕獲となるとそういう訳にもいかない。

相手の体力や状態異常、周囲の状況、ボールを投げるタイミングなど様々な要素を加味した上で挑まなければいけない。ただ相手を倒すことを考えれば良い訳ではないのだ。

「はあ・・・僕がやるから見といてよ・・・」

「むう・・・了解」

『ノ』

一先ずアーティはシュバルツとモノズを自分の後ろに下げ、自身が野生ポケモンの前に立つ。

今アーティの目の前にいるのはミネズミ。

イッシュではメジャーなノーマルタイプのポケモンだ。

余程油断しない限り、トレーナーのポケモンがやられることは少ない。

「出ておいで、クルマユ」

『クルー』

そんな相手に対してアーティが繰り出したのはクルマユ。

防御と特防が高めな種族値のむし・くさタイプのポケモン。

見かけだけで言えば、葉っぱに包まっているだけの幼虫が近いだろう……

そんなクルマユにアーティが指示したのは、

「クルマユ【くさぶえ】」

相手を眠らせる技。

命中率が低くバトルでは当たりにくい技ではあるが、

『　　』

『ミ・ミ・ミ……ZZZZZZZZ』

こちらの様子を警戒している野生ポケモンならば、当てやすい。

なんせ、こちらは攻撃しているわけではなく、音を奏でているだけなのだから対処しようがない。

「眠ったね。」

クルマユ、【いとをはく】」

アーティの指示に従い、クルマユが糸を吐きだし、ミネズミの体に巻きつけていく。

これによって、更に行動が制限されるミネズミ。

「あとは、体力を減らしていくのさ。」

【はっぱカッター】」

そんなミネズミにクルマユから数枚の回転した葉が勢いよく向かって行く。

眠っている上に、糸に包まれているミネズミは避けることが出来ず、

『ミ！！』

全ての葉が直撃する。

「・・・こんなもんかな・・・？」

相手の体力がそれなりに減ったのを見届けたアーティは、

「それ！！」

手にボールを持ち、ミネズミに向かって勢いよく放り投げる。

コンッ！！

放り投げられたボールはミネズミに当たり、対象をボールの中へと収める。

カタカタカタカタカタ・・・

そして、暫く揺れ続け、

カタ、カタ、カ、カ、カ・・・

揺れが治まった。

「よし！！」

『クル!!』

それを見て、捕獲できたと確信したアーティはボールを拾い上げ、

「どうだい？」

これが捕まえるっていうこと、だ・・・」

得意気に、自分の事を見ているであろうシュバルツの方へと振り返った。

で、その先で彼が見たのは、

「うん？どうした？」

『リオ?』

アーティのやり方を見て要領を掴んだのか、既に新しく3匹ほどボールに収めることに成功したシュバルツの姿だった。

どうやらクルマユの姿を見てモノズでは強すぎると判断したのか、リオルに変えて挑戦したところあっさりと弱らせ早々に捕まえていた。

「・・・いや、君が捕まえられたならそれでいいよ。

いいんだけど・・・とりあえず一発殴らせて・・・」

『マユ〜』

「そんなもんいやに決まってるだろ」

『リオ』

シュバルツの呑みこみの良さに何とも言えない気分になるアーティとクルマユだった。

? ? ? ?

「はあ、思ってたよりも長かったな・・・」

「そうだね」

無事3番道路を抜け、サンヨウシティに辿り着いたシュバルツとアーティ。

途中の草むらで、データにないポケモンを捕まえるだけ捕まえてきたので、シュバルツはかなり疲れていた。それに付き合っていたアーティも同様。

「取り合えず、ポケモンセンターに行こうよ。」

「今日寝る場所も確保しておきたいし」

「そうだな」

綺麗に造り上げられたガーデンングに迎えられながらサンヨウシティの中心部へと向かって行く二人。

水と樹の庭園を抜けた先は石畳になっており、シツポウシティとはまた違った趣となっていた。

アーティは芸術家の卵として色々と思うところがあり、可能ならも

つと見ていきたかったのだが、シュバルツが全く興味を見せずに進んでいくので溜息をつきながらも足早にそれらの間を通り抜けて行った。

まあ、後で見に来ればいいと考えていたからだというのもある。石畳を歩き続け、街の中心部に来ると、

「お、在った在った」

二つの細長の建物に挟まれる形でサンヨウシティのポケモンセンターは存在していた。

ポケモンセンターの形は地方統一であるため、見知らぬ街でもこの建物さえあれば一先ず落ち着くことができる。旅人には非常にありがたい建物なのだ。

「早く入って手続き済ませちゃおうよ」

「ああ、そうだな。」

こいつらも休ませてやらないといけないし、預けないといけない奴らもいるしな」

シュバルツとアーティは共に10歳程の年齢であり、本来であれば親元を離れてこんな風に旅ができる訳がない。

だが、それらの問題もポケモントレーナーとして許可が下りれば特に問題なかったりする。

この辺りの許可の基準は地方ごとのポケモン協会の考え方によって差があるのだが、どこでも同じなのは、許可証を見せればポケモンセンター内の宿泊施設が使用可能となるなどのポケモン協会からの支援が受けられるということである。

因みに、シュバルツとアーティの二人ともこの許可証は持っているというか、持たずに旅をしている人間はあまりいないだろう。

タダで宿が手に入るのに利用しない人間というのもどうかと思える。
というわけで、

「すみません。」

今夜宿泊したいんですけど」

「二名様ですね。」

お二人とも同じ部屋でよろしいでしょうか」

「ええ、大丈夫です」

「分かりました。」

では、許可証の方を見せていただきますか・・・？」

「はい」

ポケモンセンターに入った二人はポケモンを預け、受付に向かい、
宿泊の手続きを始めた。
言われるがままに許可証を提示し、

「ありがとうございます。」

では、こちらがお部屋の鍵となります。

ゆっくりとお寛ぎ下さいませ」

宿泊許可を取り付ける。

これがホテルとかであれば、荷物を運んでくれたりするのだが、仮
にも公共の施設である。

そんなサービスは中々してくれない。

まあ、部屋にはちゃんと案内してくれるから問題ない。

で、部屋に到着した二人はというと、

「はあ、ジム戦は明日でいつか・・・よし、あいつらが戻ってきたらとりあえず情報収集だ。」

「アーティ、お前はどつする?」

「僕はポケモンたちが戻ってきたら街を見て回ってくるよ。この庭園とか建物はかなり美しい芸術品だったからね」

「そうか・・・じゃあ、一先ずフロントに降りるとするか」

「そうだね」

一先ず荷物を部屋に置き、今後の予定を確認し合い、フロントに降りることにした。

その際に、財布等の必要かつ大事なものを持っていくのは忘れない。

「シッポウジムは流れで挑戦することになったからな・・・サンヨウジムはちゃんと準備していくことにするか」

「いや、流れで挑戦して勝てる君は少々おかしいと思うよ」

「そうか?」

「うん」

仮にもジムリーダーであるあの少女に勝てたシユバルツの姿は、アーティにとっては、先程ポケモンの捕獲で手間取っていた事を忘れさせるぐらいに、どこか遠い世界の存在に思えた。

「まあ、俺も最初は勝てるとは思ってなかったしな」

「そうなの!？」

「ああ。

ジムリーダーの実力は俺自身、身をもってよく知ってるからな・
」

そう言つて、良く分からない方向に視線を向け、何とも言えない雰
囲気に浸り始めたシュバルツ。

そんな10歳という年齢に似合わない少年の姿に、

「い、色々あつたんだね・・・」

アーティは今日一日で、この少年のイメージが自身の中で大きく揺
れ動いているのを感じ取っていた。

最初は、どこか大人びた雰囲気を漂わせた熟練のポケモントレーナ
ー。

次に、思っていたよりも子供っぽい、負けず嫌いな少年トレーナー。
そして今は、過去を思い出し、懐かしんでいる老人トレーナー。

どれも彼という少年に当てはまり、どれも当てはまらない。

「ああ、流石に10番道路のトレーナー全員倒すまで飯抜きはきつ
かった・・・」

「そんなことやってたのかい!？」

10番道路と言えば、ポケモンリーグに向かうための道路であり、
トレーナーの強さもそこらにいるトレーナーとは比べ物にならない。
そんなトレーナーたちをこの銀髪の少年は全員倒したというのだろ
うか。

頭の理解が追いついたアーティがまず口に出したのは、驚愕の叫び声だった。

一方の驚かれているシュバルツの方はというと、

「そんなに驚くことか・・・？」

自分が言ったことでアーティが驚く理由が分からず、首を捻っていた。

7 匹目 チヨロネコ 初遭遇（前書き）

まずは、今回の地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。
また、怪我や避難所生活を強いられている被災者の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

これから大変だと思いますが、前を向いて頑張っていってください。
私自身は、何かできるとは思いますが、募金や大学の被災者の支援で少しでも手助けになればと思っています。

最後に、一月以上更新もせずすみませんでした。

7 匹目 チヨロネコ 初遭遇

サンヨウジム

ジムリーダーは、初老の紳士であるトウアラ

物腰は穏やかだが、バトルになると熱くなる性格を秘めている。

使用タイプはジムリーダーとしては珍しく、炎・水・草の3つのタイプ。

バトル形式は2vs2を好む。

最近三つ子の孫が生まれた。

「・・・こんなもんか・・・」

『ノ〜』

現在、シュバルツはポケモンセンターのロビーにある長椅子に腰かけながら、集めた情報を整理していた。

アーティと別れ、街の人間や、掲示板、それにトレーナーズスクールなどでジムリーダーの情報を集めた結果が、上記のような結果である。

「にしても、炎・水・草か・・・」

水がいるから少々不安だが・・・まあ、タイプは問題ないだろ」

『モ！！』

ドラゴンタイプであるモノズがいる以上、どのタイプの技も『こうかはいまひとつ』であるはずだ。

リオルも特に+-があるわけではないから大丈夫だろう。

まあ、相手はそのタイプの技だけをしてくるわけではないのだから、安心できるかと聞かれれば、そうとも言えないのだが・・・

「2vs2だからメンバーも大丈夫だし。

一応近場で特訓してくるか」

そう呟き、シュバルツは長椅子から立ち上がりポケモンセンターの出入り口へと足を向ける。

そんな彼の横をモノズがトコトコと付いて歩き出す。

彼らが向かった先は夢の跡地と呼ばれるサンヨウシティからは少し離れた広場。

時刻的にはもう日がかなり傾き、あと1、2時間もすれば日も沈み夜の闇が周囲を包みこむことになる。

あまり子供がうるついでいい時間とは言えないが、旅をしているシュバルツからすればそんな問題は今更なのだろう。

と、足を進める彼らの耳に、

「・・・ですから、ポケモンはトレーナーである人間から解放され、自由にならねばならないのです!!」

そんな言葉が聞こえてきた。

講演や演説か何かのようなその語り方は、聞いている人々の思想そのものを侵し、変革していくかのようにも聞こえた。

事実、聞き入ってしまったっている人々の顔は段々と罪を悔いるかのような表情になってしまっている。

「・・・なんだありや・・・?」

「ノ?」

と思っているのだろうか、ボールに伸ばす手から躊躇いが徐々に消えていつている。

そんな彼らの姿を見たシュバルツはというと、

「あほらし・・・」

そんな言葉を洩らし、視線を向かう先へと戻すと再び歩き出した。彼の手持ちであるモノズも逃げることなく、当然の様にシュバルツに付き添っている。

そもそもシュバルツは、世界には色々な人間がいることを既に知っている。

夢に向かって努力する人、私利私欲に走る人、責任感から人々を纏めようとする人、人の上に立ち他人を導いていく人、快楽を貪る人、無償の奉仕を生き甲斐にしている人、等々様々な人間がいると言うことを。だから、

ま、あんな考え方をする人間だっているわな

そんな風に考えてしまえる。

そして、それを真実だと思って彼の言う通りになる人間も、その思想を懂れ付き従う人間も、彼にとってはどうでもいい。

前者や男は自身とポケモンの絆を信じ切れていないから、もしくは実際に後ろめたい部分があるからそんな行動を取ってしまうのだと思っっているし、後者は純粹な懂れから生じたものだ。

所詮は他人と、他人のポケモン。

ドライと言われるかもしれないが、そんなものだ。

自分に迷惑がからなければ勝手に騒いでいればいい。

ただ、それでも、

「あいつが、ポケモンのことを何でも分かっている風に喋っているのだけはムカつく!!」

『ノズ!!』

カタカタ!!

そう思ってしまう。

それは、彼のパートナーたちも同じだったようで、モノズは声を出して、リオルはボールを揺らして同意の意を示す。

確かに、あの男の言う様に望まぬ戦いを強いられているポケモンもいるだろうし、着飾って見世物にされているポケモンもいるだろう。特に先程逃げ出したチヨロネコはそうなのだろう。

あそこまで勢いよく逃げ出すなど普通のトレーナーとポケモンの関係ではない。

懐いていないときは、トレーナーの言うことを聞かなかつたり、反抗してトレーナーに危害を加えることはあるが、一目散に逃げ出すなど余程のことだ。

反抗する気力さえ失せるほど、あのチヨロネコは何かされたのだろうか、と邪推してしまう程に。

そんなポケモンたちを解放するのは、シュバルツだって反対しない。寧ろ、率先して手伝うだろう。

だが、男が語ったようなポケモンはごく一部だ、とシュバルツは思っている。

ひょっとしたら自分が知らないだけで、眼を逸らしているだけで、本当はそんなポケモンたちばかりなのかもしれない。

だけれども、それこそ全てのトレーナーとポケモンを平等に調査していけないと分らないことだ。

そんなこと出来る訳がない。

それに、野生が本当に良いものとは思えない。

それは、自身のパートナーであるリオルがおかれていた境遇が何よりも示していた。

親にも、仲間にも見捨てられたポケモン。

そんな存在にさせる訳にはいかない。

勿論、野生のポケモンがそんな存在ばかりではないことぐらいシュバルツにも分かっている。

それでも、シュバルツはあの男の言っていることは間違っていると決める

身勝手に、一方的に、決めつける

あの男がどうなるうが、周囲の人間がどれだけ男を称えようが、聞き入っていた人々が絶望に陥るうがどうでも良い。

ただ、あの男の身勝手な発言だけは許さない

そう心に区切りをつけ、シュバルツは胸に燻るモノを発散するため、翌日のジム戦の特訓のために急ぎ足で夢の跡地へと向かった。

?
?
?
?

【翌朝】

ポケモンセンター内の一室で目を覚ましたシュバルツ。

「……誰……?」

隣のベッドで寝ているアーティを見てそんなことを呟いていたが、

「ああ、アーティか……」

頭に血が通ってきたのか、寝ている栗毛の男子のことを思い出していた。

まだ性格をよく知っていると言えるほど付き合いがある訳ではないが、とりあえず同じ部屋で寝ても問題が起きるような性格ではないようだ。

それが分かり、今更安心するシュバルツ。

問題が起きていたらどうするつもりだったのかは考えていない。

それはそれで問題だとは思うが。

とりあえず、彼と彼の手持ちポケモンたちによる全力の制裁が加えられるであろうことは確定しているだろう……

ポンツ

「ああ、今日はお前か……おはよう、リオル」

『オル!』

そんなのんきな事を考えている彼のパートナーがボールから飛び出してきた。

先日の旅立ちの日の朝はモノズだったが、今日はリオルの様だ。

交代で飛び出てくる訳ではなく、単に早く起きた方が朝一でシュバルツと過しているのだ。

これがシュバルツが自身のパートナーたちと良好な関係を築いている何よりの証拠だろう。

「丁度いい、アーティの奴を起こしといてくれ。
俺は顔洗ってくるから」

そんなことをリオルに頼み、シュバルツ本人は部屋を出て行った。
その際、顔を拭くタオルや、歯ブラシなど必要なものを忘れるようなことはせず、しっかりと鞆の中から取り出し、出て行った。
一方の頼まれたリオルはというと、

『リー!!』

元気よく返事を返し、未だに気持ちよく寝ているアーティへと向かって行く。

「うーん・・・もう・・・描ききれないよー」

そんな彼の目的であるアーティは、ベタなのかそうでないのかよく分からない寝言を呟いていた。

『・・・』

リオルが彼の枕元に立つ。

「ZZZZZZ・・・あ、勿体ない!!
折角のメラルバの卵を!!」

アーティの寝言が割と本人にとって切実な夢の内容へと変わる。

スッ

リオルが自身の腕を頭上へと上げる。
その腕を、

「ア、アロエ姉さん!？」

こんな所まで!!

いや〜、もうやめて〜!!」

『リオツ!!』

思いつきり自身の足元で眠っているアーティの頭部へと振り下ろした。

・
・
・
・
・

「うう、まだ頭がズキズキする・・・」

「自業自得だろ」

「いやいやいや、絶対、違うからね!？」

朝食を摂り、ポケモンセンターから本日の目的地であるサンヨウジムに向かっていているシュバルツとアーティの二人。

因みに、旅自体急いでいるものでもない為、余程のことがない限り今日もジム戦を終えた後はサンヨウシティで一泊し、翌日から次の目的地であるヒウンシティを目指す予定だ。

間にあるシツポウシティで一泊するかどうかは、ヤグルマの森が道中にあるため未だに検討中である。

そのため、既にポケモンセンターのフロントで今夜の分を受け付け

済みである。

というか、無意識だろうが、二人ともサンヨウジムでは負けるつもりがないと思っっているのだろう。

そうでなければ、宿泊する日程を一日単位で考えたりはしないのだから。

「家では時間通りに起きてこなかったら、問答無用で姉さんに叩き起こされてたから普通だと思っってたんだが………違うのか……？」

「違うよ!!！」

「何もかも!!！」

「まあ、だからって今後このやり方を変えるつもりはないから。大体7時ぐらいまでに起きてれば大丈夫だ」

「いや、少しは時間を遅くするとか考えないのかい……？」

「全く」

「……はぁ……」

アーティは思った。

……こりゃ、旅する相手間違えたかもしれない。

と。

そりゃそうだ、毎朝ポケモンの技を朝一番に受けて起床する羽目になるなど誰だって避けれるものなら避けたい。

しかも、そのポケモンがそんじょそこらの一般トレーナーなど比較

にならないほど鍛えられたポケモンなのだ。
尚のこと勘弁してほしい。

・・・せめて、もう少し早起きしよう。

そつと心のうちでアーティは決意したが、早々実行できることもなく、翌日モリオルの【はっけい】で起こされる破目になるだろう。
とまあ、そんなことはともかく、

「そんなこと!?!」

「いきなりどうした、アーティ?」

「いや、なんか言つとかなきゃいけない気がする・・・」

メタ発言はともかく、

「着いたな」

『ノズ』

『リオ』

二人(+3匹)は目的地であるサンヨウジムに到着した。

二人が泊まったポケモンセンターから然程距離があった訳でもなく、徒歩での所要時間は凡そ5分程度であっただろう。

彼らの想像より早く到着した。

ゴク

アーティが唾を呑む音がシュバルツにも聞こえた。別にアーティが挑戦する訳ではないのだが・・・寧ろ、シュバルツはアーティのその行動のお陰で自身の緊張が薄れていくような気がした。だから、程良い緊張感を持って、

「行くぞ」

サンヨウジムの扉を開くことができた。

重たく、古い木の扉が重厚な音を周囲に響かせながら開いていく。長らく挑戦者がいなかったような、重たい、重たい、人が足をこの先へと進めることを躊躇うには十分な威圧感を含んだ音。その音に怯むことなくシュバルツは一步踏み出し、

「お待ちしておりましたぞ、シュバルツ殿」

そんな彼が予想もしていなかった声に迎えられることとなった。

7 匹目 チヨロネコ 初遭遇（後書き）

もう一つの小説は更新していたのにこっちを書かないですみませんでした。

単に、ネタが思いつかなかったのもありますが、あっちはあっちで気がのりまくってしまったというのもあります。

また、この小説で被災者の皆様のストレスを少しでも和らげることが出来たら何よりです。

8 回目 バオッキー VS サンヨウジム (前書き)

本文より何より、前書きの内容に四苦八苦する自分があります。

後書きなら本文の内容書けるんだが、前書きで書くのみな・・・

まあ、単なる愚痴ですので、お気になさらず本文へどうぞ。

8 匹目 バオッキー VS サンヨウジム

「お待ちしてありましたぞ、シュバルツ殿」

サンヨウジムにシュバルツたちが足を踏み入れると同時に聞こえてきたその声は、圧倒的な威圧感を感じさせる 様なものではなく、寧ろ風に舞う木の葉のように捉えどころのない飄々とした雰囲気を感じる声だった。

ジムの中は昼間だというのに暗い。シュバルツたちに見えるのは、外の光が差し込んでいる入り口付近のみ。

スピーカー等の装置を使っているのだろう、声の主は姿を見せることなく、ジム内部に声が響き渡っている。

「・・・あなたが、トウアラか？」

聞こえてきた声の主の正体をジムリーダーだと考えたシュバルツは、怯むことなく即座に返答を闇の中へ返す。

アーティはそんなシュバルツのまるで動じていない豪胆さに軽い驚きを覚えながらもジムの内部へと目を凝らす。

照明が落ちているとはいえ、全てが闇の中という訳ではない。眼も慣れてきたのか、少しずつではあるがジムの内部の様子が見えるようになってくる。

アーティに見えてきた周囲は、幕の様なもので覆われていた。

「ほほほ、流石はシャガ殿の御子息ということですかな。

僅か10程の少年からは中々感じられない気迫が見える。

・・・個人的には、以前会った時のような愛らしい性格の方が良かったのですが・・・」

シュバルツの疑問には答えることなく、声の主はただ自身がシュバルツに抱いた率直な感想を述べていく。

お蔭でシュバルツはやや不機嫌な面持ちだ。

相手からは自身の姿が見えているのだろうが、自分からは相手の姿などまるで見えない。

その上、勝手に評価され、あまつさえ過去の自身と比較される。

その事に苛立ちながらも、何があるか分からないのだから極力隙を見せない様に、と自身とポケモンたちに言い聞かせる。

そんな彼の隣に立っているアーティは、シュバルツが以前は愛らしい性格だったと聞いて驚愕していた。

彼の知っているシュバルツからは、そんな姿などまるで想像できなかったというのが大きな理由だ。

これがシロナだったら、逆に今のシュバルツが信じられないかもしれないが・・・

「以前」？

どこかで会ったことがあったか・・・？」

「ええ。」

まだあなたが3、4歳の頃でしたか・・・

それはもう、姉であるアーシェ殿や両親、特にシャガ殿の後を付いて回っていた姿を今でもよく覚えていますよ」

「・・・・・・・・」

シュバルツとしては、そんな時分の頃の話を出されても困る。

明確に自己というものが無かった時の自分と現在を比べられれば・・・
・そりゃあ、誰だって昔の方が可愛げがあるだろう。

「私にも最近、以前のあなたがたのような孫ができましたな。

いや、これが昔のあなた方とは違いやんちゃん三つ子でして・・・

」

「・・・だったら、どうした・・・」

正直、顔も見えていないうえに、性格もよく分かっていない（ついでに言えばまだ名乗っていない）相手の孫の話などどうでも良い。はて、シュバルツはジム戦に来たはずなのだが・・・なぜ老人の世間話に付き合っているのだろうか？

「いえ、シュバルツ殿はともかく、アーシエ殿であれば既に10と4になっていたはず。

結婚は早いにせよ、男女交際の相手の話など聞いたりしたことはないのですかな・・・？

先日お会いした時、シャガ殿も早く孫がみたいと仰っておられましたのに」

「・・・あんの馬鹿親父・・・」

いくらなんでも早すぎるだろうとシュバルツは思う。

14歳という年齢の姉に恋人がいたとしても特におかしいとは思わないが、孫の事を期待するのは早すぎるだろう。

ただでさえ自身の姉は気が変わりやすくて扱いの大変な性格なのに、シャガという（表向きは）非常に威圧感のある男性が父親なのだ。

男女交際の範囲を超えて、結婚に至るなど容易な覚悟ではないだろうに・・・

しかもその期待を何だってこんな相手に話しているのか。

「ですから、人生の先達者としてその辺りの話をですな・・・ああ、

そう言えば、シュバルツ殿にはその様なお相手はおられないのですかな？」

「爺さん、いや、ジジイ。」

人の歳を考えてからそう言ったことは話せ・・・いるわけないだろうが！！」

何故にわざわざサンヨウジムにまでやって来てそんな赤裸々な話をしなければならぬのか。

そんなに話したいのならせめて目的であるジム戦を終わらせてからにしろ、と銀髪の少年は思う。

大体、相手の姿も見えていないことに加えて会話の内容が内容だ。

シュバルツも隠していたはずの苛立ちを明らかに表に出すようになっていた。

隣にいるアーティに至っては、自身が標的にされていないのを良いことに、その場にサツサと座り込んで自身のポケモンであるクルマユの毛繕い（葉繕い？）を始めていた。

アーティ自身、シュバルツのそういつた話に興味が無いと言えば嘘になるが、下手に首を突っ込んで自身が苛立ちの捌け口にされては堪ったものではない。

「ほ！？」

ですが、シュバルツ殿には幼いころに“誓い”を交わした相手が既にいるとシャガ殿から伺っておりましたが・・・私の聞き間違いでしたかな？」

「・・・あの馬鹿、いや、クソ親父・・・どこまで話してんだ！？

口が軽いにもほどがあるぞー！」

因みにシャガの名誉のためにも軽く弁明しておく、彼がその内容

を声の主に語った時、彼は泥酔していた。

やたらと度数の高い酒を、声の主や、ヤーコン、それにハチクやアデクといった面々と共にかっ喰らい、普段の彼からは想像が出来ないほど酔いつぶれていたのだ。

なので、ベテランのイツシユのジムリーダーやポケモンリーグの実力者たちには意外とシュバルツとシロナの関係は曲解して広まっていたりする。

とはいえ、シュバルツがそんなことを知る訳もなく、

「帰ったら思いっきりぶん殴る!!」

そう心の内を声に出してぶちまけていた。

この時シュバルツが思い出していた“相手”は5年前の金髪の少女のことであり、“誓い”も互いがポケモンを抱いて交わしていた“約束”のことである。

“相手”は正解かもしれないが、“誓い”の内容が異なり過ぎているのは如何なものか・・・

そんな彼の様子を見ていた声の主は、

「その様子だと相手はおられるようですね。

結構結構!!」

恋に歳など無意味!!」

“人生は恋に始まり恋に終わる”と言っても過言ではないのですからな!!」

そんな言葉を言ったのけた。

名言なのか、それとも迷言なのか判断に困るところだが、そんな言葉を聞かされた少年二人が心に何も感銘らしきものを受けていないのだから恐らくは後者なのだろう。

「俺のことはもういいから、そろそろ始める!!」

これ以上こんな話を続けるなら、ジムの全部を破壊してやる!!」

声の主の言葉にいい加減耐えられなくなったのかシュバルツがそう言い放つ。

かなり眼が据わっていることから、隣に座っているアーティにも割と本気でモノを語っていることが分かる。

そんな彼の様子が分かったのだらう、声の主もこれ以上余計な事を喋るようなことはせず、

「良いでしょう。」

ルールは2vs2、そして、2匹のうちどちらか一方が戦闘不能になった時点で勝敗が確定します。

それでよろしいか？」

「ああ」

このジムのルールはシュバルツも前もって調べていた。

耐久力のあまりない手持ちの2匹ではやや不安だが、その分攻撃力は何ら引けを取るものではないとシュバルツは思っている。

だから、速攻で決める!!」

「ふふ・・・シャガ殿から貴方の成長を聞かされる度、私も一度お相手したかったのですよ!!」

声の主がそう言うと同時に、

ガッ

シュバルツたちの周囲

入口周辺

を取り囲んでいた幕が一息

で引き上げられ、消えていた灯りが全て点灯される。

「ッッッ!!」

突然の周囲の変化に戸惑い、更には急激に明るくなったことで眼が眩ませられてしまうシュバルツとアーティ。

そんな戸惑う二人、いや、挑戦者である銀髪の少年に、

「お相手しましょう。」

サンヨウジム、ジムリーダーである私、トゥアラが!!」

目の前の執事服を纏った初老の男性が言葉を投げかけた。

?
?
?
?

「行け、モノズ!!」

「ノズ!!」

「お相手して差し上げなさい、ヤナップ」

『ヤナップ』

二人が繰り出したのはモノズとヤナップ。

片やイツシュ600族の最年少期。

片やイツシュ三猿の進化前の一匹。

攻撃や耐久面ではモノズの方が若干上だが、素早さだけは圧倒的にヤナップが上回っている。
シュバルツもそれは分かっているのだろう。
すぐさま、

「モノズ、【こわいかお】」

自身のポケモンに相手の能力を下げるよう指示を出す。

『ノズ!!』

忠実に行動するモノズ。

そんなモノズの顔をまともに正面から見てしまったヤナップは、

ビクッ!!

『ヤ、ヤナップ』

脅えてしまい、足がやや竦んでしまう。

そんな自身のポケモンと、相手のモノズを見てトウアラは、

これは、予想以上にできる!!

そう判断していた。

トウアラがあれだけジム戦とは関係のないことをシュバルツに話しかけたり、ジムの内部を暗くし自身の姿を見せなかったのは、単なる嫌がらせという訳ではない。

・・・いや、少しは下世話な老人の興味、という意図があったかもしれないが・・・

本来の狙いは、挑戦者であるシュバルツを苛立たせることで冷静な

思考をさせないようにするつもりだったのだ。

暗闇の中であれだけ自身のことを一方的に評価されたり、語られたりすれば誰だって苛立つし、さっさとその場所から逃げ出したいくなる。

そして、その感情を保ったままバトルに臨めば、大抵は苛立っていた分、すぐさま攻撃に移るはずである。

それは、溜まった鬱憤を晴らすためであったり、すぐにその場所から立ち去りたいという欲求であったりと、人を急かす感情だ。いずれにせよ、拙速であり、付け入る隙がいくらでも出てくる。

だが、シュバルツはそうならなかった。

冷静に相手と自身の戦力差をすぐさま分析し、攻撃に移ることなく、自身が最適と考えた行動を取った。僅か10程の少年には中々出来ない所業だろう。

流石は、シャガ殿の息子……いえ、流石、シュバルツ殿、と言うべきなのでしょう。

心中、そうシュバルツのことを褒め称えながらも、老獪は手を抜くようなまねはしない。

それは、ジムリーダーとして何より恥ずべき行為だから。

どんな相手でも全力で相手をする。

それが挑戦者に対する礼儀だとトゥアラは思っているし、常にそうしている。

「ヤナップ、【やどりぎのタネ】」

『ナ』

「先ず一匹倒れたら負け、というルールで少しでも有利になるため
そう指示を出すか、」

「モノズ、【やきつくす】」

『モ』

シユバルツもそう易々とさせてはくれない。

モノズが吐いた炎が飛んできたタネを焼き尽くし、そのままヤナツ
プへと向かって行く。

モノズが吐いた炎は【かえんほうしゃ】の様に威力が高い訳ではな
い。

むしろ【ひのこ】が大量に集まり広範囲を覆い尽くす様な密度の薄
い炎だ。

一撃で落ちるような技ではないが、追加効果が厄介だったりする。

対象のポケモンが持っている木の実を文字通り【やきつくす】のだ。
しかも、ヤナツプの特性は【くいしんぼう】。

夢特性など色々あるが、基本はこれだろう。

その事を考えれば持ち物は何らかの木の実である可能性が高い。

「ヤナツプ!!」

『ナツプ!!』

そして範囲が広い炎の波を素早さの下がったヤナツプは避け切れず、
当たってしまう。

幸い威力が高くないこともあり、ダメージはトウアラが思っていた
よりも少なく済んだが、

『ヤ』

「・・・むう・・・」

持っていた木の実が燃えてしまった。

ヤナップが持っていたのは、

「“カラム”の実、か・・・」

シユバルツが燃え尽きた木の実の燃え滓を見てそう判断する。

ピンチになれば木の実を食べて逆転しようという算段だったのだから、

「残念。」

これで一先ずこちらが有利だ。

一気に行くぞ、モノズ、【ほのおのキバ】

『モ!!!』

叫んだモノズの牙に炎が纏わりつき、目の前の獲物へ噛みつきごとと向かっていく。

その様子を正面から見てとったトゥアラは、

「ヤナップ、【くさむすび】」

『ナ』

ヤナップにそう指示を出した。

主人の指示を聞いたヤナップがすぐさま足元に手を付け、【くさむ

すび】を発動させる。

それは今にもヤナツプに噛みつこうとしていたモノズの足を捕え、

『モノズ!!』

勢いよくモノズを顔面から地面へと転ばせた。

幸い、モノズはそれほど重くないためダメージは少ないが、転んで体勢が崩れ、キバに纏わせていた炎も消えてしまっている。

ベテランのジムリーダーであるトゥアラは、そんな隙を見逃す様なことはせず、

「ヤナツプ、【アクロバット】」

すぐさま指示を出した。

『ヤッ!!』

木の実はなくなくなってしまったが、その分軽やかに攻撃できるようになったヤナツプが目の前のモノズへと肉薄し、両手と尻尾を振り上げ、モノズへと叩きつけようとする。

だが、シュバルツとてそう易々と攻撃を成功させるつもりはない。

「モノズ、【おどろかす】」

『モノ!!』

パァンツ!!

攻撃へと移っていたヤナツプの眼前でモノズがいきなり大きな音をたてる。

それに気がとられ、一瞬怯んでしまったヤナップ。
怯む確率は三割程だが、シュバルツの咄嗟の賭けは成功したようだ。
【まもる】にするかどうかで悩んでいたシュバルツだが、体勢の崩れたモノズが防御姿勢に入るよりも早く、ヤナップの攻撃がモノズに直撃するのが速いと判断しての【おどろかす】だった。
幸い、相手も怯みその一瞬でモノズはヤナップの攻撃範囲から遠ざかる。

「ほっほっ、やりますな、シュバルツ殿」

「あんたに褒められても、あんまり良い気がしないんだが・・・」

「御謙遜なさるな。」

その歳で既に我々のような実力を身につけつつある。
大したものですよ」

トウアラは純粹にシュバルツの技量を褒め称え、感心していた。
技の効果だけを考えず、それをポケモンが発動させるまでの時間、タイミング、それらを瞬時に判断できるのはベテランのトレーナーであったとしても、早々出来るものではない。

それをこの少年はやってのけた。
ここで感心せず、いつ感心しろというのか。

「ジムリーダー様にお褒め頂き恐悦至極。」

気が乗ったげ、あんた予想以上に楽しい相手だ。

お礼といっちゃなんだが、面白いものを見せてやるよ。

・・・モノズ、戻れ」

そんなことを言ったシュバルツはモノズをボールへと戻し、今度はリオルをバトル場に呼び出す。

トウアラとしても何ら問題の無い行為であるため、特に挑戦者の行動を止めるようなことはしない。

むしろ、ポケモンを変えたことによって何が起きるのかの方が楽しみだ。

老獺なジムリーダーと言っても彼も、一人のトレーナー。

相手の予想外の一手は何よりも興味をそそられるものだ。

熱心に挑戦者の様子を観察する老獺に、若者（子供）の声が届く。

「なあ、あんたりオルの進化条件って知ってるか……？」

「リオルの、ですか……？」

「ああ」

聞こえてきた声の内容はバトルとはまず関係ないであろうものだった。

それでも、向こうがこちらが答えるまで攻撃してくる様子がなかったため、トウアラはこの会話を続けようと思った。

それで何か分かるのなら、自分にとっても特になると思ったためだ。

「ふうむ……一般にはトレーナーに対して“なつき”が最大限まで上がった時と言われておりますな。

それが、どうかしましたか……？」

そんなジムリーダーからの答えに、笑いながらシュバルツは返事を返す。

まるで、目の前の老獺の無知を嘲笑うかのような表情になりながら。

「ククク……いや、やっぱりそんな認識だよな。

だけど、おかしいと思ったことはないのか？」

それなら何故野生のリオルやルカリオがいるのか」

「それは・・・」

そう、“なつき”で進化すると言われているポケモンが何故野生に
いるのか。

人が捨てたポケモンだったとしても、その数はそれほど多くない。
トレーナーに対しての“なつき”でしか進化できないのであれば、
野生にルカリオたちがいるわけはないではないか。

ゲーム内では今のところ野生のルカリオは出てこないが、野生のリ
オルは出てくる。

それなら野生のルカリオは存在するはずだ。

なんせ、リオルは卵グループが『未発見』のベイビーポケモンなの
だ。

ルカリオという、“親”がいない限り、野生のリオル、つまり“子
供”は生れてこない。

ならば、野生のルカリオはどうやって進化しているのか？

「まあ、俺も野生のリオルがどうやって進化してるかなんてのはど
うでも良いんだ。

そんなのはアララギ博士みたいな研究者が調べれば良いことで、
俺には何にも関係が無いし・・・

俺が言いたいのは、リオルが進化するのに“なつき”なんて本来
は関係ないってことだからな」

「それは、一体どういう意味で・・・？」

トウアラには目の前の少年が言っている意味が分からなかった。

何故、こんなことを聞かせるのか？

話の内容は勿論、それを今ここで言う意味も。

ただ、一つ分かったのは、今、この場の空気がこの少年に支配されているということ。

10歳程の少年に、知らぬ間に自身が取り込まれつつあるということ。

「なに、要は今から進化して見せるってことだよ!!
リオル【なげつける】!!」

『リオ!!』

朗々と語っていた話を止め、一転して攻撃に移行する。

咄嗟の攻撃だったが、そこは流石ジムリーダー、

「ヤナップ!!」

『ナップ!!』

すぐさま自身のポケモンに回避するよう指示を出す。

ヤナップもそれに答え、すぐさま回避行動に移る。

ヤナップが先程まで立っていた場所を一つの物体が勢いよく通り過ぎていく。

それは、先程までリオルが持っていたはずのもので、

「石……?」

まさか、『かわらずのいし』!？」

その正体に気付いたトウアラは驚いた。

まさか、こんなものをジム戦というそれなりに重要なバトルの時に

持たせているトレーナーがいることも、何より、

「さあ、始まるぜ」

本来の力を抑えたまま、これまで闘ってきたということに。

そして、この少年の力量を自身は見誤っていたのだと。

彼の父親など比較対象にはならない。

才能だけなら、チャンピオンであるアデクにも負けないだろう。

いや、ひよっとしたらそれ以上かもしれない。

そんな驚愕を見せるトウアラを余所に、リオルが光に包まれる。

光に包まれたリオルは大きくなっていく。

身長は凡そ倍に、四肢はより長く、太く、力強く。

両手の甲と胸からは鋭いトゲ状の角が生え、後頭部からは4つの房が伸びてくる。

それらの変化が終わり、光が一際大きく輝き、はじける様に消え去る。

そして、その光が消え去った後には、

『ルカ!!!』

一匹のはどうポケモンが姿を現していた。

毅然とした佇まいは、どこか武術を極めた武人を彷彿とさせるもの。そんな彼が見据える先にはヤナップ。

目の前で起きている突然の変化についていけず、目を白黒させ固まっってしまった。

トレーナーであるトウアラも似たような表情だが、そこは流石ベテランのジムリーダー。

すぐさま自身の不利を悟り、

「戻りなさい、ヤナップ」

ヤナップをボールへと戻す。
変わってバトル場に登場したのは、

「行きなさい、バオツキー」

『バオツキー！！』

炎タイプの猿の様なポケモンであるバオツキー。

動揺しつつも、何だかんだで相手の苦手な属性を選んでいる辺り流石である。

因みに、ルカリオとバオツキーであれば、素早さと体力以外の種族値はルカリオが優っている。

だが、ルカリオとバオツキーの両者とも耐久面では低めだ。
この勝負、

すぐに終わる！！

どちらが耐えられるかではない。

どちらがどれだけ速く相手に攻撃を叩きこめるかの差になってくる。
それならば、バオツキーの方が普通は有利である。

そう、普通は。

相手が苦手なタイプに変わっても全く動じず、寧ろ不敵な笑みを浮かべるシュバルツとルカリオの主従。

それを注意深く それこそ一つたりとも隙を見逃さないつもりで
眺めながら対応を考えていたトゥアラは、

「ッッ！？」

前触れもなくバオツキーへと向かってきたルカリオに驚いていた。シユバルツはまだ指示を出してすらいない。にも拘らず、勝手に動き出したルカリオ。よもや、進化したルカリオを扱い切れていないのかと思ったが、シユバルツの表情を見る限りそれはない。相変わらず、不敵な笑みを浮かべている。とりあえず、

「バオツキー、【かえんほうしゃ】」

『バオツ！！』

高威力の技で迎え撃つ。

先程のモノズが吐いた炎などとは比べ物にならないほどの高密度の火炎がルカリオに向かっていく。

さあ、どうします！？

避けるか、守るか、それとも技を使って打ち消すか、いずれにせよ指示を出さなければならぬはず。

その際に生じる隙を衝けば！！

そうトウアラは考えていた。

トレーナーとしては至極当然の考えで、何ら問題はない。寧ろ次のことを考えている分、彼がどれだけ優秀なのかもよく分かる。

だが、ルカリオは彼の予想を裏切った。

彼にとっては最悪で、シユバルツにとっては最良の、裏切り。

「ほっ!?!」

『バオツ!?!』

ルカリオに向かって突き進んでいた火炎が、何事もなかったかのように通り過ぎた。

ルカリオを呑みこんだ訳ではない。
ただ単に、

通り過ぎた。

だが、ルカリオの姿はどこにもない。

火炎が通り過ぎた場所にも、右にも左にも。

忽然と姿を消したルカリオの姿を、揃って探すジムリーダー主従。
だが、どこにも姿が見えない。

地面に目を向けても、穴が空いている形跡はない。

その間僅か2、3秒といったところだろうか。

それだけの時間が経過し、トウアラが気付いた時にはもう遅かった。

「なんですとっ!?!」

ルカリオが姿を現したのはバオツキーの背後。
しかも、距離は1mと離れていない。

いつの間に!?!?

と思うが、そんな驚きの暇はない。

すぐさまバオツキーに避けるよう指示を出そうとする。

だがそれよりも早く、何より、この時になってようやく、シュバルツが声を発した。

「やれ、ルカリオ!!」

『リオツ!!』

主人の命に答えるように声を発したルカリオが手から放ったのは、青白い光の球。

【はどうぞだん】

しかも、それを雨霰と連続でバオツキーに浴びせていく。

弾幕の数は凡そ20。

それを僅か5秒という短時間で全てを体へと浴びせられた、バオツキーは、

『バ、バオ……』

当然耐えられず、

ドサツ

地面に崩れ落ちる。

その瞬間、

?バオツキー戦闘不能!!

よって勝者は、挑戦者シュバルツ!!?

そんな審判の声がサンヨウジムに響き渡った。

「よしっ！！」

『ルカツ！！』

シュバルツ、二つ目のジムであるサンヨウジム制覇。

【おまけ】

場所はシンオウでも南部に位置する212番道路。

常日頃から雨が降り続け、その所為で地面がぬかるみ、沼の中を掻き分けて進んでいかなければならない道路。

そんな悪状態の道を一人の少女が雨にさらされながらも、泥を掻き分け突き進んでいた。

「あーもう、何なのよこれ！！」

『ガバツ！！』

普段は綺麗な金色の髪は泥に塗れてくすんでしまっている。

特にポニーテールの先端部分など酷い。

泥なのか髪なのか色が良く分からないほどだ。

とはいえ、本人はそこに怒っている訳ではない。

地面や雨などは自然のことだからしょうがない、と諦めている。

決して、少女としてお洒落に手を抜いている訳ではない。

単に、そこは気にしている暇が無いのだ。

怒っているのは、

「メリッサ!」

なんでこっちから行くって言ったのよ!？」

『バイ!』

自身のこの旅の同行人にだ。

「だって、こっちの方がヨスガに着くのは早いじゃないノ」

『ム』

当初、彼女たちは212番道路と213番道路、どちらを使って行くか相談し合っていた。

結果としてはメリッサの強い勧めに従い、212番道路に行くことになった。

なったのだが・・・

「確かに、そうかもしれないけど!!」

めんどくさいのよ!」

『ガバ』!』

「まあまあ、頑張つてヨ、シロナ」

あ、もうちょっとでその沼地は終わりだよ」

「そんなところで、気楽に話すな!!」

あんたも下の道から行きなさいよ!」

メリッサは自転車を使い沼地の泥濘を無視した楽な道を。

一方のシロナは泥に塗れる下の道を。

じゃんけんで自分が負けたからだとしロナは分かっているが・・・
どうしても上からの気楽な声が届いてくると、腹を立てずにはいら
れなかった。

「あゝもう!!」

下に降りてきたら覚えてなさいよ!!」

「覚えてるって何ヲ?」

そんな感じで、シロナの旅は進む。

メリッサというどこかお気楽な少女と共に。

まだまだ彼女の目指す夢への距離は険しく、そして長い。

「うゝ、下着までビショビショ・・・もういや!!」

8 匹目 バオッキー VS サンヨウジム (後書き)

リオルとルカリオの進化については私の勝手な意見ですのでスルーしていただいて構いません。

まあ、かわらずのいしを手放した時点で進化っていうのも、我ながら変な話だとは思いますが・・・

9 回目 ツタージャ 選択(前書き)

全体的に少しスランプ気味です。

ネタが思いついても、文章にするのが少々キツかったり・・・

なので、文章が少々おかしいことになっているかもしれませんが、すみません。

9 匹目 ツタージャ 選択

「ご苦労さまでした、バオツキー」

勝利の喜びに浸っているシュバルツとルカリオ（+アーティ）を正面に捉えながら、トウアラはバオツキーを手元に戻し、感慨に耽っていた。

シャガ殿の言っておられた通りだ……強い

このジムに彼がやって来ると知った時、トウアラは歓喜し、期待していた。

話だけならシャガから聞いていた。

曰く、年不相応な考え方をする子供だ、と。

普段は少々ぶつきらぼうだが、周囲の人間に対して礼節を弁えていると、彼の父親からは聞いていた。

同年代の子供同士のことまでは流石の彼も知らなかったようだが、そこはあまり重要ではない。

重要なのは、ポケモンバトルに対する考え方。

当初は周囲の人間や父親と同じように、正々堂々正面から戦い、勝利を？ぎ取ってきた。

そんなことは当たり前だし、バトルをする上で最も大事な事だとトウアラは思う。

だが、シュバルツはそこに一つ加えた。

そう、トレーナー同士も戦えばいいのだということ。

戦うと言っても殴り合うわけではない、言葉の応酬だ。

心理戦と言えるほど大それたものではないが、相手の心や思考に何らかの影響を齎そうとしているのだ。

シュバルツがいつそんなことをやり始めたのかは、父親であるシャガにも分からない。

ただ、気付いたころにはそんなことをやり始めていたそうだ。

当初はやたらと下から、甘えるように、卑屈になって、相手のトレーナーの油断を誘うように話しかけ、バトルを挑んでいた。

だが、そのやり方も長くは続かなかった。

いつの頃からか、バトルの時やバトルの前は相手のことを挑発するかのような言動を取るようになっていた。

それによって、相手が怒り、もしくは生意気な子供を叩きのめそうと本気になって掛かってくるのを少年は何よりも喜んだ。

その意図は、シャガも良く分かっている訳ではない。

だが、実際はそんな高尚な意図があったわけではない。

どちらかと言えば、先のバトルでのトウアラが興じた策に近いものがある。

単にシュバルツは全てのバトルを本気でやりたかっただけなのだ。

自身が普通に丁寧に接したり、油断させるように下からバトルを始めたとしても、相手のトレーナーは負けた時に何らかの言い訳をする場合が多かった。

曰く、

『今のは調子が悪かったただけだ』

『子供だから手加減してやったんだよ』

等々。

明らかに、全力で掛かってきている相手がそんなことを言ったこともあった。

それが、その態度が、少年とポケモンたちには許せなかった。当時のシユバルツは、シャガの指導のもとより強い相手と闘うことを求められていた。

だから、負けるのは当然。

重要なのは、負けてからどうするかという事だったから、

負けたら、負けでいいじゃないか。

そこから学び、努力していけばいいのに。

そう思い、そう話しても、相手は子供の戯言だと言って付き合わない。

まるで、自身のプライドが、自身のポケモンこそがこの世で一番なのだと頑なに信じて疑わないかのようだった。

それはそれで構わない。

だけど、認めるところでは認めないといけない、と少年は思っていた。

勿論、そんな相手ばかりではない。

10番道路近辺にいるトレーナーや、ジムトレーナーたちは数多の難関を突破してきただけのことはあり、バトルでは自分のことをちゃんと平等に見てくれるトレーナーが大半だった。

それでも、上記の様なトレーナーが少なからずいたのも事実。

これまで然したる苦労もなく数々のジムを、大会を突破してきたかのようなトレーナー。

そんな自身の力を信じて疑わない人間が、たかが10にも満たない子供に負ける。

認めたくない気持ちは当然、だが、負けたという事実はどうしても残る。

故に、誤魔化す。

先程までの自分の実力こそが嘘だったのだと。
本来はもっと上の実力があるのだと。

そんな相手と何人もやり合った結果、シュバルツが学んだのが今のやり方だ。

否定される余地がない程、始めから全力でぶつかれるようにすれば良い。

それに、相手が怒り、拙速になった時はその隙を突ける。
そして、相手が本気でできた時こそ少年の意図は成功したと言っても良い。

本気で戦えた相手だからこそ、言い訳をする余地がない程本当の実力差というものが分かるのだ。

自身が勝った場合は、負けた相手が悔しさをバネに再び強くなって挑んでくることを願う。

自身が負けた場合は、勝った相手を倒す、という努力する目標が出来たことを喜ぶ。

勿論、そう言ったことが全て終われば自身の非礼を詫びる。

それで仲が修復すれば、より良い修行仲間になれるのだから。

勿論、仲が拗れて二度と話しかけるな、と言われた相手がいないわけではない。

だが、それも彼にとっては新しい人間関係を作っていくための経験。

どうすれば、人は怒り、喜ぶのか。

全てを糧とし、我武者羅に前へと突き進んでいく少年とその仲間は、父親であるシャガの予想を越えた成長を遂げていた。

私もまだまだですな・・・ほっほっほ

トウアラは思う。

強さを追い求める少年の壁となりたかった。

そこで悩み、どうすれば超えることができるのか考え、一つでも多くのことを若者に学んで欲しかった。

だが、シュバルツはそんな古い壁を乗り越えもせず、正面からぶつかり、壊してしまった。

トウアラは慢心も怒りも全くせず、本当の本気でシュバルツとやり合っていた。

その結果負けてしまったのであれば、仕方ない。

それは、純粹に相手が自身を上回っていたということなのだから。

どこか眩しいものを見るような視線をシュバルツに向けながら、トウアラはこれからの未来が暖かい光で包まれているのを感じていた。

?
?
?
?

「ありがとうございます、トウアラさん」

バッジケースの中に新たに一つ、トライバッジを加えたシュバルツが自身の正面にいるトウアラにそう話しかけていた。

本当に、年上の人にはバトルの時とは全く違う口調になるのだから、アーティとしては驚愕モノだ。

こんな口調で自身とも話してくれれば良いのに、と思うが、それはそれで空恐ろしいと思ってしまうアーティである。

「ほっほっほ、なんのなんの。

私の方も良い経験になりましたよ」

そんな変化を気にすることもなく 知っていた可能性が大きいが

シュバルツに返事を返すトウアラ。

ジムリーダーとしての雰囲気など引っ込め、見た目は少々惚けた感じのする好々爺である。

「・・・それにしても、最後のルカリオの動きはなんだったのですかな・・・？」

シュバルツ殿の指示を聞かずに、勝手に動いていた様に私には見受けられましたが」

そんな彼でも気に掛かっていることはあったようだ。

純粹に、負けた側のトレーナーとして、勝者の戦法は聞けるものなら聞いておきたいからだ。

その辺り、年老いていようが、幼かろうがトレーナーであることには変わらない。

隣にいたアーティも、

「そうそう、何だったんだい最後の“あれ”。

僕の方から見ても何が起きてるのかさっぱりだったよ」

トウアラに便乗し、この旅の相方に自身の疑問を口にしていた。

ベテランのジムリーダーも、10歳程の子供トレーナーも疑問は同

じのようだ。

そんな疑問を向けられた、シュバルツはというと、

「うん……秘密、で」

「ほっ!？」

「って、なんでさ……?」

二人に向かってそう言い放った。

答えを期待して、耳を傾けかけていた二人は予想外の返答に呆気にとられ、やや呆然とした表情になる。

そんな呆然とした二人の表情に対して、逆に呆気にとられてしまったシュバルツは、

「いや、これからも戦う可能性がある相手に自分の手の内晒すバカはいないだろ……」

思わず突っ込んでしまったアーティに対して、そんな答えを返す。

「そりゃそうだけど、さ……」

普通に戦っても勝てる可能性があるか分からないのに、そんな部分まで秘密にされてはどうしようもない、とアーティは思ってしまう。……いや、元々バトルしようと思ったことはないけれど。

自分はトレーナーではあるけれど、どちらかと言えばアーティストなのだし……

そんなアーティとしては、指示を出していなかったことのカラクリについては無理でも、バオッキの【かえんほうしゃ】をやり過ぎた方法ぐらいは教えてもらいたかったのだが……

やや残念そうにしているアーティとは逆に、もう一人の当事者であるトウアラはというと、そんな少年二人のやり取りを見ながら、

「ほっほっほ、それでは次の機会に期待するのでしょうか」

そんな言葉を洩らし、非常に嬉しそうにしていた。

次の機会が自分にもあるのだと分かったから。

この旅が終わるまでは暫くは無理だろうが、それ以降であれば自分は再びこの少年と戦えるのだとシュバルツは言外に約束してくれたのだ。

シュバルツにそこまでの意図があったかどうか、トウアラには分からなかったが、なんとなく間違っていない気がした。

「ええ、いつになるかは分かりませんが、またいつか」

そして、シュバルツもそれを肯定した。

祖父と孫と言えるほど歳の離れた二人だったが、シュバルツがジムに挑戦に来た時とでは立場が逆になっている。

今度のバトルでは、トウアラが挑戦者なのだ。

しかも、今度は始めから互いの実力がどれほどかある程度分かっている状態。

今回以上に面白いバトルが楽しめるはず。

それが分かっているからこそ、シュバルツもトウアラもその未来が楽しみで仕方がなかった。

「それでは、僕たちはこれで」

「失礼しました」

「ええ、シヤガ殿よろしくお伝えください」

そんな未来を思いながら、シュバルツはトウアラに別れを告げ、ポケモンセンターへと向かって行く。

何だかんだで時刻は昼を回り、凡そ午後3時。

急げば夜までにはシツポウシティに着けるだろうが、途中で先日は寄れなかった場所でのポケモンの捕獲などがあるため、シュバルツとアーティはシツポウシティに向かうのは予定通り明日以降にすることにした。

今日の残りはアーティの案内の下、サンヨウシティを観光して回るつもりだ。

時間が空けば、多少先行して捕まえていないポケモンの捕獲をしても良いし。

そんな目の前のことを思いながら、シュバルツとアーティは歩みを進め、

「やあやあ、待ってたよシュバルツくん、と・・・誰だい？」

ポケモンセンターの入り口で待ち構えていたフランクなおっさんアララギ博士に話しかけられていた。

？
？
？
？

「・・・で、今度は何の用ですか・・・？」

ポケモンセンターの入り口で立ち話をするのも人の邪魔になるということで、一先ず3人はポケモンセンターロビーの椅子に腰かけていた。

シュバルツとアーティが並び、間に机を挟んだ形で正面にはアララギが座っている。

挨拶と、アーティとアララギの自己紹介もそこに、シュバルツが上記の言葉をアララギに向けて言った。

シュバルツ個人としては、こんなところまで来る余裕があるんなら研究を進めてるよ、と思うが、決して口には出さない。

それでも、また何か面倒事でも押しつけられるのではないかと思い、やや不機嫌気味である。

アララギの方もそんな空気を感じ取ったのか、

「うん、早速で悪いけど、シュバルツくん・・・いや、ちょうど良
いからアーティくんにも頼もうか・・・」

シュバルツちゃんとアーティくんに、それぞれ一匹ずつポケモンを
育てて欲しいんだ。

早々に自身の目的を説明し始めた。

今僕が研究している3匹のうちから一匹を選んで、この旅で育て
てみてくれないか？」

そう言って、彼が取り出したのは、3つのボールが入ったトランク
ケース。

机の上にそのトランクケースを置き、留め金を開き、中身をシュバ
ルツとアーティに見せるようにして彼らの方へとトランクケースを
押し出す。

それをやや身を乗り出すようにして確認するシュバルツとアーティ。

そんな少年二人の反応に満足そうな笑みを浮かべながら、アララギは説明を続ける。

「ボールの中に入ってるポケモンは、左からツタージャ、ポカブ、ミジュマル」

後に、イッシュにおける初心者トレーナーの最初のパートナーとして最も普及するポケモンたちだ。

そんな3匹と比較してみると、最初のパートナーがモノズであったシユバルツや、フカマルであったシロナはかなりマイナーであったりする。

まあ、マイナーというより、トレーナーがポケモンを上手く使いこなせないため熟練したトレーナーでなければ中々使えないというのが主な理由だったりするのだが・・・

逆に言えば、初心者頃から使えていたり、使えるようになっていたりすれば未来の実力がある程度保証されるのだ。

と、話を戻して、アララギの言った3匹の名前を聞いてアーティが思い浮かべたのは、言われた3匹のポケモンの姿。

蜥蜴の尻尾が葉っぱの様な形を取っており、2足歩行で歩く草ポケモン　ツタージャ。

子豚をデフォルメ化したかの様な愛らしい姿で、4足歩行で歩く炎ポケモン　ポカブ。

子供のラッコの腹に貝殻を取り付けたかの様な姿で、2足歩行で歩く水ポケモン　ミジュマル。

いずれも、可愛らしく、どんなふうに彩るのが可愛いかアーティは考えている。

一方のシユバルツが思い浮かべたのは、言われた3匹の最終進化形

態。

ジャローダ、エンブオー、ダイケンキ

どのポケモンのタイプや能力が今の自分の手持ちには足りず、また、どのタイプや能力が優先的に欲しいのか瞬時に計算して答えを正解、不正解は本人の判断によるところが大きい　導き出している。

かなりのバトル馬鹿であるのがよく分かる

そんな二人を見たアララギ博士は、

「まあ、じっくり考えて決めると良い。

選ばなかったポケモンは、パソコンに預けてくれたら僕の方で回収しておくから」

そう言つて、モンスターボールだけを机に置き、トランクを右手に提げてポケモンセンターから出ていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

残された二人はその場に座り悩む。唐突に突き付けられたプレゼント。選べる余地があるのだから質が悪い。しかも、二人で。被る可能性は大いにある。

そのまま悩み続けること凡そ30分。

周囲からは一体どうしたのか？という、やや奇異の視線を向けられ

ている。
そんな視線の中、

スッ

アーティが手を伸ばす。

それに続くようにしてシュバルツも。

アーティが伸ばした方向は、左。

ある意味予想通りの、ポケモン ツタージャ。

一方のシュバルツが伸ばした方向は……

・
・
・
・
・

ポケモンセンターに置いてある共有のパソコンを使い、二人が選ばなかったポケモンがアララギの許へと送られていく。

その作業を行っているシュバルツにアーティが、

「……良かったのかい……？」

そう声をかける。

「ああ」

そんなやや不安げな旅のパートナーの声にシュバルツが声を返す。

そんな彼の声は、喜びか、不安か、感情のうねりが混ざり合い、中々深みを増した声になっていた。

そんな情緒不安定気味のシュバルツは、手元の新しく自身のパートナーとなったポケモンが入っているボールに視線を向ける。

そこにいるポケモンは、自身に視線を向けるとやや気合の入った表情になって見せる。

それは、やや硬い表情だったが、確かに自身の新しい力となった。くれるのだと、シュバルツに感じさせるには十分すぎるものだった。

10 回目 ミジュマル 新入り(前書き)

今日から大学開始です。

せめて来週からにしてくれればいいのに・・・

日程変えやがって、学長め・・・

「さて、と・・・」

『・・・？』

時はシュバルツがサンヨウジムを制覇した日の翌日。

シュバルツたちは午前早いうちに街を出て、昼過ぎ頃にはシツポウシテイに到着していた。

ただ、先日行くことの出来なかったシツポウシテイに向かう途中にある地下水脈が創り上げた洞窟に寄って、ダンゴロヤコロモリ等、洞窟内に多く生息しているポケモンの捕獲もこなしていたため、彼らが思っていたよりも疲れてしまっている。

とはいえ、飽く迄も『思っていたよりも』であり、今にも倒れてしまいそうなほど疲労困憊と言うわけではない。

当初の予定では、アーテイお薦めの倉庫を改造したカフェで休憩と昼食を摂り、その後ヤグルマの森を抜けヒウンシテイに向かうつもりであったのだが、途中でまたポケモンの捕獲に乗り出すことはほぼ確定していることに気付いたため、ヒウンシテイに向かうのは翌日以降ということになった。

陸路でヒウンシテイに直接向かうことが可能であれば、多少時間が遅くなっても問題ないのだが、この時はまだ、後にイッシュ最大最長の橋となる『スカイアローブリッジ』が建設真っ最中であったため不可能なのだ。

もしもシツポウシテイからヒウンシテイに陸路で向かうつもりならば、一旦北に向かい、ブラックシティやホワイトフォレストを経由し、改装工事前の『ワンダーブリッジ』を渡り、ライモンシテイを南下して『リゾートデザート』を抜けて向かうしかない。

流石にそれは時間がかかり過ぎる上に非常に面倒なルートなので、シュバルツとアーティ、二人揃って速攻で却下した案だ。そうなると、ヤグルマの森を抜けた場所から出ているシツポウヒウン間の定期船で向かうしかない。

シュバルツがシツポウシテイのポケモンセンターで調べたところ、その定期船は流石に夜間運航はしておらず、最も早ければ朝7前に出ており、夜は遅くても午後6時ごろまでであった。

更に言えば、夜間の森は（いくらポケモンと一緒にとはいえ）子供二人がうろつくにはそれなりに危険が付き纏う。

その為、今夜はシツポウシテイで一泊することにして、翌日、ヤグルマの森を抜けヒウンシテイへと向かうことになった。

「アーティと合流するまでの時間を使ってヤグルマの森で捕獲作業に勤しんでも良いんだが・・・どうすっかなあ・・・」

カタカタ

「うん？」

ああ、お前たちはそう思っただけか」

そういった旅の予定をアーティの言っていたお薦めのカフェ カフェ ソーコ』という割と安直な名前 で話し合っただけ、宿も既に抑えてしまっていたシュバルツは午後の時間をどう過ごすかについて悩んでいた。

とりあえず先行し、まだ捕獲していないヤグルマの森のポケモンを捕まえておこうとも考えたが、その言葉にモノズとルカリオが反応した。

ボールを揺らし、自身の望みをトレーナーであるシュバルツに示す。何だかんだで付き合いの長い二匹なので、考えていることはそれなりにシュバルツにも分かる。

「・・・じゃあ、そうすると・・・とりあえず、どこかの広場にでも行くか」

大まかな午後の予定を決めたシュバルツはカフェを出て、右方向へと足を向けた。

向けた先にあるのは、シツポウシティからヤグルマの森へと向かう道。

多少距離があるが、大量の樹木が生茂っている森を見ることができ

る。

そんな光景を視界に収めながらシュバルツは足を進める。彼が向かっている先は、先日彼がウォーグルに乗り、到着した場所。彼自身の記憶が確かならそれなりに広がったはずだ。

それこそ、多少自身のポケモンたちが暴れても問題ないぐらい。

「ほら、急げ急げ!!」

もう昼休憩も終わるぞ!!」

『ドツコ!!!』

ふと、足を進めるシュバルツの後ろからそんな声が聞こえてきた。

声が聞こえてきた後方にシュバルツが目を向けると、そこには大量の筋骨隆々とした男たち。

森の自然が作り出す心地良い景観とは全く似合わない面々だ。

昼の日差しの下で彼らの肌に浮かんでいる汗がキラリと輝いている。手には軍手、頭にはヘルメット、腰に着けている鞆には作業道具。

どこからどう見ても、工事現場で働いているおっさんたちだ。

彼らと一緒にいるのは、ドッコラーやワンリキーといった工事現場では欠かすことのできない力自慢のポケモンたち。

ああ、例の橋の建設工事の人たちか

そう思ったシュバルツは道路脇に寄り、彼らに道を譲る。そんな彼の横を急ぎ足で駆け抜けていく男たち。

彼らの顔は焦ってはいるもの、確かに楽しそうで、そして何より嬉しそうだつた。

「……………」

駆け抜けていった男たちを正面に捉えながらシュバルツも歩を進める。

男たちは彼の視界から徐々に遠ざかっていき、数秒ほどで森の暗がりにも隠れて見えなくなつた。

その頃にはシュバルツも森の外周部に沿って歩き出し、目的の広場に到着していた。

グルリと周囲を見渡し、特に人影も見えないことを確認したシュバルツは、

「ほら、出てこい」

自身の腰に付いていたボールを放り、モノズとルカリオをボールから解放してやる。

『ノズ』

『リオリオ!!』

ボールから飛び出た二匹は、体を伸ばし、凝り固まつた筋肉をほぐしていく。

そしてそんな柔軟もそこに、自身のトレーナーであるシュバル

ツに当初の要望を催促するかのように迫る。
そんな二匹に集られながら、

「ああ分かった、分かったから、ちょっと落ち着けお前ら!!」

シュバルツは腰に着けてあった“もう一つ”のボールへと手を伸ばす。

そこに入っているのは、昨日アララギ博士から貰った新しいポケモンであり、彼らのパーティーに新しく加わることになったポケモンだ。

シュバルツは一応昨日中にボールから出して顔合わせをしていたが、彼の以前のパートナーであるモノズとルカリオは、直接の対面をしていなかった。

ボール越しに互いの姿は一応確認していたが、まだ声を交わした事はなかった。

その為、彼らのポケモンたちは早いうちに顔合わせがしたかったのだ。

別段、新しく入ったメンバーを虐めたり、どうこうする、といった訳ではない・・・きつと。
純粹に、歓迎したいのだ。

「ほら、出てこい。

歓迎会だ」

そんな風に目を輝かせる二匹の様子を視界に捉えたシュバルツは腰の後ろ部分に手を回し、その一匹をボールから解放してやる。

ボールが開き、中から出てきたのは・・・

『ミ〜ジュー!〜!』

一匹のラッコポケモンだった。

『モノ!!』

『ルカ!!』

現れた水色の新入りポケモンに寄っていく先輩たち。
若干ビクつきながらもそんな先輩たちを受け止める後輩。

『モノ、ノズ、ノノ!?!』

『ルカ、リリ、カリ。』

『リオリオ?』

『ミジュミジュ……』

『マール』

何らかの会話をしていると思われるのだが、シュバルツにはポケモンの言葉など分かる訳がないのでそんな3匹の姿をやや気の抜けた表情で眺めていた。

ここで一応シュバルツがミジュマルを選んだ理由を述べておくと、簡単に言えばタイプの問題だ。

シュバルツ個人としては、防御か特防、もしくは素早さの高いポケモンが欲しかったのだが、残念ながらら3匹の最終形態にはそれらはいなかった。

一応ジャローダが当て嵌まるかとも思ったのだが、少々能力が中途半端なのだ。

しかも、残念なことにツタージャはアーティに選ばれてしまった。別に喧嘩しても欲しいままでではなかったので、次点　と言ったら

ミジュマルに失礼だが　　のミジュマルにしたのだ。

一瞬ポカブ　　最終形態のエンブオー　　も考えたのだが、既に格闘タイプはルカリオがいるし、攻撃特化はすでにモノズ　　最終形態はサザンドラ　　がいる。

更に、かくとうタイプとして比べると、素早さなどの面から考えれば安定した性能であるルカリオで十分だ。

後は、これから色々な地域を旅していくことを考えると、様々な移動用の技を覚えてくれるダイケンキはそれなりに重宝する一匹でもあるのだ。

個人個人の意見は当然あるとは思うが、シュバルツが選んだ理由はそんなところだ。

なので、リオル　　現在ルカリオ　　やモノズで行っている【かわらずの石】を使った育成法は特にするつもりはなく、純粹にレベルを上げサツサと進化させるつもりだ。

『ミジュマー!!』

『モノ!!』

『リオ!!』

そんな理由を何気なく思い出しながらシュバルツは三匹の様子を眺めていた。

一方の眺められる方の3匹はというと、知らぬ間に意気投合しており、やたらと意気込んでいた。

傍から見ればルカリオが世話係なのだが、実際は何だかんだでモノズが中心となって纏めている。

そこは流石最古参のドラゴンポケモンだ。

因みにレベルで換算すると、ミジュマルは貰ったばかりでまだバトルはしていないので当然Lv.5。

数年前から一緒にいるルカリオはLv. 45程度。

最後に最も古い面子であるモノズはLv. 60程度。

あと少して最終形態に進化できるレベルではあるが、シユバルツは今のところ進化させるつもりはない。

育成方法は個人個人の問題であり、レベルの概念もあまり意味はないので一種の目安程度に考える方が良くシユバルツは思っている。普通にLv. 100のミネズミであれば、ゲームではコバルオンやポルトロスに勝てはするが、実際問題、伝説のポケモンがそんなじよそこのポケモンに負けるとも思えない。

「どんなふうに育てた方が良いんだか・・・」

そんなことは措いておいて、シユバルツが考えるのはミジユマルの育て方。

今日の前で元気に走り回っているラッコだが、ある程度は強くしなしいといけないだろうと思う。

一先ずダイケンキに早く進化させることや、移動用の技を全て覚えさせるのは確定としても、何をメインに置くのかに迷う。

ダイケンキ自体の種族値は特攻がやや高めだが、攻撃もそんなに低いわけではない。

だが、素早さなどの他の種族値は高い方ではない。

そうなると二刀流にするか、特攻か攻撃どちらかを上げ、後は耐久に回すべきか・・・

そんなことを考えているシユバルツだが、この育て方はあまり一般的ではない。

イツシュの世間一般で言うポケモンの育て方とは、どんな相手とでもバトルをして経験値を得て強くなるということだ。

まあ、種族値だとか個体値、それに性格などについては何となく判明してはいるものの、ゲームの様な努力値など誰が知っているというのだ。

それに、努力値の上限など計算しようがないだろう。精々分かっててもこのポケモンを倒せば、ある程度力が上がる、といった程度。

それは人間と同じで、こういったトレーニングをすれば、どこの筋肉が強化されるといった仕組みだとシユバルツは思っている。

そんなシユバルツにした所で、そう言ったポケモンを何匹か知っているほど。

それでも十分過ぎるほどの知識ではあるだろうが……

よし、一先ず二刀流形式でいくか

一先ず今後の育成法を決めたシユバルツは……

「おーい、俺も混ぜろよ!!」

そんな声を3匹に放り、自身もポケモンたちの輪に加わることにした。

『モノ!!』

『ルカ!!』

『ミジユ!!』

唐突に割って入って来た自身のトレーナーを拒絶する様な事はなく、三匹は喜んで自分たちの輪に加えた。

ポケモンと遊んでいるシユバルツを見れば、普段の無愛想な表情はどこへやら、年相応の無邪気な少年の笑顔が浮かんでいた。

11 匹目 フシデ ヤゲルマの森（前書き）

主人公たちよりも、シロナが出てくる【おまけ】の方が気が乗る不思議。

あー、早く合流しないかなー……

まあ、予定ではまだまだ先の話ではあるんですが……

11匹目 フシデ ヤグルマの森

「ツタージャ、【たたきつける】!！」

『タージャ!！』

シュバルツが見ている前でアーティがツタージャに指示を出し、野生のポケモンに攻撃を放つ。

今二人がいるのは【ヤグルマの森】。

シュバルツにせよアーティにせよ、現在は森に生息しているポケモンの捕獲作業の真っ最中だ。

シュバルツは普段通り、凶鑑を埋めるため。

一方のアーティはシュバルツとは全く逆で、完全に自身の欲求に従った結果だ。

『フシー!！』

ツタージャの攻撃を受けた野生のフシデがふらつきながらも自身の尾を振り、反撃してくる。

それを飛び上がることで回避し、

「そのまま【たいあたり】だ!！」

『ジャ!！』

重力による加速を加えた【たいあたり】をフシデに喰らわせる。

【たたきつける】で既にかなりの体力を奪われていたフシデは、耐

えられずに地面に倒れ込んでしまう。

そこにすかさずボールを投げるアーティ。

ツタージャはジツとボールを見据えながらも、アーティを護るかのよう立っている。

先日組んだばかりとは思えないほど、息の合っている一人と一匹だ。

? ? ? ? ?

時間を少し巻き戻そう。

凡そ2、3時間程前のことである。

シュバルツとアーティは【ヤグルマの森】に人工的に敷かれた道路から少し離れた場所にある森の中でも拓けた場所にいた。

【ヤグルマの森】は虫や草ポケモンの宝庫 聖地と言っても良いかもしれない であり、至る所に彼らの姿が見受けられた。

シュバルツは、そんないつも見ているよりも大量の野生のポケモンの数にやや驚いていたが、さして普段と変わった様子は見られなかった。

そんな彼とは打って違って変って普段の様子から激変したのがアーティだ。彼が得意とし、好んで使っているタイプは虫。

草タイプも手持ちに加えることはあるが、飽く迄彼のメインは虫ポケモンである。

因みに、シュバルツの姉であるアーシエだが、虫ポケモンが大の苦手である。

どれぐらい苦手かという。たまに父のジム戦を見ている時に、相手が虫ポケモンを繰り出そうものなら泣き叫んでその場から逃走するほどだ。

このままシュバルツがアーティと一緒にソウリュウシティに帰り、アーシエに会うことになればそれなりの惨劇が予想できるが・・・まあいい、大きな問題ではないだろう。

アーティ、もしくはシュバルツがアーシエに殴られる程度のことです事態は終息するだろうし・・・

そんなことはともかく、アーティの森に入った瞬間のテンションの上がり様が普通ではなかった。

まず第一に、

「よっしやー!!」

普段では考えられないような雄叫びを上げる。

第二に、隣でそんな彼の姿を啞然として見つめるシュバルツを放つて、

「うわっはああー!!」

奇声を上げながら見つけた野生の虫ポケモンに突進していく。

因みに、この時見つけたのもフシデであった。

「フ、シ、デー!!」

最後にはそのままフシデに抱きつこうとする始末。

当然フシデは警戒しており、アーティが近寄って来た時点で臨戦態勢に入り、あわや大惨事かと思われたが・・・

「落ち着け馬鹿野郎!!」

我に返ったシュバルツがアーティの襟を後ろから掴んで引き留めていた。

「グエツ!!」

勢いよくフシデに向かっていたアーティは、その勢いを急激に首元で止められたため当然、首を絞められることとなる。

一瞬呼吸困難に陥りかけるも、別にシュバルツも意図して首を絞めている訳ではないのですぐにアーティも復活する。

「げっ!!」

げほ、げほ!!

い、いきなり何するんだよ、シュバルツ!？」

首を抑えつつも、強い調子でシュバルツを詰問するアーティ。

熱の籠ったその口調は、自身の行為の正当性をまるで疑っていないかのようなのだ。

そんな目の前にいる芸術家の卵を冷やかな視線で見つめていたシュバルツは一言、

「この馬鹿!!」

ゴンツ!!

+ 鉄拳を自身の正面にいるアーティに浴びせていた。

「っ……」

「野生のポケモンにそのまま向かって行く奴がどこにいる!!」

捕まえたいなら普通に捕獲すれば良いだろうが!!」

普通に考えれば野生のポケモンと人間であれば、十中八九野生のポ

ケモンの方が強い。

コイキングのようなポケモンもいるにはいるが、何の準備も無しに野生のポケモンとやり合うなど愚の骨頂。

それに、今回の相手であるフシデはそれなりに凶暴な上、毒を持っていることでも有名だ。

まず無事では済まないだろう。

「ってああ!!」

シュバルツ、君がそんなこと言ってるうちに!!」

先程までフシデがいた場所にアーティが目を向けると、フシデはおらず、ただ鬱蒼とした森が広がっていた。

そりゃあ、臨戦態勢をとっていた野生のポケモンがバトルをしないのに、その場に残っているはずもない。

とっくにシュバルツ達から逃げ、森の仲間たちの所に戻っていることだろう。

「別に良いだろ、フシデならそこにもいるんだし・・・」

そう言っつてシュバルツが指を向けた先にはまたもフシデ。

それを見たアーティは、

「iiiiiiiiiiiiiiii やっふうううううー!!」

先程とは異なった奇声を上げ、再びフシデに跳びかかっているように聞こえる。

「だ、か、ら、落ち着けっつて言ってるだろうが!!」

そんな旅の相方を再び襟を掴むことで押し留めるシュバルツ。

「グゲエツ!!」

再び首を締めあげられるアーティ。

今度は先程よりも勢いが強かったのか、かなり首に食い込んでしまったようで、苦しみ方が冗談じゃないレベルになっていたようだったが、それをシュバルツは華麗？にスルーし、自身の捕獲作業に向かって行った。

? ? ? ? ?

そんなこんなで冒頭のシーンに戻るわけである。

シュバルツはあらかたのポケモンを捕獲し終え、残りは見つけ次第ということにしているのでアーティに付き合っているのだ。

「にしても・・・あいつがここまで壊れるか・・・」

『ノゝ・・・』

『ミジユマ・・・』

シュバルツも、彼のポケモンたちも普段の捕獲作業以上に疲れていた。

普段の様に行動していたのであれば既に森を抜け、船に乗ってヒウンシティに到着しているであろう。

だがそれもアーティが暴走していたせいで不可能だ。

というか、シュバルツにしてみれば何匹も同じポケモンを捕まえようとしなくていいと思うのだが・・・

まあ、そこは個人の好みの違いということなのだろうが。

そんなことよりも、シュバルツは可能なら、もう森を抜けてヒウンシティに宿を取ってそこで眠ってしまいたいのだ。

【ヤグルマの森】に生息しているであろうポケモンの殆どを捕獲し終えてから1時間。

これ以上新しいポケモンが見つかることもまずないだろう、と当たりを付けている。

なので、

「おい、アーティー!!」

そろそろ先に進むぞ!!」

そう声をかけたところ、

「うん、そうだね。

もっと奥に行ってみようか」

「・・・は・・・!?!?」

別の意味で言葉を捉えたアーティからそう返事が返って来た。

シュバルツとしては森を抜け、ヒウンシティに向かう意味で言ったのだが、アーティはどうやら、森をもっと奥に向かうという意味で捉えたようだった。

完全に真逆の意味だし、それは森を抜きたいシュバルツとしては今現在何よりも勘弁して欲しい事だった。

「お、おい、アーティ・・・」

「じゃあ行こうか」

『ツター!!』』

シュバルツの声に踏みとどまることなく、アーティとツタージャは更に森の奥へと走って進んでいく。

「……………はあ……………」

『モノモノ』

『ミジユ』

いつも以上に深い溜息を吐き、落ち込むシュバルツ。

もういつそのことアーティのことを放つて、先に船着き場に向かつておこうかと思ったが、それじゃあいつになるか分からない。

その事に気づき尚のこと落ち込む。

そんなトレーナーの肩をポンポンと叩き、慰めるモノズとミジユマル。

場所はそれなりに不気味な場所だが、空気は和やかなものだった。そんな和やかな空気が、

「うわーっ!!」

『ツター!!』』

先行していた一人と一匹の悲鳴で掻き消された。

「アーティ!?!」

悲鳴に驚きながらも、急いでアーティの後を追うシュバルツ一行。アーティが先行してからそんなに時間が立っている訳ではないので、すぐに追い着くことは出来た。

大量の倒木を乗り越え、背の高い草を掻き分け進んだ先にアーティとツタージャはいた。

どちらも地面に倒れていた。

駆け寄ったシュバルツがアーティとツタージャの体を確認するが、特別目立った外傷はない。

そのことに一先ず安堵を覚えつつ、シュバルツは周囲の様子を見渡す。

彼らが倒れているそこは森の中でも一風変わった拓けた場所。

同じ森の中だというのに、明らかに先程までとは空気が違う。

白い花が咲き、木が人を立ち入らせないかのように周囲を覆っている。

神前、とでも言えばいいのだろうか。

どこか儼かな気が周囲に満ちている様な気がシュバルツにはした。更に、

『モ〜〜〜〜』

『ジュ〜〜マ〜〜』

グイグイと、自身のポケモンたちが彼の服の袖を引っ張り、すぐにこの場から立ち去るよう促してくる。

まるで何かに脅えているかのように・・・いや、立ち入ってはいけない場所に自分たちがいることを自分に教えてくれているかのようだ。

シュバルツ自身も現状がよく分かっていない。

それでも、まるで森が自分たちを追い出そうとでもしているかのような奇妙な錯覚を覚えた。

あまり長居はしたくない。

そう思ったシュバルツの行動は速かった。

モノズとミジユマルをボールに戻し、新たにボールからルカリオを出し、アーティを運んでもらう。

ツタージャは自分が抱えあげ、いそいそとその場所から立ち去ろうとしたその時、

『……導きの間……試練を受けよ……人間……』

声が聞こえた。

耳にはない。

頭の中に直接響いてくるかのようなそんな声。

「っー!？」

ツタージャを抱き抱えながら後ろを振り向くが、何もいない。

あるのは森の暗がりの中で静かに揺れる花と、木々たちだけ。

そのまま暫く眺め続けていたが、何も見えない。

気のせいだったかと思ひ、踵を返しその拓けた場所 【思索の原】

から去るうとするシュバルツに再び声がかけられる。

『……待っているぞ……』

今度は気のせいではなく、はっきりと聞こえた。

どこか自分に期待しているかのような、それでいて試している様なそんな声。

今度は振り返らず、歩いて森の出口へとシュバルツは向かって行っ

た。

そんな彼を草木が見送る。

未だに拒絶されている気がしたが、声が聞こえて来た前よりも幾分その拒絶感が薄まったような気がした。

・・・導きの間、か・・・

全く聞き覚えのない名前だったが、しっかりとその言葉を忘れないように胸に刻み込み　手持ちのノートに書き込んでおく　シュバルツは森を抜け、船着き場からヒウンシティ行きの連絡船に乗りこむ。

先程の森とは違い、船の正面からはヒウンのビル群が見えている。

イツシュ最大の都市ヒウンシティ

先程の声を思い出しながらも、シュバルツは次の街に期待を膨らませるのだった。

【おまけ】

「すごい、すごい!!」

ねえ、メリツサ、見てよ!!」

一人の少女が目を輝かせながら歩いている。

そんな彼女の目の前には巨大な石炭が置かれている。

ポケモンの化石でもなければ、何か歴史的に価値のあるものでもない。

ただむやみやたらとでかい石炭である。

勿論、見る人が見ればどれだけ凄いものなのか分かるのかもしれないが、正直言っただけ目を輝かせている少女の旅の同行者である紫の髪をした少女　メリッサにとっては非常にどうでも良かった。

「あー、そうネー。

すごいネー」

返事も自然と気の抜けたものになる。

現在彼女たちがいるのはクロガネシティ。

その炭鉱博物館である。

トレーナーでもあり、学者志望でもある少女　シロナはこの類の博物館は巨大な宝箱の様なものだった。

一つたりとも情報を逃すまいと熱心に展示品の横に掛けられている説明文を読みこんでいる。

「むー……クロガネ炭鉱って思ってたよりも凄いのかも……」

そんな感想をシロナが呟いている横で、

早く終わってこないかなー

メリッサは退屈そうにシロナの後姿を眺めていた。

ひよっとしたらヨスガで自分が暴走した時の事を根に持っているのではないかと邪推してみるが、目の前の少女の表情を見る限りそれはないだろう。

これがなければシロナもモテると思うの二……勿体無いノ……

金糸の様に光り輝く綺麗な髪。

幼いながらも大人びたモデルの様な顔立ち。

スタイル諸々は年齢上まだまだ未開発のため、今後に期待といったところ。

性格もどんな相手にも隔たりなく付き合う分け隔てのないモノ。

冗談にも付き合ってくれるし、話していて楽しい。

そんなある意味完璧超人である彼女の欠点がこの知的好奇心だった。どんなものにも興味を示し、自身が納得するまで貪欲に学んでいく。

学問を志す者としては正しいのだろうが、思春期に入るかどうかという年頃の少女としては結構お堅いのではないかとメリッサは思う。

シロナの事だから別に良いけど・・・

自分が恋愛をする訳でもないし、シロナもそんなことに興味がある様には見えないから問題ないのかもしれないが・・・何か物足りない。

そんな彼女の悩みも数年後には解決するのだが、この時はまだ知らない。

「ねえねえ、メリッサ。

もっと色々聞いて来て良い!？」

博物館を一通り見て回りはしたものの、物足りなかったのかそんなことをメリッサに尋ねるシロナ。

許可が出ればすぐさま館員の許に行き、自身の様々な疑問をぶつけることだろう。

「良いヨー、私は先にポケモンセンターに戻ってるから」

館内を見て回るだけなら付き合っが、流石にそれ以上は勘弁して欲しい。

そんな意図のもとで出されたメリッサの答えに、

「うん、分かった!!」

夕飯までには戻るね!!」

満面の笑みで答え、すぐさま近くにいた館員の人の許へと向かって行くシロナ。

そんな彼女を笑顔で送り出したメリッサは溜息をつきながら、博物館を後にするのだった。

11 匹目 フシデ ヤゲルマの森（後書き）

アーティ・・・何故あんなことになった・・・？
シロナもそうだが、何故か知らないうちにキャラが暴走している始
末。

まあ、そんなに問題ないから良いか。

12 匹目 メグロコ 散策(前書き)

PlayStation? Networkにサインインしようとする
ると、エラーが出る始末。

原因を調べてみると、外部要因、つまりはハッカーらしいとのこと。
なんてところに仕掛けてくれやがりますか!!

12 匹目 メグロコ 散策

街の南にある船着き場に無事到着した連絡船を下りたシュバルツは、

「はー……でかい」

『ノ……』

改めて眼前に広がるビル群の圧倒的な光景に息を呑んでいた。

船の上からでもヒウンの街並み（ビル並み？）は見えていたのだが、改めて近くから見るとやはり感じるものはかなり違う。

彼の故郷であるソウリユウシティもそれなりに都会ではあるが、こんなにも大量の高層ビルを見たことは無かった。

そんな風に驚き、呆けているシュバルツを余所に、

「あー、ようやく着いたの〜？」

『ツタ〜』

いつの間にか復活していたアーティがツタージャと共に船から這い出してきた。

船から出てきたアーティはビル群に感動を覚えることもなく、いつもの調子で……いや、どことなく普段よりも陽気な調子で歩き出す。

「……って、シュバルツ〜？」

先行くよ」

船から降り、歩き出したアーティだったが数歩進んだ所で違和感を

感じ立ち止まる。

ここ数日行動を共にしている人間が付いて来ていないのだ。後ろを振り返ってみると、未だにシュバルツはビル群をぼんやりと眺めていた。

いくらなんでも驚き過ぎだと思うのだが・・・
そんな呆けている旅の相棒に声をかけるアーティ。

「・・・あ、ああ。

すまん、すぐ行く」

その声でシュバルツは我に返り、アーティに返事を返しすぐさま彼の後を追う。

自分に追いついたシュバルツを確認したアーティは歩き出そうとして・・・すぐに立ち止る。
そして、

「そうそう、シュバルツ。

ポケモンはボールに閉まっという方が良いよ」

そんな忠告をシュバルツにかける。

「・・・なんでだ・・・？」

その言葉に若干否定的な意味合いを込めた疑問で返すシュバルツ。出来ることならば、常に手持ちのうちのだれか一匹はボールの外に出しておきたいシュバルツとしては今のアーティの言葉は些か賛成しかねるものだったのだ。

だが、そんなシュバルツの不機嫌な声音も気にする様子無く、アーティは言葉を続ける。

「ヒウンは人の往来が激しいからね。

ルカリオぐらいのサイズなら問題ないとは思うけど、モノズとかミジユマルみたいに小さめのサイズのポケモンじゃ逸れる可能性が高いんだよ」

「・・・成程」

自分はヒウンシティに来たことがないから分からないが、どうやらアーティはそれなりにヒウンのことについて詳しいようだ。

ヒウンについてほとんど何も知らない自分より、よっぽど参考になるだろう。

そう思い、納得し、首を縦に振るシュバルツを見ながらアーティは言葉を続ける。

「それに、今はちょうど橋の建設とか、色々あつて特に人の移動が激しいんだ。

ポケモンがそこらを歩いてると凄く邪魔に思われると思う」

ポケモンが悪いんじゃないけどね。

そう忠告を締めくくつてアーティはツタージャをボールへと収める。それを見て、一先ず自分もモノズをボールに収めるシュバルツ。

そのシュバルツの様子を確認したアーティは、今度こそ船着き場の出口へ向かつて歩き出した。

その迷いのない姿を不思議に思ったシュバルツは、

「なあ、なんでそんなに詳しいんだ・・・？」

気付けば、そう、アーティに聞いていた。

「うん？」

何が・・・？」

ただ、主語だとか目的語だとか諸々が抜けていたためアーティには上手く伝わっていなかった。

そのことに気付いたシュバルツは、

「ああ、分かりにくかったか・・・」

いや、どうしてお前はそんなにヒウンシティ（この街）について詳しいのか、と思つてな・・・」

今度はアーティにもちゃんと分かるよう言い直していた。
そんなシュバルツの疑問に、

「あれ、言つてなかつたつけ・・・？」

逆に不思議そうな表情になり返事を返すアーティ。

シュバルツからしてみれば、疑問に疑問で返されるといふ何ら状況の改善が起きていない。

それでも、ヒウンシティに関する自身の記憶を脳内から引つ張り出し、その知識とアーティがどう関わっているのか割と真面目に考え
てみるが、

「・・・いや、お前からこの街のことで何かを聞いた記憶は今のところ思い出せないんだが・・・」

全く脳内検索に該当するものがなかった。

それもその筈。

実際、アーティはシュバルツにその事については何も話していなかったのだから。

寧ろ、知っている方がおかしい。

アーティが有名な芸術家になっていれば別だろうが、今の彼はまだまだ名前の売れていない芸術家の卵。

ひよっとしたら、芸術家たちの間ではある程度名前が知られているのかもしれないが、そんなことシユバルツが知る訳もない。

「そっか、言っただけならしょうがないか・・・」

右手で後頭部を掻きながら、何故か、少しばかり影を背負った暗い雰囲気になるアーティ。

僕の出身は此处、ヒウンシティなんだよ」

「・・・あー、そんな理由か・・・」

少しばかり深刻な事情でもあるのかと思い、身構えていたシユバルツとしては、拍子抜けも良い所だ。

「うん。」

僕としては、折角だからシツポウシティ出身の方が良かったんだけど・・・」

芸術家を目指す人間としては、云々・・・と語るアーティだが、その足取りは鈍ることなく二人の共通の目的地であるポケモンセンターへと向かっていた。

「まあ、生まれる場所は選べないから仕方ないだろ・・・」

それより、ここがお前の育った街なら両親がいて、家があるんじゃないのか・・・?」

それなら何もポケモンセンターに向かわなくてもいいと思うのだが・
・
そんなシュバルツの言葉に、

「うーん、両親には『芸術家として成功するまで戻ってこない!!』
って言うて出てきてるんだよ。

だから・・・今はいいや」

そう答えを返すアーティ。

強がりが・・・

そんな彼の言葉に、少々思うところがあるシュバルツだが、彼の気持ちは分からない訳でもなかったため、沈黙を貫くことにした。

アーティだって、内心両親には会いたいだろうに・・・

どんな家族なのかは分からないけれど、アーティの言葉には全くと言っていい程棘がない。

かといって、家族に興味がないかということ、そう言う訳ではないのだろう。

今のアーティの顔には、郷愁の念がハッキリと見てとれたのだから、そんなことを思い、考え、黙り込んでしまったシュバルツに、

「ほら、ポケモンセンターが見えてきたよ」

アーティの声がかかる。

その声には、先程まで僅かに残っていた影が完全に消え去っていた。それを感じ取ったシュバルツはそれ以上暗くなったりせず、

「ああ、さつさと用事済ませちまうか」

普段通りのテンションで返事を返した。

? ? ? ? ?

ヒウンシティ 漢字で書くと、飛んでいる雲、すなわち飛雲ひつんとなる。

だが、最近ではそれらのめでたい雲の群れを貫かんとばかりに摩天楼が多数建設され、イッシュでも一、二を争う大都会となっている。また、海に面しているが特に物資の運搬などは行われておらず、専ら遊覧船などの観光、もしくはデート用の娯楽のメインの一つである。

212

人ごみで溢れ返っているメインストリートを歩きつつ、シユバルツはアーティから街について上記の様な説明を受けていた。既に、ポケモンセンターに宿を取り、二人とも手持ちのポケモンは普段から連れて歩くことにしているメンツだけである。

「この街は中央に【セントラルエリア】っていう広場を置いて、そこから主に5つの通りに分かれてるんだ。

今僕たちが歩いている【メインストリート】。

ここは企業の本社とかが多いかな・・・?

まあ、僕たちには殆ど関係ない通りだよ」

ポケモンのマッサージとかもしてくれてるけど、高いから止めとい

の方が良い。

とは地元の間人では割とよく言われていることである。

そんなアーティからの情報に頷きを返しながらも、特に自分たちには用事がない通りだとシュバルツは考えていた。

場所を変えて、一本隣の【モードストリート】

「次にここ【モードストリート】。

ヒウンシティ名物のヒウンアイスが売ってるけど……見ての通り」

「行列、だな」

何が人を惹きつけるのか、とある店には長蛇の列が。

アーティの言葉通りなら名物を売っているらしい。

なので、空いていたら買ってみようかともシュバルツは思っていた。……期待するだけ無駄だと、多々感じはしたが……

また場所を変えて、隣の【スリムストリート】

スリムと名前に付いている通り、確かに細かった。

「次、【スリムストリート】。

カフェ兼Barの【憩いの調べ】があるけど……子供はあまり通るなって、親に言われてる」

「まあ、どう見ても路地裏だしな」

今迄の二つの通りと比べてみても、明らかに薄暗いし、狭い。

果ては、なんだか怪しい取引をしている様な人物の姿が見受けられる。

更にもう一本隣の通りへ。

「ここは特に名前が付いてないけど、大体【ジムのある通り】なんて皆言ってる」

「前の二本の通りと比べると、明らかに人の数が少ないな」

実際、シュバルツの言う通り、最初の二本と似た大きさの通りに、見るからに人の数が少なかった。

「まあ、こっちは本当に用事のある人たちしか来ないしね」

ジム戦に挑戦しようと思ってる人とか。

そう言うアーティは隣を見る。

そこには、明らかに先程までの通りに対しては見せなかった表情を顔に浮かばせ、興味津々といった顔つきになっているシュバルツの姿が。

「明日以降にするんじゃないの・・・？」

「そりゃ、そうだが・・・」

「ほら、次々」

後ろ髪を引かれまくっているシュバルツを引っ張り、【セントラルエリア】を抜け最後の通りへと向かうアーティ。

道中問題もなく、無事、最後の通りに到着する。

「で、最後は【4番道路へ向かう通り】」

「そのまんまだな・・・」

「まあ、そうだけど・・・」

人の流れはやっぱり此処が一番激しいから人にぶつからないよう気をつけてね」

然して大きな特徴があるとはシュバルツには思えなかったが、言われて見れば確かにこの通りが一番人の往来が激しい。

街に繋がっている唯一の陸路に繋がっているのだから当然と言えば当然かもしれないが。

「で、ここを抜けると4番道路。」

あそこは砂漠地帯だから、しっかり準備していった方がよいよ」

「そうだな・・・」

まあ、まだ先の話なので明日以降考えればいいや、と気楽に思うシュバルツだった。

・
・
・
・
・

その後、一先ず下見?にと思い、ジムのある通りをシュバルツとア
ーティは歩いていた。

「なあ、このジムリーダーってどんな奴なんだ?

ヒウン出身なら知ってるだろ・・・?」

サンヨウシティでは色々と言葉と街の人間に聞き込みをして情報を集めていたシュバルツだが、折角この街出身の人間がいるのだからと聞くことにしたのだ。

「え〜と・・・僕の記憶通りなら、確か岩タイプがメインだったはずだけど・・・」

「岩、か」

一種で岩と言えば、ダンゴロの進化系や、イシズマイが代表的だろう。

まあ、彼らだけとは限らないので油断は出来ない上に、防御も総じて高く、更には特性が【がんじょう】である可能性が非常に高いので、まず一撃では落ちない。

「厄介だな・・・」

ただ、その反面素早さはどうしても落ちてしまい、機動力があまり活かせないことが多い。

なので、攻めるならその方向からか、とシュバルツは考えを纏めていく。

「・・・まあ、シュバルツなら大丈夫だと思うけど・・・」

どんな人間か知っているアーティからしてみれば、旅の相方がこの街のジムリーダーに負けるとは考えにくかった。

というか、あのサンヨウジムの老獪に勝ったのだから負けるはずがないと思ったのだ。

そんな風に、二人が考えを纏めている時だった、

「おい」「お前たち」「トレーナーか・・・?」「

後ろから唐突に声をかけられた。

「ん?」

「はい?」

何かと思い振り向くと、

「トレーナーなら」「ポケモンを」「解放しろ!!」「

「行け」「メグロコ!」「デスマス!」

フードを被った怪しい二人組があり、突然ポケモンを繰り出してきた。

12 匹目 メグロコ 散策（後書き）

アーティの家族の話に関しては完全にこちらの捏造ですので。それから、一応主人公と主要キャラの手持ちポケモンを一応載せておくことにしました。

13 匹目 デスマス 路上バトル(前書き)

Wi-Fi機器を買ったので、ようやくポケモンの幅が広がります。
・・・DSがもう一台あればなーと思っているのですが、金がヤバ
いので購入する気はさらさらありません。
使っていない友人に借りるか・・・

13 匹目 デスマス 路上バトル

突然自分たちに襲いかかってきたフードを被った二人組。

「こりゃまた、何のつもりだ・・・!?!」

「なんだよ、この人たち!?!」

驚きながらも、シュバルツとアーティは急いでその二人から距離を取り、

「行け、ルカリオ」

『ルカ!?!』

「頼んだよ、クルマユ」

『ル』

自分たちもポケモンを繰り出した。

そんな突然湧き上がった騒動に、通りを歩いていた面々は目を止める。

そんな周囲から向けられる視線に溜息をつきつつも、シュバルツとアーティはサツサと終わらせてしまおうと思った。

道路にいるような一般のトレーナー同士のバトルであればこういったことは日常茶飯事なので、特に目を向けられることもない。

だが、今シュバルツたちがいるのは街中。

しかも、イッシュユンと言っても良いであろう大都市ヒウンの大通りの一つである。

そんな所で突然ポケモンバトルを始めたらどうなるか。

当然、周囲の人々の目に付くし、人々の邪魔になる。

精々見物として捉えられれば良い方で、大抵は見回りの警官に見つかり嚴重注意をされる破目になる。

「行け」「メグロコ!」「デスマス!」

シュバルツたちはそんなことは言われなくても良く分かっているのだが、今回は相手の方から仕掛けてきた。

相手も分かっていると思いたいのだが、目の前の二人は周囲の様子などまるで気にした様子が見られない。

特に何かを考えた様子も見られず、ポケモンに攻撃の指示を出していた。

「メグロコ、【かみつく】!」

「デスマス、【シャドーボール】!」

必然的にダブルバトルの形式になっていたのだが、相手はそれを意識する様な事は無く、メグロコはクルマユに、デスマスはルカリオに攻撃を仕掛けてきた。

とはいえ、二人(二匹)ともそんな真正面から馬鹿正直に繰り出される攻撃など当たりたいとは思わない。

ルカリオは向かってくる黒い弾を半身をずらすことで避け、クルマユは、

「クルマユ【くさむすび】!」

「クル!」

向かってくるメグロコの足に草をひっかけ、相手を転ばせることで相手を止めていた。

そんな二匹の様子を見たシュバルツは、

「なあ、それモノズがトウアラさんにやられた奴じゃないか・・・？」

そう、アーティに呟いていた。

それを耳聴く聞いていたアーティは、

「うん、そうだよ。」

地面に足を付けて向かってくる相手には便利そうだったからね、僕も使わせてもらうことにしたんだ」

そう答えていた。

バトルの真っ最中だというのに二人とも余裕が感じられる。

「そうかい。」

なら、俺も少しは成長してるところを見せるとするか。

ルカリオ！！」

あっさりと自分たちの攻撃をいなされ、シュバルツとアーティの二人を警戒している目の前の二人組と、彼らのポケモンたちにルカリオが向かって行く。

当然、相手は警戒し、自身のポケモンたちに指示を出そうとするが、それより速く、ルカリオが放った“黒い弾”がデスマスに勢いよく向かっていった。

「なに！？」

『デス！？』

しかもその弾は明らかに先程デスマスが放っていた弾より大きい。同じ【シャドーボール】であるのは一目瞭然だが、それでもこんなにも分かりやすく威力の違いが出るものだろうか？

出鼻を挫かれ、驚き、気を取られていたデスマスとそのトレーナーは避けることも指示を出すことも出来ず、

『マス！！』

デスマスにルカリオの放った黒弾が直撃する。

「デスマス！！」

弾が直撃したデスマスは仮面を地面に落とし、自身も地に落ちる。地に落ちたデスマスに男が声を掛けているが、ルカリオはそんな様子など気にも留めず、流れるような動きで体をメグロコへと向け、一瞬で姿を消す。

「なんだと！？」

『グロ！？』

メグロコとそのトレーナーは驚いているが、アーティは然程驚いていなかった。

シユバルツがルカリオをバトルに出している時は殆ど指示を出していないのは、既に彼の仲では当然の事だったし、今の様に姿を消すのを見るのも二回目だ。

未だに何故あんなことができるのか分からなかったが、それでも最初に見た時のような衝撃はない。

ただ、シュバルツが成長している所を見せると言っていた割には、以前とあまり戦い方に変化がないことに疑問を持ってはいたが・・・そんな風に、アーティとクルマユが呑気にメグロコの方を眺めていると、

「・・・え・・・？」

突然メグロコの周りにルカリオが何体も現れていた。

2、3体ではなく、10体程。

それらが突然メグロコの周囲に現れる。

「・・・は・・・!？」

『ロコ!？』

またも驚き、呆気にとられる一人と一匹。

いや、この場合周囲でこのバトルを見ていた人間、ほぼ全員だろうか。

消えたと思った相手が何倍にも増えて自身の周囲に現れる。

驚く要素としては十分過ぎる。

そんな周囲の様子を知ってか知らずか、シュバルツはニヤリと笑い、

「やれ、ルカリオ!!」

そう指示を出した。

そんな声がシュバルツから発せられると同時に、一斉に周囲のルカリオがメグロコへと向かい、

「・・・は・・・!？」

全てメグロコにぶつかることなく通り抜けた。

10体が、10体とも自身が向かっていった方向にそのまま向かい、消滅していく。

そして、そんな訳の分からない様子にメグロコのトレーナーが気を取られていると、

『リオ!!』

上空からルカリオがメグロコ目掛けて降ってきた。

右手を体の後方に大きく引き、重力に引かれる勢いそのままに、メグロコに向けて自身の体重を乗せたその右拳を解き放つ。

「【かわらわり】!!」

そしてその右拳は正確にメグロコの胴体を捉え、穿ち貫く。当然、メグロコは耐えられずに、

『グ、グロツッ』

バタ!!

倒れ、戦闘不能状態に陥る。

「くそっ!!」

そんな呆気なくやられた自分たちのポケモンを見て、

「この程度でやられやがって、だらしない奴め!!」

「……ふふふ……帰ったら……折檻が必要………うふふ

ふふふふふ

悪態を零しながらボールに戻す怪しい二人組。

とりあえずこれ以上厄介事に巻き込まれるのはごめんなシユバルツとアーティは、

「それじゃあ、俺たちはこれで」

さっさとその場から離れることにした。

ルカリオとクルマユをボールに戻し、周囲に集まっていた群衆を掻き分け、急いでその場から離れる。

これ以上ここにおいても余計な事に巻き込まれるだけだろうし、面倒事はごめんだ。

先程、遠目ではあったが警官の姿も見えたのだ。

長居は無用

この後あの二人組がどうするのかは知らないが、自分たちにこれ以上関わってこないことを祈りつつ、人ごみを掻き分け、急いで二人はポケモンセンターへと向かうのだった。

?
?
?
?

「それにしても、さっきの人たち何だったんだろうっね・・・?」

ジムのある通りを無事に抜け、ポケモンセンターのある海岸部の通

りへと到着し、後ろから誰も追いかけて来ていないことを確認した
アーティがそう洩らす。

「・・・そんなもん、俺が教えて欲しいわ」

突然襲いかかって来た割には、あまり強くなく、バトルマニアとい
うわけではなさそうだった。

「ポケモンを解放しろ！！」とか言ってたけど、何だったんだろ
う」

「解放”ねえ・・・”

どっかで聞いたような気がするが、どこだったかな・・・？」

ここ数日のうちに、それこそ旅を始めた最近、どこかで聞いていた
はずなんだが・・・
後一步の所で思い出せそうなのだが、その後一步が中々踏み出せな
い。

喉元までは出かかっているのだが、そこから先に進まない違和感。
別に思い出せなくても問題ないとは思っただが、気になる。

「まあ、いいか」

それでも、思い出せないのならしょうがない、と一先ず措いておく
ことにしたシュバルツ。

「けど、明日もあの通りに行かなきゃいけないんだよね」

「・・・そういやそうだ」

が、アーティのその言葉で気落ちする。

あの二人組のような人間が早々いるとは思えないが、あの通りには出来るだけ近寄りたくないのが今のシュバルツの心境だった。

だが、目的のヒウンジムも同じ通りにあるのだ。

・・・ジムが別の場所に移動すればいいのだが、そんなに簡単に動く訳もない。

「まあ、ないとは思うけど、明日は声を掛けられたとしてもすぐにジムに入ればいいよ」

流石に建物の中まで追いかけてはこないと思うし。

そう語るアーティだったが、彼も困惑気味だ。

不審者にしては（周囲の目を気にしていないため）大胆すぎるし、バトルマニアであったとしても常識がなさすぎる。

なにかのイベントであったとしても、そう言った場合は事前、もしくは事後に必ず説明があるはずだ。

今回の一件はどれにも当てはまらない。

それが不気味で、何より彼を混乱させていた。

「幸い、バトルに負けたら早々に諦めてくれる奴らだったから気にしない方が良くと思うが・・・」

「うーん、それはそうだけど・・・」

バトルに負けても襲いかかって来る不審者はいる。

大抵はポケモンに倒され、成功することは少ないが。

そのことは、シュバルツにしる、アーティにしる、旅に出る前に散々両親や周囲の大人たちから言われてきた。

なので、普段はバトルに勝っても暫くはポケモンをボールには戻さないようにしている。

今回は、サツサと立ち去りたかったのと、周囲の目があったので例外だ。

「今後のこともあるから分かるが、あんまり気にしない方が良いでしょう。また会った時は会った時だ」

そう言つて、足の速度を上げるシュバルツ。

もう、今日はこれ以上の厄介事はごめんなのだ。

午前中は【ヤグルマの森】でアーティに振り回された拳句、訳の分からない声が脳内に響く。

午後になってヒウンシティに到着して休めるかと思つたら、先程の事件。

これ以上は勘弁して欲しい。

「あ、待つてよシュバルツ」

先行するシュバルツをアーティは急いで追いかける。

別に取り残されても焦ることはないのだが、なんとなく、今彼に付いていくのが遅れたら凄く惜しいことになる気がしたのだ。

・
・
・
・
・
そんなこんなで、到着したポケモンセンターには、

「……なんでさ……?」

「さあね〜」

入口まで溢れかえる程の人の山があった。

街全体の人口を考えればおかしいことではないのだろうが、ポケモンセンターという建物に大量の人が集まるのはおかしい。

何かイベントでもやっていれば別なのだろうが、先程自分たちがいた時にその様な告知は全くされていなかった。

なので、イベントとも考え難い。

「とりあえず、暫く外で待つてみるか」

シユバルツにしろ、アーティにしろ、夜までに入ることができれば良いのだ。

夕飯ならば、少々金がかかるが外食にしても良いのだし。

「どれぐらい？」

「とりあえず、後30分ぐらい・・・だな」

近くの広場に備え付けられている時計を見ながらそんな会話を交わすシユバルツとアーティ。

そんな彼らが視線を目の前のポケモンセンターへと戻すと、

「・・・ん？」

気のせいかな？

何か声が大きくなってきているような気がするんだが・・・」

「あれ？」

そう言えば・・・」

明らかな変化が起きていた。

まず、今まではポケモンセンターの内部で聞こえていた、歓声とも、

嬌声ともとれるざわめきが、次第に自分たちのいるポケモンセンターの入り口部分に向かって移動しているということ。次に、外側に内側に溜まっていた人ごみが段々と外側に出てきているということ。

まるで、彼らが到着したタイミングを見計らったかのようにその人物は二人の許へと向かってきた。

燃えるような赤い長髪。

その長髪を肩のあたりで一纏めにしている。

年齢の割にはやや老けたイメージのある顔つきだが、その体は歳不相応に引きしまっていた。

そんな体を包むのはどこぞの民族衣装ともとれるような衣装。

足にはサンダル。

そんな一目見たら忘れないであろう人物が人ごみの間から姿を現した。

「おお、シュバルツ、久しぶりだな。

待っておったぞ!!」

「ア、アデクさん!？」

姿を現したのは現イッシュユリリーグチャンピオン、アデク。

シュバルツにとっては今現在最も目指している人物であり、いずれは倒し、越えなければならぬ人物だ。

13 匹目 デスマス 路上バトル（後書き）

GW期間中、どうしたものか・・・

何故か月曜日には講義があるという不自然さ。

金曜は教授が休みにしてくれたのに・・・サボるか

14 匹目 ゴースト 頂点の休暇（前書き）

こちらではお久しぶりです。

およそ3ヶ月ぶりの更新になりますか・・・

マジですいませんでした！！

ペースは落ちると思いますが、今後も続けていくつもりですので、何卒よろしくお願いいたします。

14匹目 ゴースト 頂点の休暇

現在、シュバルツたちとアデクはポケモンセンター内に設置されているソファの一角に座り、挨拶を交わしていた。

「改めて・・・お久しぶりです。
アデクさん」

『モノ〜』

「ああ、久しぶりじゃな。
モノズも」

チャンピオン見たさにポケモンセンターに集まっていた人たちを、

『待つていた人が来たので皆は帰ってくれんか』

と言う自身の発言により散らし、アデクは改めてシュバルツと挨拶を交わしていた。

何だかんだでシュバルツが覚えている限り、アデクに会うのもこれで5回目だったりする。

一度目と二度目の時は、まだモノズが孵っておらず、シュバルツは父とアデクのバトルを見ているだけだった。

かなり幼かった頃に見ていたから、その時どんなバトルが行われていたのかはシュバルツ自身よく覚えていないが、周囲のトレーナー達が揃って憧憬の視線をバトルに注いでいたのは覚えている。

そんなトレーナー達から憧憬の視線を向けられる父とチャンピオンを見て、

自分もあなりたい

と、シュバルツが思ったのは当然のことだろう。

三度目と四度目の時は、モノズも孵っており、シュバルツは（それなりに手加減をした）アデクとバトルを楽しんだ。

当時のシュバルツは、勿論全力で戦っていたし、モノズもそんなトレーナーの期待に応えようと必死にチャンピオンのポケモンに挑んでいた。

だが、そこはチャンピオン。

シュバルツとモノズの悪い部分を見抜きながら、間違った方向を修正し、的確に指導を行っていた。

ポケモンバトルが強い人の中には、自身が強くても人に全く教えられない人もいるが、幸運にもアデクは違っていた。

・・・まあ、実際はかなり苦手なのだが、シュバルツの手前少し頑張ってみたのだ・・・

「・・・それで、え〜と・・・お主は？」

シュバルツとモノズとの会話を一旦区切り、アデクはアーティへと視線と言葉を向ける。

視線を向けられたアーティは、勢い良く立ち上がり、アデクに向き直ると、直角に腰を折り曲げ、

「は、はいっ！！」

シュバルツと一緒に旅をしているアーティと言います。

よ、よろしく願います」

若干どもりながらも自己紹介をした。

普段と変わらない様子でアデクに接しているシュバルツとは違い、アーティはガチガチに緊張しているが、無理もない。

ポケモントレーナーとしては現在地方一の間人が目の前にいるのだ。芸術家が本分であるとはいえ、アーティも一人のトレーナーである。チャンピオンが目の前にいれば緊張してしまうのが当然だろう。

分かりにくければ、自分自身が心から尊敬している大物の人間や、普段の日常ではまず会えない有名人、それに、普通の会社員が所属している会社の社長に、いきなり話しかけられでもした時を思い浮かべて欲しい。

誰だって驚くだろうし、まとも会話するのは難しいだろう。寧ろ、リラックスしているシュバルツの方が感性がおかしいとも言えるだろう。

「ああ、緊張せんでええ。

楽にしとりや良いんじゃない、楽にしとりや」

手を振り、緊張する必要はまるで無い、と強調するアデクだが、

「は、はい」

アデクに座るよう促され、アーティは椅子に腰を下ろすも、チャンピオンの言葉通りにすることなど当然出来ず、背筋をピンと伸ばし、ガチガチに緊張したままだった。

「・・・はあ

まあ、ええわい」

そんなアーティの姿に若干気落ちしながらも、いつものことだと思いき直し、アデクはシュバルツへと向き直る。

ゲーム内では所々に出没してプレイヤーの操る主人公に話しかけて

くるチャンピオンたちだが、実際は結構忙しいのだ。

チャンピオンと四天王が忙しいのはポケモンリーグの時や、何か重大な事件が起きた時だけだと考えているかもしれないがそれは違う。ポケモンリーグで一番になるということは、トレーナーたちの頂点に立つということであり、それすなわち一地方を背負って立つ人間でなければならないのだ。

主な活動は各地方のポケモン協会が定めたものだが、それもチャンピオンが年若い少女出なければそれなりの仕事量だ。

具体的な活動としては、タレント活動やポケモン事業の普及など、チャンピオンとしてのイメージを生かした活動が主になっている。後は、緊急時の特務部隊みたいな扱いもある。

非常に強力なトレーナーが悪事を働き、警察機関では対処できない場合などはジムリーダー、或いは四天王やチャンピオンが赴くことになるのだ。

勿論、休暇はあるが、それにしたって普通の人より若干多い程度でしかない。

自分の趣味の石集めや、遺跡調査など平日頃からやっつけられるほど暇では当然ないのだ。

まあ、その辺りは地方ごとの違いがあったりするが・・・カントーとジョウトは二つの地方のチャンピオンなわけだから、現在判明している他の3つの地方のチャンピオンよりは忙しいし、シオンオウやイツシュにした所で多少は異なるものの、忙しいのは同じ。それに比べて、ホウエンはやや緩かったりする。

とまあ、そんな背景を知っているシュバルツとしては何故アデクがここにいるのか疑問だったのだ。

「それで、なんでアデクさんは此処にいるんですか・・・？」

それで聞いてみたのだが、

「ああ、ちょうど休暇だったんでな、久しぶりにシャガの奴に会いに行ったらお前さんが旅に出たことを聞かされたんじゃ」

「ははあ、成程・・・」

だからってこんなにタイミング良く自分たちの行く手に現れることが出来るのだろうか、とシュバルツは疑問に思ったが、

「そうしたら、ちょうどタイミング良くトウアラの奴から電話が掛かって来てな、そこでお前さんがあいつに勝ったことを聞かされたんよ。」

それで、すぐにサンヨウを発つという訳でもないという話だったんで、二日ほどお前さんの家に泊まって、さっきヒウンに着いたところだな」

自身の見事な赤髭を手でなぞりながら話すアデクに、

「要は、暇つぶしですか・・・」

若干呆れの意味も込めた言葉で返し、

「じゃあ、今日・・・は、無理でも明日、俺とバトルしてください
！！」

時計を見ながら、彼自身の要望を伝える。

シュバルツにしてみれば今迄何度か闘ったことがある相手とはいえ、自身がある程度成長してからアデクと会うのは初めてである。

それに、今までのバトルは明らかに自分が手加減されていたのが分かるほどのバトルだったのだ。

今思えば、新米トレーナーとチャンピオンなのだから仕方ないとは

思うが、当時のシュバルツにしてみればその事が悔しくて仕方なかった。

だから、ジムリーダーを二人倒した今、シュバルツは自身の実力がどれほどチャンピオンに通じるのか、試したくて仕方がなかった。そんな少年の想いをアデクは、

「ああ、別に構わんぞ。

が、わしもヒウンに来たのは久しぶりでなー

一度、観光しておきたいんじゃ。

なんで、バトルは明日の午後からでも構わんか？」

ちよつとした条件を付けてシュバルツに了承の意を示す。

「はい、勿論大丈夫です！！」

シュバルツとしてもそれは願ったり叶ったり、だ。

今日一日、自分もポケモンたちも色んな事があつて疲れ切ってしまったっている。

せめてもう半日は休ませて、万全の状態でもバトルに臨みたかったからだ。

当初の予定では、その状態でジム戦に臨みたかったのだが、仕方ない。

ジムはほぼ毎日空いているが、アデクと次に会えるのはいつになるか分からないのだ。

ジム戦よりもアデクとのバトルを優先させるのは当然だ。

そして、自身が予定していたよりもヒウンには長期滞在になるかもしれないと思い、後でポケモンセンターの受付で期間の延長を申し出なければならぬとシュバルツは思ったのであった。

「なら、バトル場の予約はわしがしておこうか。

その方が確實じゃろうて」

「すみません、お願いします」

『モノノ』

バトル場はどんな街でも大抵連日予約で一杯だ。

街中の路上でのバトルは通行人の邪魔になるため、自粛する様に協会側から御達しが出ているし、広場も同様、建物内など論外である。なので、バトルがしたい人間はジム、或いはほとんどの街に設置されているバトル場に申請して予約を取っておくのである。

大体一つや二つは突然のバトルに備えて空いているものだが、その場合普通のバトル場と比べると劣悪な環境になってしまっていることが多い。

そんな場所でもバトルは当然行えるが、折角のアデクとのバトルなのだからちゃんとした場所でやりたいとシュバルツは思っているのだ。

「ああ、では場所が決まったらライブキャスターで連絡するから、互いの番号とアドレスを登録しとくとするかの」

「そうですね・・・ほら、アーティモ」

『ノ』

「うええ!？」

「ほ、僕なんかが良いんですか!？」

『クルル!？』

「別に構わんに決まっとうろつが」

「そ、そうですね・・・」

ホツとした様な、新たな緊張が湧いてくるような、微妙な気分になせられながらアデクと番号の交換をするアーティであった。

・
・
・
・
・

番号交換も終わり、暫く他愛もない会話を交わしていたシュバルツとアデク　アーティは相も変わらず緊張していた　だったが、唐突に今日の午前中の様子を思い出したシュバルツが、

「あの、アデクさん・・・」

「ん、なんじゃ？」

「導きの間　という言葉聞いたことはありませんか・・・？」

そう、アデクに問いかけていた。

「導きの間　・・・じゃと？」

「はい、ご存知ですか？」

チャンピオンであれば何か知っているのではないかと思い、聞いてみたのだが・・・

「どっかで見たとと思うんじゃないが・・・どこだったかのう？」

アデクの反応は期待していたものとは違い、不明瞭なものだった。

「そう、ですか・・・」

若干気落ちしながらも、そんなもんだらうと思ひ納得するシュバルツ。

「すまんの。」

思い出したら連絡するわ」

「いえ、お気になさらずに」

突然聞いた自分が悪いのだし。

そう思い、話を元に戻すシュバルツであった。

・
・
・
・
・
【翌日】

午後2時丁度。

シュバルツの姿はバトル場にあった。

正面の離れた場所には自身の対戦相手であるチャンピオンのアデクがいる。

それはいい。

当然だ。

でなければ、誰と闘えというのか。

「なんで・・・」

やや離れた位置にはアーティが座ってこちらの様子を伺っている。

それもいい。

今日の午前中も一緒にアデクと一緒にヒウンシティを観光して回ったのだ。

その時はアーティもかなり緊張感は抜け、ゆったりと街を案内してくれた。

流石ヒウンシティ出身者、とアデクと二人思ったものだ。

だから、アーティがここにいるのは構わないし、全くもって問題ではない。

「なんで・・・」

右斜め前方の、バトルフィールドの真ん中の線の外側には審判らしき人物がいる。

・・・まあ、これもいい。

普段から一般のトレーナーたちがバトルをする際、審判がいないと明確な勝敗を付けられない場合がある。

だから、審判がいるのは普通だ。

問題ではない。
だけど、

「なんで、観客がこんなにいるんだよーーーー！！？」

『ノーーーーー！！？』

スタンドに溢れんばかりに人が、観客がいるとはシュバルツは予想もしていなかった。

そりゃあ、チャンピオンが直接とつたのだから多少なりとも観客がいるとは思っていたが……

「いくらなんでもいすぎだろーが、これは!!」

流石に満員御礼の札が出るほどだとは思わなかった。

……まあ、仕方ない、のか……?

【おまけ】

「きれい……」

「そう、ネ……」

遠目に水の中を泳ぐ水ポケモンの様子を眺めながら、二人揃ってポツンと呟く。

雨が降り、たゆたう水面が雨粒によって乱されるも、陸地に立っている二人には届かない。

「けど、どうしよう?」

「やっぱり、諦めたラ?」

「でも……」

コトブキシティを抜け、ミオシティに向かおうとしていた二人の前

に立ち塞がったのは大きな河。

シンジ湖から海へと流れ込む大きな河だ。

何故か未だに橋が掛かっておらず、渡し船も大雨のため休み。

しかも、この大雨は暫く続くらしい。

そのため、当分渡し船は運休だ。

メリッサは諦めてハクタイに向かうべきだと主張しているのだが、何故かシロナは譲らない。

「……ミオの図書館……」

「……………」

それか

得心がいったメリッサは納得すると同時に、疑問を覚える。

先日のクロガネの博物館でもそうだったが、この子の知識欲は一体何なのだろうか。

ともあれ、理由が分かったのだから、

「ゴースト」

『ゴ—?』

「?」

「私はコトブキに戻ってるから、シロナを引っ張ってでも連れて来てネ」

無理矢理にでも連れて行く。

そう、メリッサは決めた。

別に急ぐ理由でもないのだから、また今度来ればいいのだし。そう思い、サツサとコトブキシティに向かって歩き出す。そして、

『ゴー』

「ちよつ、ゴーストやめて!!」

メリツサア〜!?!」

ゴーストも主に遅れまいとシロナを引っ張り、コトブキシティに向かって動き出す。

シロナも抵抗はするが、結局襟の部分を掴まれ、首元に文字通りひんやりとしたものを感じながら、ズルズルと引き摺られていくのだった。

「せめて、一冊だけ、一冊だけでも〜!!」

そんな声も周囲の雨音に掻き消され、消えていった。

14 匹目 ゴースト 頂点の休暇（後書き）

アデクの口調がよく分からん・・・

まあ、些細な問題・・・か？

それ以上に、私はブラックなので、色違いのサザンドラが配信されると分かって、テンションが凄いです。

映画は見えてないのですが、色違いのサザンドラが出るなら見るべきか・・・！？

それにしても、Lv70、うっかりやで、覚えてるのが【ハイパーボイス】【りゅうのいぶき】【かえんほうしゃ】【きあいだま】ってどうよ・・・

いや、技なんて関係ないから良いんだけど、なんだかなー

15 匹目 クリムガン 力試し？（前書き）

最近のネットニュースがフジテレビ批判ばかりで反応に困る。

まあ、やたらと韓流が推されていたのは知ってましたが、そもそもフ

ジテレビ系列はほとんど見てなかったしなあ・・・

どこまで広がるのやら、今回の騒動は

15匹目 クリムガン 力試し？

「……はあ……」

ガヤガヤと騒がしい観客席に視線を向け、シュバルツは深い溜息を吐く。

別に、シュバルツ個人としては観客がいろいろがいまいがあまり大した問題ではない。

誰に見られていようとも、自分たちが全力で闘うことになるのはいつもと変わらないのだから。

それでも、自分が負けるといふ結果がある程度見えている試合を大勢の人間の前でするのはやはり嫌なのだ。

勿論、自分は全力でやるし、彼のポケモンであるモノズたちも同様だ。

それでも、相手はチャンピオン。

普段からトレーニングはしているとはいえ、そう簡単に以前との差が埋まったとは思えない。

もし仮に、実際にポケモンリーグで闘うことになったら、今とはまた別の心持で闘うのだからうけれど、今回はあくまでも練習試合としての意味合いが強い。

それ故“勝つ”という気持ちよりも、“学ぶ”という心持ちの方が強いのだ。

だから、勝ち負けに拘らず純粹にバトルを楽しみたかった。にも拘わらずこの観客数である。

そこはシュバルツも、子供とはいえ、やはり、男である。

大多数の人の前で負けるなど、自身のプライドを傷つけられる行為はできれば遠慮したい。

「・・・仕方ない、か・・・」

別に金を取っている訳でもなし、ただ単に興味本位で集まってきた人たちなのだから今更追い出すのも気が引ける。

そう自身を無理矢理納得させ、チラリ、とシュバルツが正面のチャンピオンに視線を向けると、

「ふむ、最初はどいつで行こうかの」

嬉しそうに、周囲の観客のことなど気にも留めず自身のポケモンたちを吟味していた。

そんな彼の姿にはチャンピオンとしての威厳や、ベテラントレーナーとしての風格など全く見受けられず、今のアデクの様子だけを見ると、どこにでもいるポケモンバトルが大好きな少年トレーナーと同じように見える。

「よし、こいつにするか」

アデクは数分悩み、ようやく一匹を選び出し、

「さて、良いかのう？」

シュバルツに向き直る。

「ええ、勿論です」

当の本人であるシュバルツは、周囲の喧騒を振り払い、既にアデクと向き合っていた。全く周囲の様子など気にしていないアデクを見て、逆にシュバルツにも気合が入ったのだ。

！！
これぐらいのことで怯んでたら、チャンピオンにはなれないんだ

と。

特別心構えは気にする必要はないと思うが、確かにチャンピオンになる為には最低でもポケモンリーグを突破し、優勝しなければならぬ。

そのポケモンリーグは地方最大のポケモンバトルの大会であり、大勢の観客に見られながらバトルをしなければいけないのだ。だから、シュバルツの心構えはある意味正しいとも言える。

ポケモンリーグ本番になって『緊張していて実力が発揮できず、負けてしまいました』という状態に陥ってしまったては情けないにも程がある。

まあ、チャンピオンになるためには、優勝した上で四天王や現チャンピオンと闘わなければならぬのだが、そこはまた別。

地方によって差があるが、イツシュでの四天王戦やチャンピオン戦は、観客を排除し、バトルを行う当人たちしかバトル場には入れないことになっている。

一応、テレビやラジオの中継が入りはするが、それも当人たちの気を乱さないため、離れた場所に設置され、操作もバトル場の外からリモコンなど電波を使う機器を使って操作することになる。

・・・たまに電気ポケモンやゴーストポケモンの所為で操作が効かなくなることもあるが、そこは御愛嬌。

いずれにせよ、シュバルツにとっては既に一つ学べたことになる。大量の観客付きでバトルを行う機会など早々ないのだから。

話を戻そう。

現在向き合っているシュバルツとアデクの間には、ピリピリとした緊張感が漂っている。

緊張感、と言っても周囲が圧倒されて黙り込んでしまう様な重苦しいものではない。

優勝者が発表される直前や、祭の前に周囲に漂う空気にも似た爽やかで程良い緊張感だ。

そんな二人の間に流れる空気を敏感に感じ取ったのか、ざわめいていた観客たちも自然と静かになり、周囲に彷徨わせていた視線をバトル場に注ぎ直す。

周囲の空気を感じ取ったのか、シュバルツとアデクの間には漂う空気も更に硬く、そして熱いものに昂っていく。
そして、

「バトル始め!!」

審判の声を合図に、二つのモンスターボールがフィールド内に投げ込まれた。

?
?
?
?

アデクは何を出すかそれなりに悩んでいたようだが、シュバルツの方としてはあまり悩むことはなかった。

というのも、今回のバトルのルールは3vs3で全部倒された方が

負けという単純なルールだからだ。

アデクは6匹中から3匹を選ばなければならなかったが、シュバルツとしては逆に悩まないで済むということもあり、今の自分の本気をそのまま出せる順番で考えればよかったのだ。だから、

「行け、ミジユマル!!」

『ミジユマ!!』

最初は新入りの張り切り具合に期待することにした。一方のアデクが繰り出したのは、

「頼むぞ、クリームガン」

『ムガーッ!!』

ドラゴンタイプのポケモンであるクリームガン。今のところ、進化はしないポケモンであるとされているが、攻撃と防御に割と秀でたポケモンだ。

クリームガン、か・・・

シュバルツにしてみれば、見慣れたポケモンの一匹だ。

自身の父親がよくバトルで頼っていたポケモンであり、父以外にもジムトレーナーの何人かが所持していたポケモンでもある。

その分、クリームガンを始めとしたイツシュ地方を中心としたドラゴンポケモンの特徴は他の同年代のトレーナーよりは詳しいつもりだが・・・

アデクさんが、持つてるクリムガンだ。
定石通りに、より堅実に行こう

ミジュマルとクリムガンとでは素早さの種族値にはそれほど大きな差は存在しないが、攻撃力と防御に差があり過ぎる。

ルカリオであれば、耐えられるのだろうが、いかんせん先日加わったばかりのミジュマルが耐えられるとは思えない。

一撃でも大きいのを貰えばその時点で終了だろう。
だから、攻撃は受けずに避けなければならぬ。

シュバルツは、慎重に対処することに決める。

アデクの方も、今迄シュバルツが所持していなかったポケモンというところもあり、若干警戒のレベルを上げる。

それ故、互いが互いの様子を暫く見続け、ポケモンはポケモン同士で、目の前にいる敵から隙を見つけられない様に、また隙を見つけようと努力していた。

その空気に観客が息を呑み、ジツとバトル場に出現したポケモンを見つめ続ける。

それだけで5分が経過しただろうか。

普通のバトルではまずあり得ないこと。

故に、観客の我慢もそろそろ限界へと近づいていたその時、

「ミジュマル、【あまごい】だ」

『ミ〜ジュー!!』

シュバルツが動いた。

前触れもなく唐突に出された指示をミジュマルは忠実に行う。

ミジュマルは、手を振り、腰を振り、踊り出す。

圧倒的实力者とのバトルでこんなに分かりやすい隙は見せるものではないが・・・

「む!!」

「いかん、クリムガン【きりさく】じゃ!!」

『クーツ!!』

何かに気付いたアデクが急いで指示を出し、それをすぐさまクリムガンが実行する。

素早さがあまり高くないクリムガンだが、それなりのスピードで目の前で踊っているミジュマルへと突き進む。
当然、シュバルツは気付いており、

「ミジュマル十分だ!!」

【アクアジェット】で距離を取れ!!」

『マル!!』

ミジュマルにクリムガンから距離を取る様、指示を出す。

と言っても、普通に逃げたり避けたりするのは既に距離が近くなりすぎてしまっているため、本来ならば先制攻撃で使われるはずの【アクアジェット】をミジュマルに使わせ、急いでクリムガンから距離を取る。

『ガン!!』

標的であるはずのミジュマルに目の前から逃げられたクリムガンは悔しそうに吠えるが、

「むう……流石に、あいつの息子にドラゴンポケモンで勝つのはキツイかのう……」

アデクはどこか納得した様な表情になりながら空を眺めていた。アーティがそんなアデクの様子に気づき、アデクと同じように視線を空へ向けると、

「うわ……軒下、軒下」

どんよりと黒ずんだ雨雲がバトル場の上にかかり始めている。間違いなく、ミジュマルが先程行った【あまごい】の所為だろう。傘を持っていないアーティは急いで雨宿りが出来る場所に駆けて行った。

そして、彼がバトル場内の屋根の下に辿り着くと同時に、

ザアー……

大粒の雨が降り出した。

シユバルツとアデクは気にしていないが、二人のバトルを見に来ていた観客にしてみればたまったものではない。

今回二人が使っているバトル場には、開閉式の屋根はついていないが、バトルの技として雨が降っている以上、屋根を閉めるわけにはいかない。

運良く軒下にいた観客以外は、急いで雨を凌げる場所に逃げ込んでいた。

一方、肝心のポケモンたちはと言うと、

『ミ〜ジュ、ミ〜ジュ!!』

ミジユマルが楽しそうに雨の中を動き回っているのに対し、

『ム、ムガ・・・』

クリムガンは明らかに動きが鈍っていた。

本来、【あまごい】は雨を降らせるだけで、【あられ】の様に直接ポケモンにダメージを与える技ではない。

にも拘らずクリムガンは明らかに弱っていた。

そんな自身のポケモンの様子を見ながら、アデクはシュバルツに声をかける。

「流石じゃのお・・・クリムガンの生態をよく知っとるわ。」

こればかりは、お主に水タイプがいると思わなかった僕の負けじゃ」

「あ、ありがとうございます。」

でも、手は抜きませんよ!？」

「当たり前じゃ!！」

流石に僕も負けるわけにはいかんとはいえ、手を抜かれるのは気が滅入るわい」

予想外のアデクからの称賛に対し、素直に喜ぶシュバルツだったが、バトル中ということもあって、すぐに警戒し直す。

因みに、クリムガンの動きが鈍っている訳だが、これは単純にクリムガンの体温が雨にうたれて下がってしまったためだ。

ゲーム上では図鑑にしか記載されておらず、バトルに影響することはまずないが、実際はそうはいかない。

尻尾の火が消えればヒトカゲやリザードは死ぬし、デスカーンはト

レーナーが扱う際には注意が必要だと常に言われている。

それと同じようにクリームガンも体温の変化によって行動が変化する変温動物の様なポケモンであるため、体温が下がると動きが鈍くなってしまう。

それを覚えていたシュバルツはしっかりと行動に移したのだ。

これは、単にバトルの技術を磨けば良いのではなく、生態もよく知っていた方が良いことの一例だろう。

シュバルツが残念だったのは、【あられ】等であった場合は完全に動きが止まってしまうことになるのに、残念ながらミジユマルにはまだ覚えさせていなかったということだ。

これなら本当に決まっていたかもしれないのに。

「じゃあ、ミジユマル【れいとうビーム】」

『ジユ、マーッ！！』

動きの鈍ったクリームガンに向けて、ミジユマルの口から勢いよく冷気が吐き出される。

ミジユマルの基本戦術としては、腹部に付いているホタチを使った近接戦なのだが、流石に一撃で落ちる可能性のある近接戦をシュバルツは仕掛けるつもりはなかった。

雨粒を氷の弾に変え、威力の増した【れいとうビーム】がクリームガンへと迫る。

決まった様にも見えるが、そこはチャンピオン。

「クリームガン【かえんほうしゃ】」

『クーツー！！』

動きの鈍いクリームガンの口から勢いよく炎が吐き出され、氷の弾と

冷気を打ち消していく。
更には、口から吐き出した炎により、一時的だが体温も上がり活性化するクリームガン。
アデクはその気を逃さず、

「【つじぎり】—!」

『リムッ!—!』

クリームガンに指示を出す。
先程とは打って変わり、それなりの速さで突き進んでくるクリームガンを、

「【くさむすび】だ!—!」

『ジユマッ!—!』

咄嗟の判断で、転ばせるミジユマル。
1・6mの身長に139・0kgという割と重めな体重のクリームガンは、見事に引っ掛け、

『ムガッ!—?』

顔を強打することになった。
急いで起き上がろうとするクリームガン。
そこに、

「【ぶくぶく】」

『マル』

ミジュマルから猛毒が吹きつけられる。

「むう……」

『クリイ！？』

今度は直撃し、猛毒状態に陥ってしまうクリームガン。それでも、体温が上昇しているこの機を逃すか、と怯みながらもミジュマルに勢い良く迫り、

「【ドラゴンクロー】！！！」

両腕の爪を振るう。

【どくどく】を放った直後で安心していただけなのか、油断していたのかわからないが、見事にミジュマルにクリームガンの両爪が直撃する。結果……

『ミ、ミジュ……』

「ミジュマル！！！」

ミジュマルは倒れ、

?ミジュマル戦闘不能。

シユバルツさん、ポケモンを交代してください？

バトル場内にそんなアナウンスが流れるのだった。

15 匹目 クリムガン 力試し？（後書き）

クリムガンに善戦するも、ミジユマル敗退。

まあ地力が違うからこんなものではないでしょうか。

というか、勝てたら勝てただで未恐ろしいミジユマルですが・・・

16 匹目 ルカリオ 力試し？（前書き）

島田紳介が芸能界を引退するそうです。

理由は暴力団関係者との不適切な交際だそうです……

突然過ぎてなんと言ったらいいのかわかりませんが、取り合えず、芸能界やTV業界がこれで色々と他の事件を揉み消そうとしている気がしてなりません。

まあ、どうでもいいけど、頑張れお笑い芸人。
凄いチャンスではあるんだから。

16 匹目 ルカリオ 力試し？

「……お疲れ様、ミジユマル」

『ミ、ミジユ……』

戦闘不能となったミジユマルをボールへと戻しながら、シユバルツはミジユマルへと声をかける。

声をかけ、ミジユマルの労を労い、ボールを脇に置かれている治療用の柵へと置く。

治療用の柵に置かれると、応急処置を自動で行ってくれるため、死ぬ可能性がほぼゼロになるのだ。

ゲームでは“ひんし”状態になれば“どく”や“やけど”といった症状は消えるが、そんな都合の良いことはここでは有り得ない。

瀕死になっても“どく”や“やけど”は消えないし、最悪戦闘が長引けばそのまま死に至る可能性だってある。

過去の技術がまだまだ発展しなかった時代ではそういった事例が多々起きていたため、戦闘不能になったポケモンの治療は真っ先に行われることとなっている。

勿論、ボール自体に一定の生命維持装置は付いているものの、それらにはあくまでもその場しのぎであり早めの治療が必要なことに代わりはない。

ただし、一度戦闘不能になったポケモンは回復しても当然その間のバトルには復帰できない。

……この辺りは大会では厳しくされているが、個人同士の審判を伴わない試合だと無視されることがある。

そう言った場合は“どちらが先にポケモンが回復するより速く全てのポケモンを倒せるか”というポケモンにとっては最悪のルールになることが多いため、最近ではバトル場には必ず監視カメラが付い

ていて、警察が常駐していたりもする。
この様な問題点もあるが、ポケモンバトルでのポケモンの死亡率は、この機械が発明されてからは下がっているのだから発明自体は良いことなのだ。

閑話休題

ミジュマルを収めたボールを棚に置きながらシュバルツは考える。

……まあ、ミジュマルには悪いが、仕方ない。

アデクさんのクリムガンとあれだけやり合えたんだから、寧ろ良い方だろう

これが自身の知り合いであるジムトレーナーたちのクリムガンであれば、まだ結果は違っていたかもしれないが……
そう考えつつ、改めてチャンピオンの強さを感じるシュバルツだった。

シュバルツ自身分かってはいるが、ドラゴンタイプのポケモンは相手取ってみると、他のタイプのポケモンに比べて遣りづらい。

モノズやキバゴの様な進化前のポケモンは別にしても、全般的に身体能力が高く、攻撃力が高いのが通例だ。

ダイケンキは無理だとしても、せめてフタチマルに進化してから闘いたかった。

それならば一撃で落ちる可能性も少なかっただろうから、もう少し闘い方も積極的に行けたのだが……

まあ、今更考えても仕方ないことではある。

自身にとっては　ミジュマルには悪いが　次からが本番と言っ

ても良いのだから、気にしている暇はない。

そう決意を新たにし、ボールをフィールド内へと投げ込む。

そこから現れたのは、

「頼んだぞ、ルカリオ!!」

『リオ!!』

つい先日進化したばかりの一匹、ルカリオだ。

? ? ? ?

「ふむ……」

フィールド上に現れた二匹目のポケモン　ルカリオを見て、アデクは素早く考えを巡らせる。

“もうどく”状態になっている以上、長引かせるのはこちらにとつては不利。

であれば、速攻しかないんじゃないか……

クリムガンとルカリオでは、素早さの種族値に倍近くの差がある。そんな相手に素早さで勝てるとは流石にアデクも考えない。

これがリオルだったらまだ違ったのだが、残念ながらルカリオに進化してしまっている。

しかも、アデクが電話越しにトウアラから聞いた話によれば、シユバルツのルカリオは“消える”との事だった。

アデクも信じられなかったが、あの老獪であるトウアラが嘘を言うとも思えず、ルカリオにどう対応すればいいのか迷っていた。

ゲーム上ならば“もうどく”になったクリムガンを一旦手元に戻し、他のポケモンで行く、という手段を取ることも出来ただろう。

だが、ここではバトル中の道具の使用は禁じられており、クリムガンをボールに戻しても毒は消えず、寧ろより進行していつてしまう。その為、下手にボールの中へ戻したりすると、知らぬ間に戦闘不能に陥ってしまうことがあるのだ。

ボールの生命維持装置は戦闘不能程度では働かない。

本当の瀕死、或いは大怪我や病気にかかった時、或いは栄養失調状態にならない限り働かないのだ。

一方で“まひ”や“こんらん”、“ねむり”といった症状は時間を置けば回復することがあったりするから、早々に手元の中へと戻されることが多い。

因みに、ゲーム内でポケモンの特性として『しぜんかいふく』というものがあるが、この場合、“まひ”や“こんらん”、“ねむり”等の症状の時にはゲームの様に回復するが、“どく”や“やけど”等、回復するのに人の手による治療が必要な症状の時にはボール内で受けるダメージが半減するという効果になったりする。

要は免疫力が他のポケモンに比べて強いということである。

(特性の『めんえき』とはまた別)

とまあそんな理由もあり、アデクにはクリムガンを手元に戻すという考えはなかった。

であれば、どうルカリオを攻略するののだが……

「とりあえず……【こわいかお】じゃー!」

『ムガーツ!』

ルカリオの素早さを下げようとする。

幾ら攻撃力が高くて攻撃が当たらないのでは意味が無い上での行動だ。

だが、

スッ

シュバルツは何も指示していないというのに、相手のルカリオは腕を組み、相手に向き合った姿勢のまま黙って目を閉じる。

「……む」

『ガ、ガーツ』

どれだけクリムガンがルカリオの目前で顔を強張らせ、威嚇の声を吐いてもルカリオは目を閉じたまま全く微動だにせず、動こうとしない。

クリムガンの迫力に威圧され、怯み、脅えているのかと周囲の観客たちは思っていたが、そんな訳が無いことはアデクにも良く分かっている。

なんのつもりじゃ？

【こわいかお】を発動させたまま攻撃に移るということもできるのに、目を閉じたままなどとはのお。

ルカリオであれば確かに目を閉じていてもこちらの様子は確かに判断できるのじゃろうが……

バトルは現在膠着状態にあると言ってもいいが、それはシュバルツに有利になるだけ。

故に、アデクは一旦考えを妥協することにした。

まあ、そもそも向こうは焦る必要はないのじゃから下手に手を出さず体力を温存した持久戦、といったところかの？

が、それにしても大人しすぎると思うが……一体、何を企んでいるのやら

取り合えず無理矢理自分を納得させたアデクは、相手のルカリオの行動に疑問を覚えつつ 若干期待に胸を膨らませながら も攻撃を続ける。

「【こわいかお】のまま【ドラゴンテール】」

『クーツー!!』

顔を強張らせたクリムガンが体を捻りながらルカリオに向かって突き進む。

【どくどく】を喰らったため普段より動きが鈍いが、そこはチャンピオンのポケモン。

鈍いながらも攻撃自体は鋭く、正確である。

ルカリオ目掛けて突き進んでいたクリムガンは、ルカリオに肉薄する2、3歩前で急に立ち止まると、

『ム、ガーツー!!』

ルカリオに向かっていていた勢いをそのまま体の回転に用い、自身の尾を、目を閉じたままのルカリオにそのまま叩きつけようとする。

あわや、そのままルカリオに尾が直撃するか、と観客たちが息を呑んだ瞬間、

『リオー!!』

ルカリオが動いた。

上半身を傾け、勢い良くその場にしゃがみこみ、自身の側面から凄

まじい勢いで迫っていたクリムガンの尾をかわそうとする。

幸運にもクリムガンの尾は、しゃがみこんだルカリオの上を通過していきルカリオには当たらない。

体を回転させ、再びクリムガンの視線が正面に戻ってくると同時に、ルカリオがしゃがんだ状態から脚のバネを使い、正面のクリムガンに向けて勢いよく砲弾のように突き進む。

自身の両腕は自身の右腰に掌を合わせる形で置いておき、クリムガンに衝突する直前になって、その腰に置いていた両手を自身の身体
の前方へと刺すように突き出す。

突き出した両腕の先にある掌を相手のクリムガンが見えるような形で構えており、そのままルカリオの掌が槍の様にクリムガンに突き刺さるように見えた。

その時、

『ルーツー!!』

ルカリオが叫ぶと同時に、ルカリオ自身の掌の先から圧倒的な衝撃波が巻き起こる。

それは、目の前にいたクリムガンを巻き込むとそのまま直進し、アデクの手前まで突き進み、漸く止まる。

『ム、ムガ……』

そして、

ドサツー!!

巻き込まれた“もうどく”に侵されたほらあなポケモンが耐えられるはずもなく、

? クリムガン戦闘不能。

アデクさん、ポケモンを交代してください？

クリムガンの身体はバトル場に倒れ伏すことになった。

?
?
?
?

「うわー、みんな驚いてるなあ」

シュバルツの後ろにある屋根付きのベンチに腰掛けながら、アーティは観客席を眺めつつ言葉を洩らす。

「まあ、そりゃそうだよな。」

今迄殆ど誰も知らなかった子供のトレーナーが、チャンピオンのポケモンを一体とはいえ倒すんだもん」

驚かない方が不思議だ。

そう言葉を締めくくったアーティは、口を閉ざし物思いに耽る。

彼の視線の先には、旅のパートナーである少年トレーナーの姿。

バトル開始当初よりも若干リラックスした様子でフィールド内に視線を向けている。

……実際、テレビに出てる“強い”って言われてるトレーナーが凄く弱く見えるもんなあ、シュバルツといると

今迄自身が見てきたポケモンバトルのテレビ番組を思い出しながら、

アーティは番組に出ていたトレーナーたちとシュバルツを比較してみる。

そうすると、彼の頭の中では、無駄に豪華に演出されたバトル会場で鮮やかに技を繰り出すトレーナーたちの姿がとても馬鹿らしく思えてきた。

誰もがポケモンを所持することの出来るこの世界での最大の娯楽と言えば、当然ポケモンを使ったモノになる。

それは、コンテストであったり、ポケスロンであったりと様々だが、やはり一番は何と言ってもバトルだろう。

血沸き、肉躍る闘いは、人類がポケモンと共に歩み始めてから今まで変わることなく続いてきた。

勿論、新種の発見等によりルールなどの変更する点は多々あったがそれも些細なこと。

バトルの本質を変えるまでには至らない。

それ故、テレビがポケモンバトルを大会だけではなく平日頃からバラエティとして取り上げているのは当然のことだろう。

画面の中では（誰にでも分かる）高威力で派手な技を使い、当然のようにバトルに勝利するタレントトレーナーがよく使われる。

彼らがテレビによく起用されるのは、映り栄えが良いからであるし、視聴者が一見ただけで強いか弱いか分かるからだろう。

その事自体は特別大きな問題ではない。

テレビというのは（深夜番組や有料番組などではない限り）基本全年齢対象だし、視聴率が高い番組は子供から大人まで誰もが見る作品なので、どんな人でも見て即座に分かるような内容の作品が求められるのだし。

問題なのは、テレビが周囲に与える認識だ。

以前、【タレントトレーナー5人VS素人トレーナー5人】という、

割とよくある企画がとある番組で放送された。

タレント側は普段通り、映りの良い面子を揃え、苦戦はするもののテレビの展開的に当然自分たちが勝つものだと思っていた。

ルールは勝ち抜き戦で、最後まで闘えるトレーナーが残っているチームが勝ちというもの。

企画自体に特別大きな問題はなかったのだが、どこをどう間違えたのか“素人トレーナー”のうち二人ほどベテランの、それこそジムリーダーと肩を並べる程のトレーナーが混じり込んでいたのだ。

しかもこの二人が揃いも揃って堅実な闘い方をする　いわゆる映り栄えのしない　タイプ。

更には生放送で、その二人を一人目と二人目に置いたのだから目も当てられないことになった。

タレントトレーナーがどれだけ派手で高威力な技を使わせようが、当たらず、或いは必要最低限の対処をし、状態変化や各種能力変化の技を使いながら時間を掛け、しかし着実に相手の体力を削っていく。

あまりにも自分たちの予想と違う闘い方や展開に対し、タレントやプロデューサー等のスタッフ一同で休憩時間に猛抗議をするも二人はこれを完全に無視。

結果として、タレント側は総崩れとなり、残りの“本当の”素人トレーナーに回る前にバトルが終了してしまった。

確かに、見る人が見れば、それは素晴らしいトレーナーたちだったのだが、残念なことに視聴者の大半は「派手で高威力な技を使う」「強い」という認識で見えており、そんなトレーナーたちが勝つことを期待していたために、そのバトルを非常につまらないものとして捉えてしまったのだ。

その後は抗議の電話がテレビ局に殺到したとか……

それ以来、テレビ局側でもそう言った“本当の意味での”強いトレーナーを避けるようになり、結果として人々の中に間違った認識が植え付けられ続けていくことになってしまった。

この認識は、昨今のイッシュ地方のポケモンバトル全体に蔓延してきており、ベテランのジムリーダーや四天王、更にはチャンピオンたちが頭を抱え込むほどになってしまっている。

とまあ、そんな理由　　というか社会背景　　もあってシユバルツとアデクの戦いは、観客たちに見ればつまらないものなのだ。ミジュマルはまだ【あまごい】をしたり【れいとうビーム】を放ったり、とそれなりに派手な闘いをしていたのだが、ルカリオは一瞬でクリームガンに止めをさしてしまった。確かに最後の技は派手だったのだが……

……そこまでがな

殆どの人が分かってないだろうし……ていうか僕も分からない

観客の啞然とした顔に向けていた視線をアーティはシユバルツに戻す。

さっきの技は【りゅうのはどう】なんだろうけど、まだクリームガンの体力もそんなに減ってないはずだから戦闘不能になるほどではないはずなのに……

そもそも、あそこまでルカリオの使う【りゅうのはどう】って強かったっけ？

アーティが疑問に頭を悩ませていると、

「……成程、そういうことじゃったか」

アデクがクリームガンを収めたボールを柵に置きながら呟いた。

「え？」

「……………」

その声が聞こえたアーティは耳を傾け、シュバルツは黙ったままアデクに視線を向ける。

「【めいそう】をずっとしておったんじゃない？」

ボールから出てからずっと」と

「あ！」

アデクの言葉にアーティは納得がいった。

目をずっと閉じていたのは【こわいかお】を見ないためだけではなく、精神統一も兼ねていたのだ。

確かに、それならばあの威力の【りゅうのはどう】にも納得がいく。

「ええ、そうです。

おかげ様で大分楽になりました」

自身の策が見破られても嫌な顔などせず、シュバルツはあっさりと答えを自分から認める。

……ちなみに、今の会話中もルカリオは目を閉じていたりするのだが……

「それに……………」

「？」

シュバルツの言葉を聞いたアデクは満足気に頷き、更に言葉を続ける。

「指示もせんのにルカリオがどうしてそれほどの動きを出来るのか疑問じゃったが……」

あの一瞬で分かったの!?

流石チャンピオン!!

と、アーティは驚き、次の言葉を待つ。

「シュバルツ、お主のルカリオ……波動を感じ取る能力が異様に高いようじゃな」

「……………」

アデクに自身のポケモンの闘い方を言われても、シュバルツは黙ったままで返事をしない。

そんな少年の態度を気にも留めず、チャンピオンは言葉を続ける。

「元々ルカリオは人語を解せる程の知能がある。

それにリオルやルカリオ特有の波動能力を付け加えれば……理論上は、確かに黙っていてもお主の考えがルカリオに伝わるじゃろうて。

普通のルカリオなら無理じゃろうから、波動を感じる能力が高いんじゃないが……普通そんなもん分からんじゃろうに」

自身の推測を述べ、アデクはシュバルツに問いかける。

早々答えてくれるとはアデクも思っていないが、それでも一人のトレーナーとして問わずにはいらなかったのだ。

そんなアデクの視線を浴び続けたシュバルツは、

「こいつは……」

「ん？」

やや気後れしながらもアデクに向けて口を開いた。

可能ならば、この話はしたくなかったとしても言うかのように、その口調は重い。

「……俺のルカリオは、俺とモノズに出会うまでずっと一人でした。洞窟内の仲間や親に助けてもらえず、ずっと一人で生き延びてきた。」

……その所為なんでしょうね、他の個体の倍以上、周囲の生物に対する波動に敏感になっていた」

それは、生き残るためであり、助けてもらったためでもあった。

微かでも波動を感じ取れたのなら、それが敵か味方なのかを見極め、行動しなければならなかった。

だから、より広く、より詳細に相手の感情を読み取ってきたのだ。そんな生きるための力を、今は自身のトレーナーのために使っている。

「……成程の」

やや沈痛な顔をしたアデクが手の中に新しいボールを先程よりも強く握り込む。

そんなチャンピオンの姿を見てとったシュバルツは、

「……だから、俺のルカリオは　強いですよ？」

このバトルが始まってから初めて表情を崩した。

先程までの深刻な表情から一転、不敵な笑みへと。目の前にある挑戦的な子供の表情を見たアデクは、

「ふん、それを破ってこそそのチャンピオンじゃ」

沈痛な表情を消し去り、それ以上に豪快な、大胆不敵な笑みをその顔に浮かべ、

「頼むぞ、ウルガモス」

新たなポケモンを内部に収めたボールをフィールド内へと放りこんだ。

16 匹目 ルカリオ 力試し? (後書き)

ルカリオのネタバレ回でした。

これで全部説明できるとは思っていないませんが、一先ずの区切りにはなっただと思っています。

17 匹目 ウルガモス 力試し？（前書き）

今更ながら、ネギま！とハヤテの映画を見てきました。

相変わらずのご都合主義だ〜と思いましたが、特典の本編未登場の

「仮契約カード」イラストは良いものです。

個人的にはアキラが良いな〜と思ってるだけに、若干ガツカリ。

いや、あれはあれで良いんですけどね…

ポケモンが全く関係ない（オイ

17匹目 ウルガモス 力試し？

「頼むぞ、ウルガモス」

そう言つて、アデクはモンスターボールを投げ込む。

ニックネームなど付ける人物ではないから、彼の宣言通りボールから飛び出してくるのはウルガモスなのだろう。

シュバルツもアデクの手持ちにウルガモスがいることは知っていたし、今回のバトルで出てこないと思つていたわけではないが・・・

マズイ！！

まさか二匹目に出してくると思つてもいなかった。

あるとしたら、先発か後詰。

自分の手持ちをある程度知つているアデクであればそうすると思つていたのだが、チャンピオンはシュバルツの考え通りには動かなかった。

見事に裏の裏を搔かれた、訳でもなし。

ここまでずっとアデクさんは正攻法で来てるんだよね……俺が変に考え過ぎてるだけなのか？

シュバルツが考えている通り、ここまでずっとアデクは正攻法で来ている。

今のところクリムガンしか使っていないにしろ、アデクの取つている手法は教科書通りと言つても良いぐらいに綺麗なものだ。

対照的にシュバルツが取つている手法は どちらかと言えば 邪道である。

普通のトレーナーであれば、雨パでもない限り、初手から【あまご

い】などしない。

しかもその【あまごい】の狙いが自分たちの能力向上ではなく、相手の動きを制限するためという、ある種その場凌ぎの手法なのだ。更には、ルカリオの使い方も。

クリムガンに【れいとうビーム】とか【りゅうのはどう】を使っただのが、まあ、正攻法か？

自分の方が明らかに実力は下なのだし、邪道で行くことに抵抗がある訳ではないが……

やはり、勝てるのならば綺麗に勝ちたいとシュバルツも思う。

閑話休題

とにかく、“俺の”ルカリオじゃこの程度の【めいそう】でアデクさんのウルガモスの相手は厳しい。

かといって、モノズに換えたところで【むしのさざめき】を喰らったら一発で落ちるだろうし……

せめて物理の強い手持ちがいれば変わったのに、とシュバルツは思うが今更そんなことを悔んでいても始らない。

既に、賽、いや、ボールは投げられているのだから。

シュバルツが考えているうちに、フィールド上には、

『ウ、ルーツ……！』

ボールが開き、ウルガモスが姿を現していた。

その人間の大人の背丈ほどもある黒と水色の体躯の上には、青色の目を光らせた黒い頭を置き、赤い二本の角を生やしている。

白い毛は後頭部から顔を避け、胸元？を通り、腰？の辺りまでを覆

い尽くしており、その毛の間から4本の手？足？が覗いていた。そして、このポケモン最大の特徴と言えるだろう、背中から生えている6枚の羽根。

木の葉にも似たその羽は、上下4枚は体に近い部分は太陽の様な輝きのオレンジで中央から先は燃えるような赤に彩られ、二枚の羽根に挟まれた真ん中の羽根は太陽の如きオレンジ色に染まっていた。既にその6枚の羽根からは火の粉の鱗粉が舞い始めている。

雨が降っている中でもその姿は輝き、人々の目に文字通り“焼き付いて”いた。

かつて、火山灰で地上が真っ暗になった時に太陽の代わりになったとも言われているウルガモスの炎。

その炎を引き起こす原因とされる鱗粉が、雨の中消えることなく輝きながら舞い踊り始める。

そんな煌びやかでありながら圧倒的の脅威を見せつける相手のポケモンの姿を見て、シュバルツは更に警戒を強める。

既に臨戦態勢か……

クリムガンが倒されたことでやる気バツチリになってるのかよ

もう少し相手のやる気が低ければ少しは楽になったのだが……そう思い、軽く溜息。

因みに、ウルガモスの種族値は、物理が低く特殊が高い。

素早さもそこそこ。

そんな中で一番の脅威はと言うと、特攻135という高火力から繰り出される炎技であろう。

伝説が本当かどうか知らないが、高威力であることについては今更疑う余地もない。

鋼タイプもあるルカリオではまず耐えられないであろう相手の力。

シュバルツだって、正直言って相手にしないで良いのなら、やりた

くなかった。

相手にするのなら、せめて特防高めの水タイプか、物理攻撃高めの岩タイプの技を持ったポケモンが欲しいけれど……

「やるしかない、か」

今更、こんなところで怯んでいられない。
決意を固め、

いくぞ、ルカリオ!!

リオ!!

声に出さない会話を自身のポケモンと済ませた一人と一匹は、前方で燦々と輝きを放っているたいようポケモンへと勢い良く挑んでいた。

?
?
?
?

向かってくるルカリオを眺めながらも、チャンピオンは自身のポケモンに指示を出す。

「ウルガモス、【ほのおのつづ】」

『モ―!!』

トレーナーからの指示を受け、ウルガモスは即座に技を放つ。
ウルガモスの周囲に漂っていた数多の火の粉がウルガモス自身の羽根に煽られ、ルカリオの周囲に集まり渦を巻き始め、天まで届く巨大な竜巻となり渦の中央にルカリオを封じ込める。
雨の中でも輝きを失せない火の粉とはいえ、視界が悪く見えにくいのも事実。

傍から見れば、突然巨大な炎の渦が湧きあがった様に見えるだろう。突如湧きあがったそれをルカリオは避ける暇もなく呆気無く呑み込まれてしまう。

「い、いつの間に……!？」

離れて見ていたアーティや観客たちには、指示は聞こえていたものの全く発生までの予兆が分からなかった。
そして、

これで決まったか……？

と、周囲の人間が息を呑んで炎の竜巻とウルガモスの姿を見守る中、ジツとアデクは何かを探るかのように炎の竜巻を見つめ続ける。
普通であれば、これで決まりだろう。

炎が直接当たっている訳ではないと言え、周囲で渦巻く高熱の空気は凄まじい勢いでポケモンたちの体力を奪っていくのだから。

だが、それでもアデクは油断しない。

チャンピオンとして負けられないからか、それとも単にトレーナーとしての当然のことなのか分からないが、炎の竜巻と自身のポケモンを見つめ続ける。

そして、

「む!!！」

突如何かに気付いた様な顔になり、急いで指示を出した。

「ウルガモス、【そらをとぶ】」

そして、トレーナーからの指示に従い、ウルガモスが6枚の羽根を羽ばたかせ宙に身をやった瞬間、

ポコッ！！

「ルカ！！」

先程までウルガモスがいた場所の下からルカリオが勢いよく飛び出してくる。

【あなをほる】だ。

【ほのおのうず】に巻き込まれる直前、咄嗟に地面を掘り、相手の技の直撃から逃れていたのだが、

所々に、技を受けた痕があるということは、完全に避けることは無理じゃったか

直撃こそしなかったものの、完璧に避けることも出来なかったためダメージを負ってしまう。

技の威力自体はそこまで高くはないが、アデクのウルガモスが放った【ほのおのうず】だけあり、本来の技の威力を遥かに超えるものだった。

それ故、

「嘘、だろ……？」

ミジュマルが【あまごい】で呼んだ雨雲の一部に穴を開け、雨を止ませてしまっていた。

「どれだけ規格外なのさ……」

アーティや観客たちが呆気にとられる中、

「カーツ！！」

ルカリオが手から【はどうだん】を放ち宙にいるウルガモスに攻撃を当て撃墜しようとするも、

「ウル〜」

ウルガモスは羽根を羽ばたかせて悠々と相手の攻撃を避ける。

そして、羽ばたかせている羽根から火の粉を再びルカリオの周りに振り撒き始め、更には自身の口から炎を吐き、上空からルカリオを追い詰めていく。

「リ、リオ……」

ルカリオもフィールド内を駆け回り、必死にウルガモスの炎から逃れ続け、時折隙を見つけては反撃しているが、攻撃もあまり当たっておらず、そう長くは持たないだろう事が観客やアーティにも分かった。

当然、シュバルツもそんなことは分かっているが……

とにかく、宙にいるウルガモスを落とさなきゃ始まらない。

かといって、攻撃は中々当たらないし……当たってもあまり効

いている様子が見受けられない。

　　だけど近距離に持ちこむとなると、あの火の粉の壁を破らないといけないからモノズじゃキツイ

　　早々良い案が浮かぶ訳でもない。

　　こうなつてくると、自身の手持ちに空を飛ぶことのできるポケモンがいないのが痛手になってくる。
いや、

　　空を飛ぶポケモンになる奴がいないわけじゃないんだが……まだ
早い

　　最悪、モノズをジヘッドから一気にサザンドラに進化させるという
手段が残ってはいる。

　　けれども、こんな腕試しの場面で進化させる様なものではない。
ジム戦や、負けられないリーグ戦等であればまだしも、こんな場面で進化させるなど以ての外だ。

　　そうやってシュバルツが悩んでいるうちに、

　　「そろそろ、限界かの？」

　　ウルガモスが本格的にルカリオを追い詰めに掛かっていた。

　　既に周囲は炎の壁に囲まれ、上空からはウルガモスが火の粉の雨を
絶え間なく降り注いでいる。

　　「次は外さん。」

　　ウルガモス、【ねっぷう】じゃ」

『モー!!』

どれだけ穴を掘ろうが関係ないとばかりに、ルカリオの頭上にいるウルガモスが勢いよく6枚の羽根を飛ばしたかせ、高熱を含んだ風をルカリオに向けて放つ。

いつも通りに逃げようにも、周りが炎の壁じゃ無理か……【まもる】で凌いでくれ、ルカリオ!!

リッ!!

防御態勢を取って必死にウルガモスの攻撃から身を護るルカリオだが、そんなルカリオの様子などお構いなしにウルガモスは飛ばしたき続け、容赦なく高熱の風を送り続ける。

『ルウウ……』

「耐えてくれ、ルカリオツ!!」

懸命に耐え続けるルカリオを信じ、シユバルツも声を掛け続ける。が、そんな彼らを嘲笑うかのようにウルガモスは【ねっぷう】と火の粉を送り続ける。

しかも、周囲の炎の壁がその熱に煽られ、次第に勢いを増してルカリオに近づき、ルカリオの体力を更に減らしにかかる。

そして、遂に、

ドサッ

「ルカリオーツ!!」

ルカリオはその場に倒れ込んでしまった。

それを見ると同時に、

「ウルガモス、止めい」

アデクもウルガモスに攻撃を止めるよう指示を出し、【ねっぷう】も止む。

その光景を見届けた審判が、

？ルカリオ戦闘不能。

シュバルツさん、ポケモンを交代してください？

そう言うと同時にシュバルツはルカリオを急いでボールの中へと戻した。

何故なら、周囲の炎の壁は未だ治まる様子を見せず、戦闘不能になったルカリオから容赦なく体力を削り取っていたからだ。

そのまま放置していれば間違いなく命の危機に陥っていただろう。

お疲れ様、ルカリオ

ボールに収めたルカリオへと労いの言葉を掛け、そつと治療用の棚に収める。

シュバルツにしてもある程度分かっていた結果とはいえ、やはり自分のポケモンが為す術もなく倒されるのは辛い。

自分たちの今迄の努力がまるで意味の無かったことのように思えてきてしまうから。

……今の俺たちじゃ、アデクさんのウルガモスを倒すのは多分無理だろう

父とアデクのバトルを見た時から多少なりとも分かっていた事では

ある。

自身の父であるシャガが、アデクのウルガモスには負けてしまっていたのだから。

今の自分の様に何も出来ずに惨敗、という訳ではなかったにせよ、負けていたのは事実。

まだまだ未熟な自分たちが勝てるとは思えない。けれど、

一矢報いることぐらい、出来るはず！！

このままで終わって良い訳がない。

ミジュマルやルカリオの為にも。

自分自身の為にも。

そして何より、これから闘うことになるモノズの為にも、こんなところで自分が諦めて良いはずがない。

カチャ

腰につけてあるボールを顔の前に持つてきて、未だに炎の燃え盛るフィールドをモノズに見せながら、ボールの中へと話しかける。

「……モノズ、多分今の俺とお前じゃアデクさんのウルガモスには勝てない」

『モノ！？』

いきなり負け宣言をしてくる普段とは様子の違うシュバルツに驚き、彼の言葉を否定するかのようにはモノズは必死に首を横に振る。

その姿は、そんなことはない、自分が勝ってみせる、と言っている様にシュバルツには見えた。

「良いんだよ、別にお前を責めてるわけじゃない。
単に、今はまだ“その時”でもないし、俺がまだまだ未熟なだけ
さ」

モノズの励ましをやりわりと否定し、自身の意見を押し通す。

「けど、多分次にアデクさんと会うのはチャンピオン戦の時だと思
う」

『ノ〜』

何か大きな確信があったわけではないが、ただ純粹にそう思った。
次に会う時はチャンピオンと挑戦者。

今回の時の様に純粹にバトルを楽しむことはきっと出来なくなる。
それは、モノズもなんとなく感じていた。

「長引かせるだけ不利になるんだから、折角だし“あの技”を試し
てみよう。

まだまだ未完成だけど、“あれ”が今の俺たちに来る最強の技
なんだ。

それがどれだけアデクさんたちに通じるのか」

『ズー!!』

故に、自身の、否、自分たちの最強の技がどれだけ通じるかを試す
ことにする。

今の自分とチャンピオンの距離がどれほどのものか見極めるために。
モノズも賛成しているのだし。

モノズとの会話を終え、再びフィールドに視線を向ける。そこには羽根から火の粉を振り撒く、一匹のウルガモスが悠然と宙を舞っていた。

が、今更そんな相手に怯む一人と一匹ではない。覚悟は既に決めたのだ。

「よし、頼んだぞ、モノズ!!」

『モノズ!!』

ボールをフィールドへと投げ込み、モノズが姿を現す。

その姿を観客たちは物珍しげ　色違いということもあり　に、アーティは若干の期待を込め、アデクは嬉しそうに、それぞれ見護る。

そんな自分たちを見やる視線を受けながら、全く怯むことなく、

「モノズ、【りゅうせいぐん】!!」

『モノズ!!』

シユバルツとモノズは、ウルガモスに向けて技を放った。

「……え?」

初めて聞く技の名前に戸惑う観客とアーティ。

それもその筈。

ドラゴンポケモン自体が珍しい世の中、更にその中でも限られた人しかポケモンに教えられない技である。

知っているとすればそれはかなりの通であり、一般市民が知っている様な技ではない。

だが、アデクはと言うと、

「ほう、そう来たか」

当然知っていた。

知っており、シュバルツの狙いも看過した上で楽しそうに顔に笑みを浮かべる。

「良いじゃろう、受けてたつわい。」

ウルガモス、技が来たと同時に、技に向けて【オーバーヒート】
「！！」

『ウルー！！』

指示を受けたウルガモスと、指示を出したアデクは揃って視線を上空に向ける。

つられて観客とアーティたちも視線を上空に向ける。
すると、

「はぁ！？」

アーティの目には信じられない光景が映っていた。

ミジュマルが呼んだ雨雲を突き破り、幾つもの隕石が光の筋を作りながらこのバトル場目掛けて降り注いで来ているのだ。

そして、落下先にいるのは自分達ではなく、ウルガモス。

ということとは、これが【りゅうせいぐん】って技なのか！？

驚くアーティたちを余所にウルガモスは迎撃の態勢に入る。

既に全身から火の粉が舞い上がり、爆発前の予兆の様な静かな空気を周囲に漂わせている。
そして、

「今じゃー!!」

アデクの指示と同時にその火の粉を勢いよく燃え上がらせ、自分に向かってくる隕石へと向ける。
そうして、大火炎と数多の隕石が衝突して……

?ウルガモス、モノズ戦闘不能。

よってこの勝負、アデクさんの勝利?

勝敗が決まることになった。

【おまけ】

「ねえ、シロナはどうしてジム戦なんてしてるの?」

「え?」

どうしたの、唐突に」

ゴーストに引っ張られて戻ってきたコトブキシティで一泊することにしたシロナとメリッサは夕食を済ませ与えられた部屋に戻っていた。

ベッドの隅で未だにいじけるシロナを見ながら、メリッサは唐突に

疑問を覚え、折角なので聞いてみることにしたのだ。

「いやネ、シロナは学者になりたいんでシヨ？」

「うん、そつだよ」

今更何を分かり切ったことを聞くのか。

そう思い、メリッサの方に振り返りつつ首を傾げるシロナ。

未だに背に影を背負ってはいるものの、話を振られたのでやや回復しているようだ。

「じゃア、なんで各地を回ってジム戦なんてしてるのかナッテ。

別ニ、学者になりたいんならジム戦なんてしないでいいじゃない

ノ

「あゝ」

そう言えば言っていなかったか、と思い出し、話すかどうかするかシロナは迷う。

別に昔のことだから話しても構わないと言えば構わないんだけど……

なんか、喋ったら絶対弄られる気がする

既に色々ネタを握られている身としては、これ以上教えたくなくなったりするのだ。

まあ、今更増えたところで変わらない気もするけど……

具体的には、ヨスガのふれあい広場で見せた若干だらしない表情とか、散々呟いてきた寝言とか、涎の垂れた寝起きの顔とか。

それでも、

なんだか、あんまり話したくないな

あの思い出を誰かに話すのは憚られた。

あの時の約束があるから今のトレーナーとしての自分がいるのだし、綺麗なまま自分と彼の中に残しておきたい。きつと、彼もそうであると信じているから。だから、

「まあ、ちよつと色々あつてね」

誤魔化しておく。

自分でも何故そんな受け答えをしているのか分からないけれど。

「エー、良いじゃないのサ。

話してくれてモ」

当然メリッサは納得せず、不満を口にするが、

「良いでしょ別に、話さなくても」

自分としても答えるつもりはない。

色々勝手な推測を述べてくる旅の仲間を受け流しながら、過去の記憶に思いを馳せる。

旅に出てから手紙出してないけど、シュバルツくん、元気かな…
…？

いつか、再び彼の隣に自分たちが立っている姿を夢想しながら、

「モノズ？も元気だと良いね」

『ガバ！！』

ガバイトと一緒に未来への期待に胸を膨らませていた。

「……怪しい」

『ム』

その時のシロナとガバイトは、旅の同伴者が猜疑の視線を向けてきていることなど全く気付いていなかった。

17 匹目 ウルガモス 力試し？（後書き）

今回の【おまけ】はやや甘め。

現時点でのシロナのシュバルツに対する意識ですね。

まだまだ異性として見てるわけではないですが、最初が最初だっただけに、他の友人とかよりはやはり別枠としての扱いになってるわけ…さあ、ここからどうしようか

18 匹目 ガントル VS ヒウンジム（前書き）

簡単にプロットを整理してみたところ、シュバルツとかシロナの旅仲間の最終パーティーがエライことになりました。

シロナとかはチャンピオンだから良いんですけど、アーティとかメリッサなんて序盤、中盤のジムリーダーのはずなのに、下手すりゃ四天王になれるメンバーに……

原作主人公があの時点で勝てるわけないわ！！

……というか、プラズマ団ヒウンジムの前に拠点があるけど、即効潰されるんじゃない……

18匹目 ガントル VS ヒウンジム

アデクとバトルをした日の翌日。

シュバルツは普段通りのテンションで、アーティは若干シュバルツが引くぐらい普段とは比べ物にならないほどの上機嫌ぶり、ポケモンセンターからヒウンジムに向かって歩いていて、

午前の中途半端な時間ということもあり、周囲を歩く人の数も普段より少ない。

といっても、イッシュの大都会だけあり、慣れていないシュバルツにとっては相変わらず人通りが多いことに変わりはない。

「ふ、ふふ……」

が、アーティはそんな周囲の人通りなどまるで気にする様子もなく、顔を綻ばせながら足を動かしている。

下手すれば今この場で歌い始めるんじゃないか、とシュバルツが不安を覚えるほど、アーティの顔はだらしなく緩んでいた。

「…なあ、アーティ……」

旅の同行者としては、そんな仲間のことを放っておくわけにもいかず渋々声を掛ける。

「なんだい、シュバルツ!？」

そんなシュバルツからの呼びかけにアーティは非常ににこやかに返事を返してきた。

その表情にまた圧されながらも、

「アデクさんに“あれ”を貰ったから嬉しい、っていうのは分かるけど…もう少し、落ち着いたらどうだ…？」

別に落ち込めというつもりはないが、こんな天下の往来でハイテンションすぎる少年と歩かなければいけない自分の身も考えて欲しい、とシュバルツは思う。

「僕は十分落ち着いてるよ」

「いや、何かやたらと周囲からの視線を感じるんだが…お前がそんな状態になってるからじゃないのかよ」

まあ、実際の所シュバルツが危惧している様な問題は起きている訳ではない。

アーティのテンションが若干あれなのは目立つ原因の一つかもしれないが、所詮は10歳の男子。

まだまだやんちゃ盛りだし、周囲の大人たちがそんな子供に奇異の視線を向けることも殆どないだろう。

勿論、あまりに迷惑になるようであれば問題だが、別に周囲に迷惑を掛けている訳でもないのだから、特別目立つわけでもない。寧ろ、今目立っているのは、

「ねえねえ、あの子でしょ…？」

「ああ、昨日チャンピオンと闘って2体も倒したって言う…」

「マジかよ!？」

くそー、俺も見に行きや良かった!！」

シュバルツの方だ。

すれ違う人の殆どが一度は振り返り、シュバルツの髪に目をやり、それから興奮した様子で話し始める。

昨日、バトル場に来ていた観客の数を思い返してみれば、一日も経てば街中に知れ渡っていても特別不思議ではない。

観客にシュバルツの顔がはつきりと見えていたわけではないが、10歳程度の少年であるということと、その特徴的な髪の色は分かっていた。

プラチナブロンドに似た髪の色の人間がヒウンにいないわけではないが、少年となるとあまり見かけない。

故に、その特徴的な髪の色が目印となっていたのだが……そんなものシュバルツ当人が知る訳もなし。

「まあ、良いじゃん。」

それより、これからジム戦なんだから一々周囲のことなんて気にしない方が良いでしょう。」

「…むう」

まさか今の状態のアーティに諭されるとはシュバルツも思っていなかったのだ、若干口を尖らせ黙り込む。

そう、昨日アデクとバトルをしたばかりだというのに、今日これからシュバルツはヒウンジムに挑もうとしていた。

普段だったら、「もう少し休もう」と言ってくるアーティもどんなジムか知ってるということもあって、特別止めることもなくというか、浮かれ過ぎてて気にしていなかったということもあるシュバルツの意見に賛成していた。

アーティの話が本当なら岩タイプなんだよな……ミジュマルがいるし、いざとなったらルカリオがいる。

1vs1でもない限りそんなに不安になる必要はない。

……ただ…なあ…

先日仲間に加わった一匹の様子を思い出して軽く溜息。

浮かれまくっているアーティとは逆に、ミジユマルはかなり落ち込んでいた。

シュバルツとしては別に気にしていないし、寧ろ先日自分の手持ちに加わったばかりだというのにあれだけチャンピオンのクリームガンと闘っていたのだから喜んでいたりする。

が、ミジユマル本人？は自分の後に出てきたルカリオとモノズがそれぞれ一体ずつ倒した事で自分がシュバルツの役に立っていないかっ
たと思ってしまうたのか、かなりへこんでいた。

アデクさんも褒めてくれてたし、別に気にしなくても良いと思う
んだけど

昨日バトルが終わってからのことを思い出しながら、シュバルツは
ジムに向けて進める足を速めることにした。

?
?
?
?

「いや、驚いたぞ。

まさか、ウルガモスが倒されるとはのお」

ポケモンセンターにポケモンを預けながらアデクがシュバルツに話
しかける。

自身の切り札が倒されたというのに、アデクは全く悔しそうにせず、寧ろ子供の成長を喜ぶ父親のような笑みを浮かべていた。

「倒せてませんよ、結局相討ちでしたから」

一方のシュバルツは少々残念そうに、しかし予想以上の結果に満足しており、割と嬉しそうだ。

父親が倒せなかった相手を相討ちとはいえ、仕留められたのだから純粹に喜んで良い様なものだが…

「相討ちとはいえ、儂のウルガモスを倒した事実は事実じゃ。

もつと喜ばんかい」

豪快に笑いながらシュバルツの背中を叩く現チャンピオン。

そこにあるのは自身の切り札の一匹が倒された悔しさではなく、将来が楽しみな若者を思っただけの笑みが浮かんでいる。

叩きながら、

「……しっかし、いくら【りゅうせいぐん】とはいえウルガモスが倒される程の威力はないと思うんじゃが…?」

首を傾げつつシュバルツにアデクは問いかける。

シュバルツの成長は確かにアデクにとっても嬉しい事だったのだが、あの【りゅうせいぐん】の威力は不可解だった。

サザンドラが放ったのならまだしも、いくら鍛えられているからといってモノズが出せる威力ではないはずなのだ。

【ふるいたてる】などの能力上昇技を積んでいた訳でもない。

「それは、ドラゴンジュエルを念のため持たせておいたので」

頭を捻るアデクにシュバルツはそう答え、

「ふむ、確かに、【りゅうせいぐん】に組み合わせればそれは凄まじい威力にはなるじゃろうな」

アデクもそのシュバルツの返事に納得したのか、頭を大きく縦に振る。

一応ゲーム内での【りゅうせいぐん】の威力は140。

140 × 1.5 = 210

と、単純計算ではなる。

本来であれば、タイプ一致やレベル補正の問題など様々あるが、タイプはモノズもウルガモスも技と一致しており、レベルについてはこの世界ではあまり大きな影響は及ぼしていないので割愛させてもらおう。

さらに、ドラゴンタイプの技である【りゅうせいぐん】と、炎タイプの技である【オーバーヒート】が衝突しあったため、ドラゴンタイプに対して炎タイプは「こうかはいまひとつ」なので、半減とはいかないものの【りゅうせいぐん】の方が威力は上になる。

だが、能力値としては明らかにウルガモスの方が上なので、殆ど互角となり、結果双方に大威力の衝撃が届いてしまい、相討ちとなったのだ。

「まあ、俺も流石にウルガモスが倒れることになるとは思いませんでしたけど…」

シュバルツ自身も、よくて瀕死直前、実力差がある分、普通にあまり効かないんじゃないかと思っただけに、相討ちとはいえウルガモスを仕留められたのは、普段からの鍛錬の成果が出てるという

ことも分かり、素直に嬉しかったりする。

「ルカリオも以前会った時よりも大分強くなつとるし、ミジュマルは数日前に加わったばかりなんじゃろ？」

それなら、十二分過ぎるほど強いわい」

「ありがとうございます」

自身の育成法をチャンピオンに褒められ、シュバルツ自身嬉しく思う。

「ただのお……」

喜んでいるシュバルツとは逆に、アデクは顔を真面目なものにしながら、言葉を続ける。

「ウルガモスとルカリオの時も思ったんじゃが、空を飛べる、或いは宙に浮けるポケモンが一匹はいた方が良い。

分かつとると思うが、二元的な闘いよりも、三元的な闘いの方が手も増えるし、回避し易くなる」

「ええ、俺もモノズ（あいつ）がサザンドラになるまでには一匹ぐらい仲間になりたいとは思ってるんですけど……」

「いや、分かつとるならええ。

ポケモンとの出会いは無理矢理では始まらない。

出会った時に考えれば良いことじゃ」

「そう、ですな」

シュバルツも分かっただけで、これは仕方ない。最悪、先日捕まえたばかりのママパトやコロモリを使っても良いのだけれど、それはそれで何か違う気がする。自身が今後信賴していきたくと思う仲間ならば、当然、何かしら感じ入るものが欲しいのだ。

と、そんな風にシュバルツとアデクが先程のバトルについて語り合っている横で、

「う、うつつ」

アーティは落ち込んでいた。

時折、シュバルツやアデクが声を掛けるのだが、「ああ」「やら、ええ」といった生返事しか返ってこない。

なんとなくの原因は二人とも分かっているが、自分たちが慰められる訳が無い。

いや、アデクなら可能だろうが、シュバルツにはまず無理だ。

何故なら、現在アーティが落ち込んでいる原因がシュバルツにあるからだったりする。

先程、シュバルツがバトルを終えた後、時間もあつたのでシュバルツと同じルールでアーティもアデクとバトルさせてもらったのだ。

結果、惨敗

まあ、相手が相手　アデクが繰り出してきたのはバツフロンだったということもあるが、それ以上に同い年のシュバルツが二匹も倒したのに、自分は一匹も倒せなかったことが悔しかったのだ。モノズヤルカリオの様に強いわけではないが、ミジユマルとツタージャは同じ日にもらって育て始めたのだから、時間の経過は同じは

ず。

なのに、これほどまでに差が出るのがアーティにはショックで。元々、自身は芸術家志望で、トレーナーとして頑張ってきたわけではないことは自分自身が一番よく分かっているけれど、せめて、一匹は倒したかった。

「…………ごめんな、みんな」

何より、自分の為に頑張ってくれたパートナーたちに対して、申し訳なく思っていたのだ。

「…………で、どうしましょう…?」

若干額に汗を浮かべながらアデクにシュバルツが訊ねる。まさか、バトルに負けたぐらいでここまで落ち込むとはシュバルツも思っていなかったのだ。

「こういう時は、一旦心の整理が出来るまでそっとしておいてやるのが良いんじゃないが…………」

一方の訊ねられたアデクは、顎を撫でつつまだまだ子供のシュバルツに答えを返す。

チャンピオンと言うだけあって、これまで数多のトレーナーと闘い、負かしてきたアデクはこういった症状の時の対応もよく知っていた。だが、こうなってしまった相手にはあまり理屈が通用しないし、原因となってしまうた人物たちが声を掛けても逆効果だろう。となるよ、

「…なあ、シュバルツよ」

「はい、なんですか？」

「アーティは虫ポケモンが好きなんじゃったな？」

「え、ええ」

「ふむ…」

その人物が好きなき事をやらせたり、与えるにかぎる。

「良いか、明日の朝まではそっとおいてやるんじゃ。

それで、朝起きたらこいつを渡してやると良い」

言って、懐から一つのボールをアデクは取り出す。

「……中身はなんですか？」

若干不安そうにボールを見つめるシュバルツに、

「卵じゃよ。」

とっておきの虫ポケモン、メラルバの、な」

非常に楽しそうな笑みでアデクは返事を返すのだった。

?
?
?
?
?

翌日、先日アデクと別れたシュバルツは、朝起きても未だに落ち込んでいた。アーティにアデクから渡されていたボールを渡したのだ。最初は訳が分からず、落ち込んでいたアーティも、シュバルツがボールの中身を告げると見る見る元気を取り戻し、

「マ、ジ、で!?!」

「あ、ああ。」

アデクさんはそう言ってたぞ…?」

シュバルツも引くぐらいのテンションに回復したのだ。ただ、

「シュバルツ、今度から君の特訓に僕らも混ぜてくれないかい?」

昨日のアデクとのバトルの結果に思うところがあったのか、シュバルツにそう頼んできた。

「…別に構わないが…良いのか?」

シュバルツとしても、アデクとのバトルで思うところはあったし、普段からのバトルの相手にアーティがなってくれるというのであれば非常に助かるが、芸術家志望のアーティがバトルに取り組み始めるというのは若干不思議ではあった。

「うん。」

僕もあんなまま終わりたいくないんだ」

「そっか」

とはいえ、こう言われれば流石に気付くし、反対するつもりはない。強くなりたいと思うのは自分も全く同じなのだから。

「よし、じゃあ次からは毎回誘うからな!」

「うん、よろしくね!」

改めて考えてみると、こうして同年代の友人とバトルのトレーニングに精を出すのはシュバルツも初めてだった。

大抵相手は自分よりも年上の人間だったし、同年代の友人たちはまだポケモンを持っていない子が多かったということもある。

その点から考えてみると、アーティはそれなりにトレーナー歴もあるため、絶好の相手となるだろう。

次のトレーニングに今迄感じたことのない期待を覚えながら、シュバルツはヒウンジムへと足を急がせた。

・

・

・

「……か」

「……」

先日訳の分からない二人組に襲われた通りを早足で進み、ジムにやってくる。シュバルツたちは扉を開き、ジムへと入る。

受付を済ませ、ジム戦を申し込んだシュバルツはジム内にあるバトル場へ案内され、ジム戦をするつもりのないアーティは観客席へと移動した。

そういえば、こうして普通にジム戦をするのも初めてかもしれないな

いな…

軽く今迄の自身の経験に嘆息しながらルールを思い出し、戦略を練る。

ルールは1vs1で使用ポケモンも一体のみ。

どちらかが戦闘不能になれば即終了。

持物可、アイテム使用不可。

まあ、1vs1以外は普通か

アーティはほぼ全くと言って良い程今回はジム戦に関して何も言っていないかったが…

安全に勝ちを取りに行くならルカリオなんだが…

シュバルツの頭の中には、暗い顔で昨日から殆ど声を発していないミジュマルの姿が思い浮かんでいた。

そう言えば、あいつのトレーナー戦の初陣って昨日のが初めてだったか

通りで昨日やたらとやる気があって、負けたらすぐく落ち込むわけだ。

悪いことしたな……

シュバルツにも罪悪感はある。

それに、自分の為に闘ってくれたポケモンたちへの信頼や愛情も。だから、

「ミジユマル」

『ミジユ…?』

「今日はお前しか使わないから。
好きなだけ暴れてくれ」

『ジユマツ!?!?』

ボールの中にいる自分のポケモンに話しかける。

「お前らも、それで良いよな…?」

『モノ!?!』

『ルカ!?!』

他の二匹にも話しかけると、二匹は力強くミジユマルの方を見ながら頷いた。

二匹の視線に不安の色はない。

あるのは、純粹にミジユマルに向ける応援の視線のみ。

そんな先輩二匹からの視線と掛け声に力を貰ったのか、啞然としていたミジユマルは、

『マルツ!?!?!』

やる気を回復し、大きな声でシュバルツと先輩二匹に返事を返した。

? ? ? ?

Side :アーティ

僕が観客席に移動すると、既にバトル場には二人の人間が向かい合
って立っていた。

一人は当然、挑戦者であるシュバルツ。

もう一人は、このジムの主であるジムリーダー、ブローク。

20代後半ぐらいの青年で、容姿も整っている。

自身満々にシュバルツに向けて何か話しているがかなりどうでも良
い。

僕もこの街出身だから、彼のバトルは何度か見たことあるけれど、
そのどれもが昨日見たシュバルツとアデクさん、或いはシュバルツ
とトゥアラさんの様なバトルには遠く及ばないものだった。

勿論、彼がジムリーダーとして街に貢献していることはよく知って
いるし、そんじょそこの素人トレーナーよりも強いことも知って
いる。

けれど、何と云うかテレビとかの影響を強く受け過ぎている気がし
てならないのだ。

ヒウンのメディアを使って彼が色々とアピールして盛り上げてくれ
ているが、その分バラエティのバトルにもよく出演している。

だから、ここ数年、大技を多用し過ぎていて実際の実力を磨くのが
疎かになっている気がする。

僕も、最近ではテレビぐらいでしか彼のバトルを見ていなかったか
らそう思ってしまうのかもしれないけれど、今喋っているブローク
の様子を見る以上、あまり期待は持てない。

？バトル開始！！？

おっと。

僕が考え事をしているうちに審判がバトル開始を宣言したみたいだ。

シュバルツが繰り出したのはミジユマル。

遠目から見ても先程までのしょぼくれ具合が嘘のようにやる気で満ちている。

そのやる気も空回りしておらず、適度に自身の身体に力を巡らせているようだ。

一方のブロークが繰り出したのはガントル。

イッシュではメジャーな岩タイプのポケモンだ。

攻撃防御共に、物理が高く、特殊が低い。

素早さも低クラス。

見事なまでに岩タイプの特徴を踏襲していると言っても良いだろう。

「ガントル、【ストーンエッジ】！！」

登場して早々に、相手の様子など観察もせずブロークは自身のポケモンに指示を出す。

トレーナーの指示に従い、ガントルはミジユマルに向けてとがった岩を勢いよく放つ。

僕と同じように観客席から見護っているジムトレーナーたち 何故か女性が多い は歓声を上げるが、そんな歓声など気にもせず、シュバルツは指示を出す。

「ミジユマル、【みきり】で避ける」

『ジユマー！！』

自身に当たりそうな岩の間を器用に潜り抜け、ミジュマルは攻撃を避けていく。

潜り抜けながら【きあいだめ】をしている辺り用意周到だ。

とはいえ、ガントルの特性『がんじょう』は、相手の体力が満タンである以上一撃では落ちないもの。

相手を“どく”や“やけど”といった状態異常にしたり、連続技を放てばいいことではあるけれど……【きあいだめ】？
急所に当たりやすくはなるだろうけど……

そんな風に考えていると、ミジュマルは全ての岩を避け切り、更にガントルへと近づいていた。

素早さの種族値はミジュマルの方が倍近くあるので、昨日のクリムガンとの一戦の様な闘いとは立場が逆になる。

…まあ、ガントルには【アクアジェット】みたいな技はないはずだが。

【ロックカット】もやらないだろうしな

そうこうしているうちに、岩を避け切り近づいてくるミジュマルに何か感じたのか、ブロークは焦る様な表情で指示を出そうとするが、

「ミジュマル、【みずのはびつ】」

『……！』

それより速くミジュマルの放った水流がガントルに直撃する。

「ガントル……！」

『ガ、ガガガガ…』

しかも、運良く相手は“こんらん”に。ブロークが指示を出しても、届いていないのか、周囲に体をぶつけて回るばかり。

「運が良かったね、シュバルツ…」

まあ、運も実力のうちと言っけねど。

そして、“こんらん”している相手にバトルで情けを掛けるほどシュバルツも甘くはない。

「ミジユマル、【ねっとつ】」

『ミジユ〜!!』

熱く煮えたぎった熱湯を相手に浴びせかける。

技の都合上、長時間使えない技だし、相手が岩タイプと言うこともあり、若干“やけど”にはなりにくいだが、それでも十分威力の高い技である。

熱湯を浴びせられたガントルは、混乱しながら、熱さに悶え、結果、バタッ

その場に力尽きた。

「ガントルー!!」

?ガントル戦闘不能。

よって、挑戦者シュバルツの勝利！！？

ふう、思った以上に早く終わったかな。

実際5分も掛かっていないだろう。

ただ、予想通りの結果に少しばかり複雑だ。

こんな人間がジムリーダーで良いのかこの街は……？

たしかに、街の人間からは人気かもしれないけれど、肝心の実力がこんなものではないはず。

せめて、アロエ姉さんぐらい強くないと……よし、決めた。

僕が頑張つて強くなつて、この街のジムリーダーになつてやる！！
アデクさんに勝てるほどとは言わないけど、せめてシュバルツと肩を並べて歩けるぐらい強くなりたい。

そう、バトル場を見ながら僕は改めて決心した。

光に包まれミジュマルからフタチマルへと進化し、喜んでいるシュバルツの姿に、いつか追いついてやると人知れず思いながら。

18 匹目 ガントル VS ヒウンジム (後書き)

前回まで長々とアデク戦をやっていたので、ヒウンジム戦はサッサと終わらせました。

まあ、8人もいれば1人ぐらい変な奴もいるって。

19 匹目 イシズマイ 戦士の休息（前書き）

秋の新作アニメが色々始まっていますね。

個人的には Fate / Zero が最高でした。

絵も綺麗でしたし、豪華な声優陣、そして何より初回からのあの鬱
っぷり。

原作知ってますから結果も大体知ってますけど、それでも期待せざるを得ません。

……ただ、初見の方にはほとんど分からないだろうな、と思う。

19 匹目 イシズマイ 戦士の休息

ビュウウウウー……

風が吹き、砂が舞う。

ヒウンで買った砂漠地帯用のコートで身を護り、コートに付いていたフードを被り、飛ばされないよう必死に抑えながら進む。

顔にはゴーグルを装着し、出来るだけその部分以外、顔は出さないようにしながら突き進む。

「……………」

「……………」

ヒウンシティとライモンシティを結ぶ陸路である4番道路を突き進むシュバルツとアーティ。

ヒウンのゲートを抜け、砂漠地帯に入ってからというものの互いに一言も発していない。

ポケモンたちも安全地帯であるボールの中へ。

唯一、

「……………リ……………」

格闘・鋼タイプであるルカリオが二人に寄り添うように歩いていた。ルカリオならば波動の力があるので、シュバルツとアーティが逸れそうになった場合は急いでシュバルツに知らせるようになっていた。また、

ルカリオ、【はどうだん】

ルカ！！

こんな天候でも野生のポケモンは出てくるので、まだ捕まえていないポケモンがいたらシュバルツは捕獲作業に移る。

幸い、ルカリオには声を発さず指示を出すことが出来たし、ルカリオ自身砂嵐の影響をほとんど受けないポケモンだったので、全ての作業を安心して任せることが出来た。

そして、捕獲作業の時は、

ギユツ！！

アーティも先に進むわけにはいけないので、シュバルツのコートの裾を握り締め、逸れない様にしてジツと待つことになる。

話して時間を潰そうにも、口を開けば砂が入ってくるし、ポケモンたちと遊ぼうにも、ボールから出す訳にもいかない。

岩・地面・鋼や、『すながくれ』を持っているポケモンで有れば大丈夫なのだが、幸か不幸かアーティの手持ちにそのタイプのポケモンはいなかった。

一度、イシズマイを吹き荒れる砂の中で見つけた時には、非常に困った。

ヤグルマの森の時の様に騒げば砂が服の中に入ってくるし、捕まえるためにポケモンを出せば彼らが傷付く。

だから、

ああ、せ、折角のイシズマイ……！！

その場で暫く唸るしか、アーティには方法がなかった。

・
・

「ぷはあっ!!」

「ふへえ〜」

「ル、カ〜」

砂塵舞う4番道路を抜け、無事ライモンシティのゲートに到着したシユバルツたちは、コートを脱ぎ捨て、勢い良く息を吐き出し、深く、深く、思いつきり吸い込んだ。周囲には自分たちと同じように、深い息を吐いている人がちらほら見受けられる。

「お疲れ様、ルカリオ。」

戻ってゆっくり休んでくれ」

「オ!!」

シユバルツは、4番道路を移動する間、ずっと自分たちの傍で周囲を警戒し続けてくれたルカリオに労いの言葉を掛け、ボールに戻す。風が弱く、天気も良い日であればここまで苦勞することもなかったのだろうが、残念なことに今日は風が滅法強く、天候が非常に悪かった。

シユバルツもアーティも、余裕があればリゾートデザートの方にまで足を伸ばして、古代の城の見学などを行ってみたかったのだが、天候が天候なので残念ながら却下したのだ。

「ああ〜、イシズマイ〜」

「また、いつか天気の良い日にくりやいいだろ。
それか、砂嵐でも平気なポケモンを持ってから来るとか……」

「うん、分かってるけど、ね……」

未だにイシズマイを捕獲できなかったことを悔んでいるアーティを
近くのベンチに放っておき、シユバルツはボールから出したモノズ
と一緒に電光掲示板近くのイッシュ地方の地図に目をやる。

「ライモンシティ、か」

『ノ』

ここまでではほぼ一本道だったが、ライモンシティからは道が二つに
分かれる。

16番道路からブラックシティやホワイトフォレストを経由してソ
ウリュウシティに向かう東側の道か、5番道路からホドモエシティ
やネジ山を経由してソウリュウシティに向かう西側の道か、である。

「まあ、ジムがある方から行くから西側になるだろうけどさ……」

若干、東側の道にも興味はある。

迷いの森で珍しいポケモンに会えるって聞いてたから期待してた
んだが……

が、そつちの方向に向かうとジム戦をするためにかなり遠回りしな
ければならないのだが……それは流石に面倒くさい。

別に、行ってからライモンシティに戻ってくればいい話か

珍しいポケモンなら会える可能性は低いだろうし、会えたら幸運、ぐらいに考えておけばいい、とシュバルツは思った。

特に急ぐ旅でもないし、ライモンジムに挑む前の特訓のために寄るのでもいい。

5番道路は、イッシュの流通の拠点であるホドモエから伸びる道路であるため、舗装されていて人の通行が多いから特訓には向かないし、街中で特訓など出来るわけではない。

ゲーム内でライモンシティにある“バトルサブウェイ”もまだ出ておらず、ポケモンバトルをするのならそれこそジムやバトル場にも行くしかないのだ。

「よし」

一先ず今後の方針を簡単に決めたシュバルツは、ベンチに座っているアーティの所へと戻って行った。

? ? ? ?

ゲートを抜け、シュバルツとアーティは無事、ライモンシティに到着した。

噴水が両脇に並んだ通りを抜け、水に囲まれたライモンシティの中心部までやって来ると、

「お〜」

『ノ』

「うわ〜」

『クル〜』

思わず二人が呆気に取られるほどの光景が目飛び込んできた。

ヒウンの様な高層建築はほとんど見られないが、街全体に鮮やかな彩色の街灯や飾りが取り付けられ、お祭りではないかと思える程。

シユバルツたちから見て右手　ライモンシティの東　には遊園地が見受けられ、巨大な観覧車が今もゆっくりと動いているのが見て取れる。

正面から左手に掛けては、居住区やポケモンセンターなど生活の拠点となる建物が多く見受けられ、街の奥の方からは、悲鳴とも歓声とも取れぬ爆音が聞こえてきていた。

また、ヒウンも大概人の流れが多かったが、ライモンシティもそれなりに人の流れは激しかった。

しかも、ヒウン以上に抑えきれない活気が誰からも感じられる。それもその筈、イツシュ地方の物流の拠点であるホドモエシティが対岸に存在し、尚且つライモンシティの場所もイツシュ地方の中心部にある。

イツシュの南部から北部に物を運ぶ際には必ずと言って良い程ライモンを経由せねばならず、逆もまた同様。

自然、商業は盛んになり、人の行き来も活発になる。

ヒウンはどちらかと言えば人工的に造り上げられた大都市だが、ライモンは自然と人が集まって出来あがった商人達の都市である。活気に満ち溢れているのは当然だろう。

「とりあえず、ポケモンセンターに行くか」

「そだね」

街の活気にやや押されながらも、二人は入り口付近に置いてある看板に目をやり、足早にその示してある方向へと向かうのだった。

・
・
・

ポケモンセンターに到着した二人は、慣れた手つきで手続きを済ませ、道中捕まえたポケモンを預けると、一目散に割り当てられた部屋に向かい、

シャアアアーーーー

シャワーを浴びる。

砂嵐が吹き荒れる中を進んできたのだ。

コートで身を護っているとはいえ、隙間から砂は入り込んでくる。

その砂が服の隙間や、髪の間に入り込んでしまっていたので、それらから生じる不快感を無くすために、二人とも早々にシャワーを浴びて体を洗うことにしたのだ。

「ふへ〜」

『ル〜』

体に着いた砂埃を綺麗サツパリ洗い流したシユバルツとルカリオは、部屋に置かれているベッドの上でだらけていた。

「あゝ、今日はもうバトルはしないぞ〜」

『リオ〜』

ベッドの上に一人と一匹、並んで寝転がり、力を抜く。
その程良い柔らかさが一人と一匹を程良く包み込み、まさに至福の
時を彼らに与えていた。

洗い終わったバッグや服も干し終わったし、後は夕飯を食べて寝る
だけ。

色々施設があるから、暫くはこの街に留まってポケモンたちの育成
に励んでも良い。

ミュージカルやスポーツ関連の施設、それに遊園地もあるから御楽
には事欠かない。

か
今迄、結構急いで来てたからな……………ここらで一旦休憩としま
す

オ

トレーナーの気だるげな思考を読み取り、ルカリオも賛同する。

ここ数日バトル続きだったので、ここらで骨休み出来るのはポケモ
ンたちにとっても絶好の機会だ。

「ね、シュバルツ。」

時間空いてるんだったら適当に街を回ってみない？」

シャワールームの扉を開き、中から出てきたアーティが髪を拭きな
がら、だらけているシュバルツに話しかける。

「え、今からか…………？」

折角の休息を抜けだすとあって、やや不機嫌気味に返事を返すシュ
バルツ。

隣に寝転んでいるルカリオもアーティを非難するかのよような視線を送る。

「うん、駄目かな……?」

部屋の隅にある据え置き型の鏡の前に陣取り、自身の髪を弄りながらアーティが言う。

シュバルツにしてみれば、ここ数日で見慣れた光景だが、まだ日の高い内に見るのは割と新鮮だったりする。

「今日は勘弁してくれ。」

ポケモンセンター内なら構わないけど、街中を歩く気力は残っていないわ」

『り』

「へえ、君がそこまで疲れるなんてことがあるんだ」

「おい、どういう意味だよ……そりゃ……?」

ベッドに転がっていた身を起こし、咎める視線を向けながら詰問する。

シュバルツだって人間なのだから疲れるのは当たり前だ。

それなのに、そんな言葉を吐かれたとあれば思うところがあるわけ
で……

だが、アーティにしてみたって冗談で言ってることなのでそんなに真面目に考えて言ってる訳でもない。

「いや、大した意味じゃないよ。」

ただ、シュバルツがだらけてるのを見るのが初めてだったから、
つい、ね」

「そう言われてみれば、確かに……」

「でしょ？」

アーティに言われて、そう言えば自分がこれだけ力を抜いたのは旅
に出てから初めてだった、と思い出す。

それなら、アーティの反応も特別不思議な事ではない。

「……まあ、だから今日は簡便な。」

暫くライモンシティの周りでポケモンの育成に励むつもりだから、
その期間内の空いた時間に街は回ればいいだろ？」

「別に、急ぐ旅じゃないから僕は良いけど……期間って、どれぐら
い？」

唐突なシュバルツの提案に若干戸惑いながらも、アーティは賛同の
意を示す。

先日強くなりたいと思いを新たにしたばかりだったので、今回のシ
ュバルツの提案は渡りに船とも言える。

人の出入りが激しいライモンシティであれば、相手となるトレーナ
ーにも事欠かないだろうし、三つの道路に面しているため幾らでも
自己鍛錬の場所は確保できる。

息抜きの為の娯楽施設も遊園地やスポーツ施設、それにミュージカ
ルなどがあり、十分過ぎるほどだ。

強い野生のポケモンを相手取る武者修行の旅などではなく、他人と
のバトルで子供トレーナー自身の技術を磨くという点から考えると、
ライモンシティはかなりの好条件な街と言える。

勿論、一番良いのは、ポケモンリーグ前にあり強いトレーナーたちが無条件で集まるソウリユウシティや、バトルタワーやバトルフロンティア等のバトル専門の施設がある街等であることは言うまでもないが、人の移り変わりが激しい街はそれに続いてトレーナー同士の修行場に適しているのだ。

そんなことをシュバルツが知っているとは考えにくいだが、バトルの事に関してはやたらと鼻が利くのがシュバルツという少年なのだった。

閑話休題

「そうだな……取り合えず、一週間でどれぐらいの変化があるか様子を見てそれから決めるか。」

もし今後の自分のスタイルを今回で決めるんだったら、慎重になるに越した事はないからな」

アーティの尤もな疑問に取り合えずの期限を設け提案する。

一月は長いし、かといって2、3日程度では短すぎる。

それ故の1週間という期間だ。

……まあ、見極めがサツサとできれば早々に方向性を定めたいという期間を設けることができるのだが、それについてはやってみないと分からないから仕方ない。

「りょくかい。」

バトルについては君の方が専門だしどんなプランで行くかは任せるよ」

ここまで3連続でジムリーダーを撃破しているシュバルツの育て方はアーティも信頼しているし、下手に自己流でやるよりはよっぽど

安心できる。

「じゃあ、明日の午前中に基本的な事をやって、午後は休憩兼観光でライモンシティを巡ることにするか」

「おっけ〜。

なら、今日はいいや。

明日か、それ以降にしよう」

特に反対する点もなかったので、アーティはシュバルツの計画に賛成した。

そして、予定が決まったということもあり、割と急いでしていた髪セットのスピードを若干緩め、より丁寧に仕上げることにするのだった。

?
?
?
?
?

【翌日】

朝食を済ませた二人は、当初の予定通り鍛錬をするため16番道路を歩いて迷いの森へと向かっていた。

「最初は力量を図るのも兼ねて普通にバトルするとして……」

「バトルか〜、何だかんだでシュバルツとするのは初めてだね」

少々肩が強張っているアーティ。
最初のトレーニングとあって、緊張してしまっているのだろう。

「ああ、そうだな」

『モノ！！』

会話をしながら、舗装された道を左に折れ、木々の生い茂った森の中へと進んでいく。

道路上は通行人の邪魔だし、少々拓けた場所のある森の中なら丁度良いトレーニング場所になるはずだ。

炎タイプの技を気をつけて使用しなければ火事になる危険があるが、その辺りはなんとかなる。

「ま、気楽に行こうぜ。」

初日から肩肘張られてもこっちが困る」

『モノ！！』

シュバルツがアーティの背中を叩くと、バシッと軽快な音が森の中に響き渡る。

「う、うん。」

「そうだよな」

アーティは、痛み顔を顰めつつも、先程より気が抜けた表情になり、肩からも力が抜ける。

「よし、その意気だ」

旅の相方の変化に笑いながらシュバルツが視線をアーティから森の
広場に向けると、

「……………は……………」

そこには、何故か同じように気持ち良く笑っているシュバルツがも
う一人立っていた。

19 匹目 イシズマイ 戦士の休息（後書き）

砂漠はすっ飛ばし、ライモンシティでしばし育成です。

シユバルツは十分ですが、アーティを育てようかと思ってます。
仮にも、主人公陣営ですからね。

それから、次回か次々回辺りで、新メンバー追加予定。

勿論未来のジムリーダーです。

電気が飛行かはお楽しみに。

20匹目 ジャノビー 特訓(前書き)

新年あけましておめでとございます。
今年もよろしくお願いします。

P.S.:こちらでは凡そ三ヶ月ぶりで、お久しぶりです。
気付けばこちらを投稿し始めて一年経っていたという事実……マジ
で!?

20匹目 ジャノビー 特訓

「…………お、俺…………？」

目の前にいるもう一人のシュバルツをアーティの隣にいるシュバルツが右手で指さすと、全く同じタイミングでもう一人のシュバルツが左手でアーティの隣にいるシュバルツを指さす。まるで鏡合わせの様に動くもう一人のシュバルツ。アーティとその隣にいるシュバルツが大口を開き、驚愕していると、目の前のシュバルツも大口を開き、驚いているように見える姿を取る。

しばらくそのまま双方が固まっていると、真似をするのに飽きたのか、もう一人のシュバルツが勝手に動き始めた。

「……………！？」

『モ！？』

『クル！？』

相手の様子を見ていた二人と二匹は我に返り、揃って警戒態勢に入る。

モノズは唸り声を上げ、クルマユは自身を覆う葉に力を込める。

だが、そんな二匹の様子を気にも留めず、目の前にいるもう一人のシュバルツは動き続ける。

森の広場を右へ左へと動き回り、果ては踊り出し、近くの岩壁にまで登り始める始末。

シュバルツやアーティたちしかこの場にいないとはいえ、人間の少

年の姿をした何者かが普通の人間ならまず行わない行動をしているのである。

はっきり言って不気味だった。

というか、正直気色悪い。

アーティから見れば、まだ、シュバルツの姿で変な事をしていると捉えて気楽に構えられるのだが、シュバルツにしてみれば堪ったものではない。

自分と同じ姿の“ナニカ”が、普段の自分であつたらまずやらない様な事をよりにもよつて本人を目の前にして行つのだ。

気恥しいやら、悲しいやら、不気味やら、怒りやらで、混乱しそうだった。

せめて、自分と全く同じ行動を取ってくれた方がまだマシだ。

「……………モノズ、【ほえる】」

『ノー!!』

混乱一步手前のシュバルツが出した結論は、仕切り直し。

咄嗟の判断であつたが、その内容にシュバルツの混乱ぶりがよく表されている。

相手がポケモンであれば、野生であろうがトレーナーであろうがバトルを望むのがシュバルツという少年。

人間の不審者であれば逃げるかモノズに攻撃させるであろう。

だが、今回の不審人物……というか、不審シュバルツは明らかにどちらに分類するべきか迷う相手である。

自分の知らないポケモンが起こしている不可思議な現象だったら、攻撃してもあまり問題ないだろうが、もしも人間だったとしたらそういう訳にもいかない。

しかし、こちらに手を出してこないとはいえ不審者は不審者。

更に自分と同じ姿形をしているとあれば、放っておく訳にもいかず

……

もう、どうとでもなれ!!

という投げやりのな思考のすえの【ほえる】だった。

ポケモンなら逃げ出すだろうし、人間だったら……分からないが、とりあえず何らかの反応はするはずである。

指示を出されたモノズがシュバルツの呼びかけに応え、唸り声を上げる。

低い威嚇の様な唸り声から、一転し、唐突に声を荒げ怒りの咆哮とも取れる声走りまわっているシュバルツ?に向けて放つ。

可愛らしい外見だが、流石ドラゴンポケモン。

モノズの上げた咆哮に反応したのか、森の中から急に大量の鳥ポケモンたちが空へと逃げる様に飛び立っていく。

……ついでに、何故かモノズの隣にいたクルマユもトレーナーであるアーティの後ろに隠れてしまっている。

まあ、そんな将来を期待させる様な咆哮を聞かされたシュバルツ?はと言うと……

ビクッ!!

驚いたように……いや、実際驚いたのだろう。

全身を震わせ、身体を竦め、忙しない様子で周囲に視線を巡らせる
と全速力で逃げ出した。

よっっ!!

モ！！

訳の分からない脅威が逃げていく。
それだけでシュバルツとモノズは何とも言えない高揚感に包まれていた。

が、それもすぐに醒める。

何故なら、

「待て、そつちじゃない！！」

もう一人のシュバルツが逃げた方向は森の出口、しかも、姿はシュバルツのまま。

慌てて止めようとするも、後の祭り。

すでにシュバルツ？は森の出口から道路に出ており、どこかへ勢いよく走り去って行ってしまった。

「……………おい」

逃げて行ったもう一人の自分を見送ったシュバルツがポツリと呟く。
追い払うことに成功したのは良いのだが、この結果をシュバルツは予想していなかった。

逃げるなら森の中へ逃げろよ！！

そう叫びたいのを堪え、今からでも追いかけて連れ戻すべきか真剣に悩む。

【ほえる】で逃げ出したのであれば、十中八九ポケモンなのだろう
か放っておいても問題はないのかもしれない。
だが、

……俺の姿で色々やらかされると困るしな……

せめてライモンシティと逆の方向なら……と、若干楽観的な思考になってみる。

ついでに隣にいるアーティの方を見てみると、ポカンと口を開き、間抜けな呆れ顔を晒している。

「……はあ、まずはこっちが先か」

旅の仲間をこんな森の中で放っておく訳にもいかず、逃げたシュバルツ？を追うのを諦めてアーティを正気に戻すことにしたシュバルツだった。

? ? ? ? ?

「モノズ、【りゅうのいぶき】」

『ズー!!』

「避ける、ツタージャ!!」

『タージャ!!』

モノズの口から吐かれた猛烈な吐息がツタージャに襲い掛かる。

一週間前であれば直撃していたであろうそれをギリギリで宙に飛び上がることで避け、

「そのまま【たたきつける】！！」

『ツ、ター！！』

体全身を回転させ、落下の勢いも加えた自身の尾をモノズ目掛けて勢い良く振り下ろす。

「【ドラゴンテール】で迎え撃て！！」

『モノ！！』

自身の額を撃ち抜かんと上空から飛来していたツター ज्याの尾に、これまた身体を回転させ、下から振り抜いた自身の尾で応戦するモノズ。

互いに狙いを違えることなく相手に向かっていった尾の激突は、

『モ……』

上空からの勢いがある分ツター ज्याに軍配が上がった。

が、それでもモノズには特に堪えた様子はなく、ぶつかった衝撃に若干戸惑っている程度である。

堪えていなかろうが、隙は隙。

モノズのすぐ横に軽やかに着地したツター ज्याはすぐさま追撃を掛けようとして、

「はい、一旦終わり」

モノズのトレーナーであるシュバルツの声に遮られ、行動を止めた。

「ふうー、疲れた」
「ツター ज्याもお疲れ様」

『ツター』

シュバルツの声を聞くと同時にアーティがその場に座り込む。攻撃を止めていたツター ज्याも特に不満を持つわけでもなく、座りこんだ自身のトレーナーの側に駆け寄っていく。そんなアーティとツター ज्याのコンビとは逆に、

「お疲れ、モノズ」

『ノノノ』

シュバルツは自分からモノズに近寄っていつていた。近寄って来た自身のトレーナーにすり寄るモノズ。バトルをしていたのだから、分かりにくいが何だかんだで疲れているようだ。

「ツター ज्याの様子はどつだつた？」

『モ、モノズ』

「ふんふん、流石に一週間バトル漬けにすればある程度反応は良くなってるみたいだし、力も上がってるのか。
なら、そろそろ……」

シュバルツが自身の見地から判断した推測を口にしよつとすると、

「うわあっ!!」

突然アーティが叫び声を上げた。
視線をモノズからアーティの方へ向けると、彼に走り寄っていたツ
タージャが光に包まれていた。

「ああ、やっぱり」

それに驚くことなく嬉しそうな笑みをシュバルツは浮かべ、黙って
続きを見守ることにする。

『モノズ』

「ああ、お前は当分先だからな……やっぱり、羨ましいか？」

『……モノズ』

どこか拗ねたような表情のモノズを抱き上げ、撫でてやる。

それだけで拗ねた表情を一転させシュバルツに甘えるような仕草を
取るモノズ。

そんな彼らが見守る先で光に包まれたツタージャの変化は進んでい
た。

背は伸び、全体的にスラツとしたシルエットになる。

身体の中でもかなりの部分を占めていた尾の葉はやや縮まり、その
分背中の部分に葉の数が増えた。

暫くして身体が安定したのか、光が弾けるように消える。
すると、

『ジャノーー!!』

ジャノービーが光の中から姿を現した。

可愛らしいというよりは、どこか気品に満ちた美しい容姿に変わり、目つきが鋭くなる。

「ジャ、ジャノビー!!」

突然の進化に戸惑っていたトレーナーのアーティだったが、すぐさま我に返り進化したばかりのジャノビーを抱き上げる。

「おめでとう、これで目標クリア、だな」

モノズを地面に下ろしたシュバルツが近寄りながら話しかける。

「ああ、ありがとう、シュバルツ。

こんなに早く進化できたのは、君と、君のポケモンたちのお陰だよ」

『ジャノジャノ!!』

「別にお礼ならいらねえよ。

俺も、こいつらも色々試させてもらってたんだからな」

『ズー!!』

アーティたちのお礼をやんわりと断りながら、シュバルツは進化したばかりのジャノビーを眺めることにした。

「へえ、何と云うか、お前に似て……」

「何？格好良い？」

「いや、どことなく………へタレ臭が」

「酷い!!」

『ジャノ!?』

いくらなんでも進化したばかりのポケモンに対する感想としてはあんまりな言葉を呟きつつシュバルツは検分を続けていた。

そもそも、今はシュバルツとアーティが前述した怪異?と出会ってから早一週間が経過していた。

鍛錬初日にあんなことがあったものだから、二人ともこの森の広場で鍛錬を続けるべきかどうか迷ったのだが、他に場所もないのでそのまま鍛錬を行っている。

初日にとりあえずアーティと本気のバトルを終えたシュバルツは、一週間での当面の目標を決めて鍛錬に励むことにした。

第一の目標はアーティのパーティ全体の能力底上げである。

貰ったばかりのツタージャヤ、捕まえたばかりのフシデは仕方ないと思うが、昔からアーティの手持ちにいるクルマユの能力もかなり悲惨だったのだ。

なんせ、シュバルツとバトルして、フタチマルに三縦されかかるとらいだったのだから……

戦法云々もあるだろうが、流石にこれはマズイとシュバルツもアーティも思ったのだろう。

急遽アーティのポケモンのパワーアップを行うことにしたのだ。

ゲームで考えれば、単純にレベル上げに勤しむと考えるともらえればいい。

幸い、アデクから貰ったメラルバの卵があるから、将来的な火力については心配がいらぬ。

なので、各ポケモンの長所を伸ばす様にひたすらバトルをしたのである。

相手は、野生のポケモンが中心だったが、時にはシユバルツや、道路にいる一般のトレーナーとも闘ったりした。

その結果、見事に各々がレベルで換算すれば、5〜10は上げることができたのだ。

まあ、ゲームでの一週間とは違うのでしっかりと上がった方だろう。目標達成と（一先ずは）考えても良いはずである。

第二の目標は戦術・戦法把握。

シユバルツにしたってそんなに戦術を知っている訳ではないし、アーティもそんなに酷いわけではなかったのだが、問題はアーティのパーティメンバーにあった。

クルマユ、ツタージャ、フシデ、と全員が見事に炎に弱い。

かなりメジャーなタイプである炎に弱いということは、出会い頭の戦闘で不利になる可能性が高いということだ。

勿論、不利を逆手にとった戦法も存在するが、今のアーティにはそこまでの技量はない。

一先ず、倒されないよう、生き残っていけるような戦術を習得していくことにした。

幸い、状態異常を得意とするタイプでもあるので、持久戦の方向で考えることとなった。

……こちらは、まだまだ未完成。

今後に期待である。

そして、第三の目標が手持ちポケモンの進化である。

これは第一の目標とも重複しているが、コンテストやバトルにおける狙いがあったの敢えての育成方ではない限り、ポケモンは進化させた方が基本、強くなるのは言うまでもない事。

手っ取り早くバトルに勝ちたいのであれば進化させるにかぎる。

クルマユはハハコモリ、ツタージャはジャノビー、フシデはホイーガにそれぞれ一段階進めようというのが最後の目標だった。とりあえずクルマユは早々にハハコモリへと進化し、フシデも昨日辺りに無事ホイーガに進化できた。なので、後はツタージャだけだったのだ。そのツタージャもつい先程無事ジャノビーに進化し、この目標も見事に達成である。

これだけ聞くと、一週間シュバルツが自分の鍛錬は何もしていない様に聞こえるが、シュバルツはシュバルツで、普段のジム戦など勝たなければいけないトレーナー戦では試せない戦術や戦法を思い着くだけアーティとのバトルで試していたので、結果としてはプラスに落ち着いている。

そんなこんなで一週間の目標も達成したため今日の所は終了。後は今後の期間を定めてより細かいところを強化していくのみである。

「……それで、明日からはどうするの？」

ジャノビーと揃って落ち込んでいたアーティが思い出したかのようにシュバルツに尋ねてくる。

「そうだな……」

旅の仲間の問いに、ふざけた調子から一転、真面目な顔になって考え始めるシュバルツ。

ただし、腕の中にあるモノズの頭を撫でる手はまるで止まる様子はない。

頭を通って首、胴体、尻尾へ抜けた手はまた頭部に返って来て今度

は顎を撫で始める。

「三つの内、二つは目標を達成できたんだし、当面は互いに他のトレーナーたちとのバトル中心でいくか。」

ただ、それだけだと相手が捉まらない場合もあるし、午前中は、基本ここで鍛錬の続きで、午後は自由時間にしてその辺をうるついで遊んだり、自由にすれば良いだろ。

お前も芸術関係の事があるだろうし、俺も色々気になることがあるからな。

……それに、バトルで必要な基本はこの一週間である程度ぶち込んだから、後はお前が一人でどこまで発展させられるかにかかっている」

この一週間付きつきりまでアーティを鍛えていただけあり、現在のアーティの力量をシュバルツはほぼ間違いない正確に把握していた。シュバルツは、今のアーティの実力はそんじょそこらの一般トレーナーよりは上ではあるが、ソウリユウシティ周辺をうるついでいるエリートトレーナーには未だ敵わない程のものであると見ていた。まだまだ強いとは言えない実力だが、今後の成長の仕方如何によっては十分エリートトレーナー以上に強くなる可能性を秘めている。……というか、一週間そこらの鍛錬でこんなに速く成長しているのだから可能性としては十分過ぎる。

「……期間は？」

「大体、二〜四週間ってところかな。」

今迄が急過ぎたつてもあるから、ここらでじっくり見直す時間も必要だ」

アーティの方はあまりないかもしれないが、シュバルツとしては旅

に出てから分かった自分の実力、それに先日のアデクとの力試しで分かったことを一度整理して改めて自分の求める強さを考えてみるつもりだ。

……まあ、他にも折角色々あるのだから全部の施設で遊んでみたいという子供らしい願望もあったりするのだが。

「長過ぎない？」

だが、アーティとしてはそこまでこの街に逗留する時間が必要なのか疑問だった。

宿泊や食事はポケモンセンターがあるから構わない。

疑問は、シュバルツ程の実力がありながらそこまで時間を掛けて見直すことがあるのかどうか、ということだったりする。

「そうか？」

「うん、長いよ。」

「急かすつもりはないけどね」

「……なら、一、二週間。」

「或いは……」

「或いは？」

「フタチマルがダイケンキになるまで」

「は？」

一つ目の改定された期間を納得した様子で聞いていたアーティは、シュバルツが拳げた二つ目の期間にやや間抜けな顔をすることで答

えた。

「……ごめん、聞き間違いだったら悪いからもう一回言ってくれ
かい、シュバルツ？」

いや、その言葉を否定することにした。
が、

「フタチマルをダイケンキに進化させたら次の街に行く。

勿論、それまでに二週間経ったらその時点で次の街に向かうこと
にするけどな」

シュバルツは言葉を改めることなく、より詳細な内容を口にする。
それを改めて聞いたアーティは、

「……なんで？」

より一層頭を混乱させていた。

期間については良い。

“長過ぎるんじゃないか”と言った自分の発言をシュバルツが考慮
してくれたからだろう。

シュバルツにもシュバルツの考えがあったんだろうが、僕の意見を
汲んでくれたのだろう、とアーティは感謝しつつ納得していた。
が、

……二つ目の条件の意味がまるで分からない

別に期間が延びる訳でもないみたいだし、アーティ個人としては構
わないのだが……せめて理由ぐらい聞いておきたい。

「なんでって……この後の街以降は旅の障害になるような地形が多いから、移動用の技を色々覚えてくれるダイケンキがいてくれた方が良いつて、前言わなかったっけ？」

聞かれたシュバルツは逆に不思議そうな顔をして理由を告げる。

「ああ、そういえば前そんなことを言ってたような……」

それを聞いたアーティは“そういえば……”と何となく以前聞いた言葉を思い出していた。

アーティ自身内容は忘れてしまったが、確かにこの先は電機石の洞窟やネジ山、それ以外にも河を渡らないといけなかったりと自然の障害が多々存在している。

「……別に進化しなくてもも行けることは行けるけど……楽な方が良いだろ？」

「そりゃねえ」

残念ながら自分のメンバー達ではあまり役に立ちそうにないことを思い出し、密かにアーティは嘆息する。

今更な気もするが、やはり旅をするのなら一匹ぐらいその類の技を覚えたポケモンがいた方が良いのではないかと思ったり。

「だから、とりあえず二週間フタチマルの鍛錬に専念する。」

それで駄目なら、追々優先的に育てる方向でいくつもりだし」

「うん、そういうことなら、了解。」

とりあえず二週間頑張ってみて。

僕も足を引っ張らない程度には手伝うからさ」

なんせ、フタチマルがダイケンキになってくれれば、自分も楽がで
きるのだ。
手伝わないわけがない。

「おう。」

「じゃあ、今日は帰るか」

「だね」

互いにポケモンをボールにしまい、やや重い足取りで森の広場を後
にするシュバルツとアーティ。

そんな少年二人を、木々の間から一匹の黒い影が覗いていた。

【おまけ】

昼なお暗い【ハクタイの森】を二人の少女が進んでいく。

一人はスキップでも踏みそうなぐらい楽しそうに。

一人は脅え腰で崩れ落ちそうなぐらい不安そうに。

言うまでもないことかもしれないが、前者がメリッサ、後者がシロ
ナである。

「……………ね、ねえ、メリッサ……………まだ？」

先に行くメリッサの服の裾を掴みながら震える声でシロナが話し
かける。

その顔は薄らと青ざめており、目尻には涙さえ浮かんでいる有様。

「ンー……もう少しだと思っヨ？」

問われたメリッサの方はシロナとは対照的に、顔は赤味を帯び、今にも溢れんばかりの笑みを浮かべている。

「さっきからそればかり!!」

「そう言われてもネ〜」

私だつてこの森は初めてなんだシ」

メリッサ自身としては、以前から来てみたくはあつたのだが、あまり訪れる機会がなかったのだから来れず終いだつたのだ。

なので、連れて来てくれたシロナにはそれなりに感謝していたりする。

もっとも、当の本人はそんな旅の同行人の感謝など露知らず脅えまくっているのだが……

「うゝ、何もこんな夕方に来なくても……」

「しょうがないでシヨ。」

シロナが寝坊したんだカラ」

「そうかもしれないけど……」

ついでに言えば、【谷間の発電所】に寄り道をして見学などをしていなければ、今頃はハクタイシティに到着していただろう。

が、そんなことを今更シロナに言っても何も変わらないことぐらいメリッサには分かっている。

「そう言えば、この先にある洋館は出るんだってサ」

なので、少々話の方向性を変えてみたり。

「で、で、出るって何が!？」

それだけで金髪の少女は涙目になって自分に縋り寄って来るもんだから、

アゝ、もう。

シロナは弄りがいがあるんだカラ

メリッサとしては堪らない訳である。

否、こんな少女の姿を見れば、メリッサだけではなく全国の危ないお兄さんたちも歓喜することだろう。

間違っても攫ったりしてはいけない。

それは言うまでもなく犯罪だ。

遠くから庇護するように見護りましょう……通報されない程度に。

「やっぱり幽霊じゃない？」

「~~~~~!」

あっさり答えを言ってしまったメリッサの言葉に反応し、シロナが声にならない悲鳴を上げる。

「まあ、洋館には寄らないんだから心配ないっテ。

……この調子だとその洋館に泊まらないといけなくなるかもしれないけど……」

「それは嫌〜!!」

別段メリッサとしてはそれでも特に問題はなかったのだが（どうせ正体もゴーストポケモン辺りだろうから）。

メリッサの言葉を聞いたシロナは、先程までの脅え腰から一転、勇み足で駆けて行く。

「急いで、メリッサ!!」

「はいはい」

そんな分かりやすい少女の様子に苦笑しつつメリッサも後に続く。

当分自分が付いていてやらなければいけないのだと世話心丸出しの将来を見据えつつ。

……全く、メリッサったら!!

こんな時、シュバルツくんが一緒だったら……

駆けて行くシロナはふとそんなことを思い、自身でも知らぬ間に頬を朱に染めていたりしたのだが、後ろのメリッサには見えていない為、結局誰にもその考えはばれることはなかったのだ。

20 匹目 ジャノビー 特訓（後書き）

次回でもう一人の同行者も出せるはず……

21 匹目 ソロアーク 出会い（前書き）

実家に帰った時に、久しぶりにGBの金を起動したらデータが消えてた。

かなりショックではあるけれど、HGを既に持っているから別に構わないような……けど、小学生の時にかなり費やしたものが消えるとそれなりにへこみますな。

やり直してみただけど、既にレポート用の電池が切れてるのかレポート不可。

……なんだか虚しいのは私だけでしょうか？

21匹目 ソロアーク 出会い

早いもので、二人が期限を決めてから一週間と六日が経っていた。その間、シュバルツはフタチマルの育成に専念　モノズとルカリオの育成も日課分は行っている　し、アーティもしっかり自分の為すべきことをしてシュバルツのサポートをしてきた。それでも、

「やっぱり、二週間じゃ無理だったか……」

『フタ〜』

結局ダイケンキに進化は出来なかったようだ。

六日目の午前まで、という一区切りが終了したのだが残念ながら進化の兆候なし。

シュバルツとフタチマルは揃ってへこんでいた。

何となく分かっていた結果ではあったのだが、やはり目標を達成できないと悲しいものがあるのだ。

薄らと翳を背負いながら呆けている一人と一匹を眺めているアーティは、

うわー、シュバルツが壊れた……

コモ……

八ハコモリと一緒に生温かい視線を向けていた。

決して自分の考えていることを悟られないようにしながら。

一応弁護しておく、特訓が無駄だったという訳ではない。

しっかりレベルや能力は上がっているし、覚えた技も大量に増え、動きが機敏にもなった。
が、やはり目標は達成できていない。

「分かってたさ、分かってたけどな……」

『マ〜ル、マ〜ル』

一人と一匹の落ち込みっぷりは、傍から見ていると非常に鬱陶しいことこの上ない。

いくら目標が達成できなかったからとはいえ落ち込み過ぎである。これがポケモンリーグで敗退したとかだったらまだ分かるのだが、所詮、進化できなかっただけだ。

元々二週間やそこらでは厳しいことも分かっていたのだから、はつきり言ってアーティにはそこまで落ち込む理由がまるで分らなかった。

というか、段々シュバルツが馬鹿に見えてくる始末。

普段は歳不相応の貫禄を漂わせているシュバルツも、今は一人の馬鹿……訂正、間抜け。

日の光を浴びて輝くプラチナブロンドの髪も妙に白々しく見えてきて、髪の主である人物の間抜け振りをより克明なものへと変えていた。

「……まあ、明日はジム戦だし、今日はもう無理だよ。

次の街に着くまでに進化させれば良いんだから、あんまり気にしちゃ駄目だって」

『ハコ〜』

アーティはシュバルツを、ハハコモリはフタチマルを慰める。

正直、慰めるのも馬鹿らしかったのだが、放っておく訳にもいかない。

肩に手をやり、励ましの言葉を掛ける。

“傍から見ればどんな関係に見えるのだろうか？”と割とどうでもいいことを思い、即座に打ち消す。

どうせ、碌な関係には見られないのだろうから。

「ほら、シュバルツ……」

そろそろ叩いて無理矢理にでも引つ張り起こしてやるうかと、アーティが珍しく物騒な事を考えていると、

ガサガサッ！！

「「！？」」

『『！？』』

突然草むらが大きく揺れた。

落ち込んでいたシュバルツも、シュバルツのウザさがいい加減辟易していたアーティも、フタチマルとハハコモリも、咄嗟にその場から飛び離れ、音が聞こえてきた方向へと目を凝らす。

視線を向けた先にあったのは森の影が広がる闇。

一見ただけでは何が潜んでいるのか分からない。

シュバルツはフタチマルに、アーティはハハコモリに指示を出し、それぞれ臨戦態勢を取らせる。

フタチマルは 少々間抜けだが 貝を構え、ハハコモリは葉を揺らす。

ガササッ！！

「……いるな」

「うん」

再び揺れた草むら。

今度は二人ともはつきり視認した。

森の奥……と言うほどではないにしろ、この広場からある程度奥に進んだ草むらが揺れたのだ。

ガサツ！！

『アーク！！』

気付かれているのが分かったのだろう。

相手もこれ以上隠れようとはせずに、草むらを一際大きく揺らし、森の暗がりから陽光の指す広場へとその身を現した。

「こいつは……」

現れたポケモンに二人とも驚きを隠せない。

大人の女性程もある体躯は、四肢や顔は灰色の毛に覆われ、爪や髪は真紅に染まっている。

頭髪だと思えるほどの尋常じゃない量の鬘は爪と同じ真紅に彩られ、腰の辺りで水色のリング状のもので纏められているのが見える。

肩から胸元に掛けては黒い毛が生え、鬘の腰の辺りにあるリング付近の毛は、どういう原理でそうになっているのか分からないが、胸元と同じ黒色。

そして、何よりも眼。

灰色の体毛に覆われた顔にある双眸は鬘の真紅とは逆に、水色の光

を爛々と灯してシュバルツ達を睥睨していた。

「ゾロアークか!！」

『ばげぎつねポケモン』、ゾロアーク。

姿を様々なものに変化させるため、実際にゾロアーク事態を見たことがある人間は非常に少ない。

仮に出会っていたとしても、その時には文字通り他のポケモンに化けていたり、或いは人間に化けでいたりしていることがあるため、中々生のゾロアークを見ることはできないのだ。

それなのに、突然こんな場所にゾロアークが変化もせずに見れるなんてことがあるのだろうか……？

その事がシュバルツには不思議でならなかった。

故に、

チャキ

ポケモン図鑑で真偽の程を確かめてみようと思い、ゾロアークに向けてポケモン図鑑を翳してみる。

未だ完成には至っていない機械であるため、役に立つかどうかは非常に不安なのだが……さて。

『該当データ無し』

「……………」

……………役立たず

思いはするが決して口には出さない。

元々あまりデータが入っていないのは承知の上。

更に言えば、こんなレアポケモンがデータに入っていたら自分の仕事の意味が分からなくなる。
黙ってポケモン図鑑をしまい直し、現れたゾロアークを普段通りに隅々まで観察してみると、

……ん？

不審な点が一つ浮かび上がる。

こちらは臨戦態勢をポケモンが取っているというのに、あちらにはそんな様子が一切見受けられない。

普通、トレーナーの前に現れる野生ポケモンは総じて殺気立っているものである。

縄張りに入って来たり、いきなり攻撃を仕掛けたり、と、その身に危険が及ぶのだからそれも当然である。

大抵のポケモンは逃げるか、反撃する。

前者は放っておくことが多いが、たまに目当てのレアポケモンだったりすると追いかける。

後者はバトルに突入。

……たまに手持ちのポケモンが負けて大怪我を負う人もいるが、その辺りは自己責任で。

なのに、このゾロアークは不自然なまでに自然体であった。

それがアーティヤポケモンたちにも分かったのだろう。

ここにいるゾロアーク以外の全員が戸惑っている。

「……お前、何だ？」

シユバルツが漏らした言葉は、その時その場にいた誰もが考えていた事だ。

それ故、無闇に攻撃を仕掛けるわけにはいかない。
下手に相手を刺激して丸く収まるものが収まらなかつたら、そっちの方が面倒なのだから。

『……………』

問われたゾロアークは言葉が分かっているのか、眼を細め、

『ロアー！！』

何やら大声で叫んだかと思うと、勢い良く両手？を振り上げた。
咄嗟にシュバルツたちが身構えるが、それより速くゾロアークは腕を振り下ろした。

カツ！！

振り下ろした腕から黒い闇が漏れ出で、周囲の森を一瞬にして塗り替える。

塗り替えると同時に、猛烈な風がゾロアークを中心に巻き起こり周囲の物体全てを吹き飛ばさんとばかりに荒れ狂う。
咄嗟に両腕で顔を守りながら考えを巡らせる。

…………… どういうことだ！？

殺気は一切なかった。

なのに…………… いや、相手がゾロアークなら、俺たちが化かされているだけということも……………

あまり考えたくないが、こうなってしまうと最悪の事態も覚悟しておいた方が良いか、とシュバルツは考える。

野生のポケモンが力を揮う機会など、そう多くはない。

力を揮うのは、縄張り争いや防衛、雌の奪い合い、そして、狩りの時だ。

くそ、マズイな。

この技が何なのか知らないが、これを防げなかったら最悪死んでるぞー！！

現状、口を開く余裕もない。

二人とも、ただ自分の身を守るだけで精一杯なのである。

一応、ポケモンたちも自分の意志で防衛態勢を取ってはいるが……皆、必死でゾロアークの攻撃から身を守る。

と、唐突に風が止み、闇が晴れた。

腕の隙間から光が差し込んでくる。

「「……？」」

『『……？』』

腕で覆い隠していた顔を上げ、周囲を見渡す。

一見したところでは特に大きな変化が起きていたわけではない。

周囲は変わらず森の広場だし、目の前には自分たちのポケモンと彼らに相對しているゾロアーク、隣にはやや表情を強張らせたアーティが先程と同じ状態にいる。

攻撃？を仕掛けてきたゾロアークは腕を振り下ろした体勢のまま動こうとしない。

見たところフタチマルもハハコモリも攻撃を受けた様子はない。

精々、シュバルツやアーティと同じように突如起きた突風に中てられた程度だ。

「……フタチマル、【つるぎのまい】」

『フタツ!!』

いきなり仕掛けられたのだからやり返しても良いと思うが、とりあえずシュバルツはフタチマルに能力上昇技を指示した。今は特に何も起きていないようだが、この後ゾロアークが襲いかかっつてこないとも限らない。

「ハハコモリ、【にほんばれ】」

『モリ!!』

アーティはアーティで指示を出すが……

「え?」

天気が変わらない。

【あまごい】や【あられ】などの実際に物が降って来る天候変化の技よりも変化が分かりにくい技ではあるのだが……全く日差しに変化が起きないのはおかしい。

『ハ、ハハ?』

技を出したハハコモリの方も戸惑っている。

確かに技は使えたはずなのに、効果が起きない。

ハハコモリ自身、自分の身体に変化が起きていないことからそれがよく分かる。

【にほんばれ】はこの一月でよく使っていた技であるだけに、今更失敗するとは思ってもいなかった。

隣で見っていたシュバルツが、

「一体、何が……」

どうなってるんだ、と続けようとして声を呑んだ。

それは、アーティも同様。

戸惑いはそのままに、顔を固まらせた。

何故なら、

ガサツ

草むらを掻き分ける音共に一匹のポケモンが新たに姿を現し、自分たちをすり抜けて（……………）広場に飛びだして行ったからだ。

より具体的に言うのなら、飛び出してきたポケモンはゾロアークをモノズと同じサイズまで収縮したかのようなポケモン。

色合いはゾロアークとほぼ同じだが、二足歩行ではなく四足歩行である。

鬣はゾロアーク程長くはなく、頭部に納まる程度。

『わるぎつねポケモン』ゾロアだ。

シュバルツたちを文字通りすり抜けたゾロアは、燦々と陽光が降り注ぐ森の広場で元気一杯に遊び回っている。

時には川に入り、鼻の匂いを嗅ぎ、それはもう楽しそうに。

そんなゾロアが突然何かに気付いた様に周囲を見渡し始める。

と、見つけたのかゾロアの視線が森の入口の方向に向けられる。

シュバルツとアーティが黙ってゾロアと同じ方向に視線を向ければ、

「え……？」

「なんでぞ……?」

そこには一月ほど前にも見たのと同じような光景があった。

森の入り口から広場への道を歩いているのは、間違いなく自分たち、シュバルツとアーティだ。

一緒に歩いているポケモンがモノズとクルマユで今とは違っていたり、来ている服が違っていたり、今の自分たちとは明らかに違うのだ。

『ま、気楽に行こうぜ。』

初日から肩肘張られててもこっちが困る』

『モ!!--』

『う、うん。』

『そうだよね』

『よし、その意気だ』

会話も自分たちがいつぞやしていた様な内容だ。
というか、

「……これって一月前の俺たちか?」

「うん。」

「それっぽいよね」

戸惑いつつも口を開く。

何故目の前にこんな光景が広がっているのか、などという疑問は答

えが分かっているもので今更言うつもりはない。
恐らくこの光景は、ゾロアークが作り出した幻覚なのだろう。
今はその幻覚を使って一月前の出来事を再生しているのだ。
その為、二人が言葉を交わしている間にも事は進んでいく。
歩いているシュバルツたちが見えたのか、広場にいるゾロアが咄嗟
にその身を変化させた。
そう、歩いてやって来たシュバルツの姿に。

「あー、成程。

あいつは俺に化けたゾロアだったのか」

「だから、モノズの【ほえる】で逃げたんだね」

一月前の事を思い出し、目の前の光景で補完しながら話を進めて行く。

その間に、目の前のシュバルツが固まるわ、シュバルツに変化したゾロアが遊び回るわ、モノズの【ほえる】で道路の方に逃げて行くわと以前あった通りに物事は進んでいく。
そこまで来て、

「……………もしかして」

珍しくアーティが何かに気付いたのか、

「ねえ、ゾロアーク？」

黙って一步も動かずにいたゾロアークに話しかける。
話しかけたアーティの顔は、真剣そのものだった。

『ゾア？』

それに首を動かし、アーティの方を見ながら反応を返すゾロアーク。

「ゾロアが帰って来ないの？」

『アーク』

アーティの具体的な内容が伴った問い掛けに、ゾロアークは頷き返す。

非常に心配そうな顔つきになりながらも、決して媚びるような視線を見せないのは流石だろう。

「……あの日、モノズが【ほえる】をした日からなら……大体一月、か。

マズイな」

アーティの一言で何故ゾロアークがこんなよく分からない真似をしたのか察したシュバルツは頭を悩ませる。

今回ばかりは自分にも非があるのが分かっているのだ。

ゾロアが自分に化けたのは自衛のためだろうし、縄張りに入っていたのは自分たちだ。

それを【ほえる】で追い払い、その場で一月近くも毎日来ていればゾロアは縄張りを奪われたと思うだろう。

一度戻って来たとしても、すぐに出て行き帰ってこない可能性の方が高い。

環境破壊と似たようなものだ。

ゾロアが逃げた方も問題だった。

森の中に逃げるのなら何の問題もなかったのだが、ゾロアは街の方に逃げた。

野生のポケモンが街に迷い込むことは多々あるが、一月も自身の住処に帰っていないのは問題だ。

住処を定めないポケモンや、ゾロアークのようにある程度力のあるポケモンなら問題ないのだが、ゾロアは恐らくまだ子供。

一匹で生きていくにはかなり不安が残る。

「で、ゾロアーク」

『ゾロ?』

「俺たちがゾロアを見つけてこの森に連れ帰ってくればいいのか?」

こんな光景を見せて来たのだからほぼ間違いなく自分たちに探せとということなのだろう、とシュバルツは当たりを付けたのだが……

『ロアロア』

ゾロアークは首を振る。

間違っではないが、正解でもないと言っている様な表情だ。

「……なら、なんでこの光景を俺たちに見せた」

フタチマルをボールに戻しながら、シュバルツはゾロアークに問いかける。

自分がゾロアとゾロアークの団欒を壊してしまったのだから、可能な限り協力してやりたかった。

『ゾア』

シュバルツの問い掛けに黙って彼の腰に付いているボールを指差す

ことで返事を返すゾロアーク。
いつの間にか一月前のシュバルツたちは消えており、広場には自分たちとゾロアークしかいない。

「……もしかして、僕らと一緒に旅をしながらゾロアを見つけないってこと?」

『アーク!』

ハハコモリをボールにしまいながら言ったアーティの言葉にゾロアークが反応し、勢い良く首を縦に振る。

「……マジで?」

シュバルツとしてはこの展開が信じられなかったのだが、どうもゾロアークの様子を見る限り嘘は言っていないようだ。

しかも、縋るような目つきでシュバルツの方を見ている。

恐らく、アーティではなくシュバルツのボールに入りたいのだろう。

「う……」

『ゾロア……』

別にシュバルツだって協力するのは構わない。

ただ、もし自分たちの向かう方向とゾロアークの行きたい方向が逆だったらと思うと、陰鬱とまではいかないが、やはりどこか嫌な気分になるのだ。

「良いじゃん、協力してあげなよ」

「……分かった。」

ただ、俺たちと一緒に来るんならバトルもしてもらっぞ？
それでもいいか？」

『ゾアゾア！！』

「お前との協力関係はゾロアを見つけるまでで良いか？
ゾロアを見つけたら逃がしてやるから」

『ゾロ！！』

そんなこんなで、期間限定とはいえゾロアークが仲間になった。
期限はこの森から逃げたゾロアを見つけるまで。
それまではシュバルツの新たな手持ちに加わり、彼らの旅を手伝う
こととなる。

？
？
？
？

【翌日】

「で、勝てそうかい、シュバルツ？」

凡そ一月近く滞在していたポケモンセンターを後にしてライモンジ
ムへと向かう道すがらアーティがシュバルツに訊ねる。

(一時的とはいえ)新たに仲間に加わった一匹を気にしつつも、

「ああ、多分いけるだろ。」

約一ヶ月この街にいたんだからな。

情報収集は今迄にないくらい完璧だし、ポケモンたちの体調も万全。

後は……あのおっさんがどれだけ変わっていてくれないかな」

シュバルツはこの一月で調べた事を思い返しながらか戦力分析を行っていた。

ライモンジム

ジムリーダーはマンサニー。

性別は男、年齢は35歳。

使うタイプは電気がメイン。

バトル形式は3on3のシングルバトルで、3匹中2匹が先に負けた方の負け。

持物可、回復などの道具不可である。

切り札はゼブライカ。

他の手持ちはエモンガなどのイツシュ地方の電気ポケモンである。娘がいる。

そして、

「……年の割に大分遊んでる人だからな」

以前会った時のふざけぶりを思い返して若干遠目になるシュバルツ。

……子供相手に本気でボールを投げる大人がどこにいる。

「へー、会ったことあるんだ」

特に驚いた様子もなく話を続けるアーティに、

「ああ、正直あの人がジムリーダーだってあまり認めたくはないんだが……」

やや慚然とした表情で返事をするシュバルツ。

どうしたって自分の父と比べるとジムリーダーに向いていないんじゃないかと思えてしまうのだ。

……実際は、かなりのベテランなので今更その実力を疑うことはないのだが。

そうこうしているうちに街の中心部を抜け、橋を渡りジムのある遊園地へとさしかかる。

平日だということにかなりの人が闊歩している。

やはり家族連れやカップルが多く、男子二人の少年コンビは見渡す限り、シュバルツたちだけだ。

ジムがあるためか、この遊園地は入場料はタダだが観覧車やジェットコースターなどに乗ろうとするとお金を払わないといけなくなってくる。

一応一日パスポートとかもあつたりするが、今の二人には関係ないだろう。

人を避けながらジムに向かって話しながら歩いていると、

「エエエエー……！！」

「ん？」

「え？」

何やら甲高い少女の声自分たちの向かっている方から聞こえてきた。

聞こえる声が確かなら、泣いているように思える。

「何だろう……」

「さあ……」

二人揃って首を傾げつつも足は止めない。

段々周囲の人間が少なくなっていくことに若干の心細さを覚えたけれども仕方ない。

目的地がそちらなのだから。

「ウエーーーーー……ンッ!!」

「ねえ、フウロちゃん、一旦パパの所に帰ろう!!」

そうすればきつとなんとかなるよ!!」

だから、ね?」

泣いている少女と、その少女を慰めているもう一人の少女の姿が見えてきた。

片方は赤味がかつたどこか癖のある茶髪を型の辺りで切りそろえた少女、もう一人は背中の中ほどまで金糸の様な眩い金髪を伸ばした少女だ。

どこかで会ったことがある様な……

会話もはっきりと聞き取れるほどの距離。

必死に泣いている少女をもう一人の少女が慰めているけれど、もう一人の少女はまるで泣き止む様子がない光景もよく見える。

シュバルツ達が近づいて行っても泣き止むどころか、より一層声を張り上げて泣き続ける。

……まさかなあ

シュバルツとしては、その少女二人を見た瞬間、踵を返して一目散に走り去りたかった。

別に二人のことが嫌いだからじゃない。
ただ、ジム戦の前に会うとどうしてもやる気が失せてしまうのだ。
今からでも今日はやめて明日また挑戦し直そうかと思うのだが……

ここでスルーすると、アーティが何言ってくるか分からんし……

自分の隣にいる少年は既に駆け寄る気満々だ。
自分が止めたところで止まりはしないだろう。

「……はあ」

避けられない運命を感じ取り、シュバルツが溜息を吐いていると、

「……………」

「……………あ」

シュバルツと慰めていた少女の視線がぱっちり重なった。
慰めていた声を止め、ゴシゴシと自分の目を擦る金髪の少女。

今ならまだ逃げれる

先程までの考えはどこへやら、即座に逃げようとしたのだが、

「シュバルツお兄ちゃん!!」

金髪の少女に呼び止められる。

慰めていた時の困り切った顔はどこへやら、顔は輝かんばかりの笑顔で溢れている。

「い!?!」

金髪の少女の呼びかけについ顔が引きつるアーティ。

肝心の呼ばれた方のシュバルツはといえば、

「……やあ、久しぶりカミツレちゃんと、フウロちゃん」

特に逃げるような素振りには即座に消し去り、二人の少女に近寄ると視線を合わせる形でしゃがみ込み、早々見ることでできない優しいな笑みで二人に話しかけていた。

ただし、後頭部にダラダラと冷や汗を掻きながら。

「……シュバルツお兄ちゃん?」

泣き喚いていた赤みがかった茶髪の少女が金髪の少女の挙げた名前と、自分に掛けられた少年の声に反応して顔を上げる。

泣き続けていたのだらう、目は真っ赤。

顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになり、以前自慢していた赤みがかった茶髪も汚れてしまっている。

どこか舌つ足らずな口調だが、聞き取れないほどではない。

「ホントだ、お兄ちゃんだ〜!!」

「うわっ!?!」

シュバルツの顔を見た少女は、先程までの泣き顔はそのままに、勢い良くシュバルツに抱きついた。

顔をシュバルツの胸に埋め、両腕を背中へと回し力の限り抱き締め
る。

当然シュバルツの服に涙や鼻水がベッタリと付くことになるのだが、
付けた本人は気にしていない。

そんなことよりも、久しぶりに会えた少年に甘えることの方が大事
なのだから。

一方で、

……結局捕まった

表には出さないものの、内心、落ち込みまくるシュバルツであった。

21 匹目 ソロアーク 出会い（後書き）

そついや、金は無理だったのに、緑は普通に動いた事実。

懐かしさのレベルでは緑が上だけど、金の方がやり込んでたから、やっぱり虚しかったり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5446p/>

幼馴染には負けられない！！

2012年1月14日06時54分発行